

Title	日本語と中国語における「感謝の言語行動」の対照研究
Author(s)	李, 華勇
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50573
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学

博士論文

題目：

日本語と中国語における「感謝の言語行動」の対照研究

提出年月 2014年6月

言語文化研究科 言語社会専攻

氏名 李華勇

要 旨

対照言語学は言語と言語の対照研究を通じてそれぞれの言語の特性を明らかにし、また、言語の本質を捉えようとする言語学の一分野である。対照研究は、主にそれぞれの音声と音韻、文法、語彙、言語行動などを研究対象とし、その中でも言語行動の対照研究は対照言語学領域の重要な分野として注目されている。

言語行動はメッセージを伝える道具であるだけでなく、文化の担い手でもある。言語行動は、所属している社会に根ざしているルールや規範などと緊密につながり、文化の側面もある程度表している。したがって、言語行動の対照研究を行うことで、その社会の文化の側面も観察できる。これまで言語行動の対照研究は、数多くの分野で行われてきた。例えば、不同意の表明、ほめの表現、不満表現、勧誘表現など、話し手の意思を伝達する多数の言語使用が対照研究の分野で扱われている。

「感謝」も普遍的な言語行動の一つとしてよく研究されている。感謝の言語行動はどの国の言語にも存在し、日本語や中国語も例外ではない。どの文化圏でも、感謝の表現を適切に使うことで、よりよい人間関係を維持することができる。これまでの研究の中で、日本語における感謝の研究と、日本語と他言語における感謝の研究が数多く行われてきた。その中でも、感謝の気持ちを表す際の、「感謝表現」と「謝罪表現」の選択に絞って行われた研究が大半を占めている。

日本語における感謝の言語行動に関わる研究の中では、謝罪表現が感謝場面で使用されることがよく論じられている。先行研究の多くは利益と不利益、補償方法、感謝と謝罪の交替、負の意識などの視点から、感謝場面での謝罪表現の研究を行っており、これらの研究は、このような謝罪表現を感謝場面の表現の一つとして捉えている。このような言語現象は、すべての感謝場面で有効というのではなく、社会的役割に相当する行動に対する感謝の場合は、謝罪の言語行動をとらないと指摘されてきた。また、日本社会では「再度の感謝」が頻繁に使用されているのに対して、中国語ではあまりないと指摘されてきた。対照研究の中で、特に日中両言語の対照研究では、感謝場面の差が一定の程度で明らかになっているが、感謝場面で謝罪表現がどのように使用されているか、どのような形で存在しているか、及びなぜ単独の謝罪表現が日本語にはあるが、中国語にはないのかという課題が依然として未解決の状態になっている。

本論文は日中両言語における感謝の言語行動のストラテジーとその特徴について対照研

究を行う。さらに、詳細な研究のなかった「再度の感謝」について考察する。日中両言語の言語行動の対照研究は互いの言語学習者に日中両言語の共通点と相違点をより詳しく認識させると同時に日中両言語の背後にある文化をも理解させる一助としたい。加えてこの対照研究を通じて、感謝の言語行動の普遍性につながるような枠組みを考える。

各章の構成は以下の通りである。第一章では、研究の背景と目的に言及する。第二章では、研究の枠組みである、言語行動の対照研究、配慮コミュニケーションなどの理論的な背景を概観する。また、「感謝の言語行動」の定義及び種類などの特徴を概述し、本研究で扱う「感謝の言語行動」を定義する。さらに、日本語の感謝表現やその言語行動に関する研究、日本語と他言語との感謝表現やその言語行動に関わる対照研究、及び「再度の感謝」に関する従来の見解について概観する。最後に感謝の言語行動に関する先行研究をまとめ、その成果と課題を踏まえ、本論文の研究課題を提示する。第三章では、先行研究に基づき、研究課題を解決するための本研究の研究手法とデータ収集について述べる。また、採取したデータを整理し、感謝の言語行動における表現のバリエーションをまとめ、分析を行う。また、第三章では、収集したデータに基づき、日本語と中国語における感謝の言語行動の特徴を考察する。第四章は、感謝の言語行動に関する枠組みを提案して、第三章で収集したデータをこの枠組みの下で分析、考察する。第五章は「再度の感謝」を取り上げ、「再度の感謝」と「その場の感謝」との相関、「再度の感謝」に関与する要素などを明らかにする。また、「再度の感謝」と鏡像関係にある「事前の感謝」についても触れる。

本論文は、日中両言語における感謝の言語行動の使用表現を収集する際に、テレビドラマのセリフを研究データとして、感謝場面の表現のバリエーションを考察した。また、日中両言語において、謝罪表現の感謝場面での使用を解明するために、表現を「感謝型表現」、「謝罪型表現」、「その他の表現」、「混在型表現」に分類した。データの分類から、従来の研究で「中国語の感謝場面で単独の謝罪表現の使用はない」という指摘はある程度正しいが、謝罪表現を含む「混在型表現」の使用が中国語にあることが明らかとなった。

データを分析し、日中両言語の感謝表現の特徴を考察したあと、「感謝の言語行動に関する枠組み」を提案した。まず、「話し手S、聞き手H」を設定して、両者の「プラス（＝利益）」と「マイナス（＝不利益・負担）」を（+）（-）の記号で示す。また、「話し手の行為によってもたらされた状況」と「聞き手の行為によってもたらされた状況」を、それぞれ[S]と[H]で示す。以上の状況で、「SはHに対して、（+）と（-）を意識して、何らかの言語行動を行う」という前提条件を設定し、八つの可能な組合せを設定した。

典型的な感謝の言語行動の適用図式は「S (+) , \boxed{H} (+) 」と「S (+) , \boxed{H} (-) 」であり、謝罪の言語行動の適用図式は「 \boxed{S} (+) , H (-) 」と「 \boxed{S} (-) , H (-) 」である。従って、感謝の言語行動は、少なくとも「S (+) と \boxed{H} 」という要素、そして、謝罪の言語行動は、少なくとも、「 \boxed{S} とH (-) 」という要素が必要であることを指摘した。さらに、言語行動においては、状況把握のための全体的・固定的な側面と、個々の発言の背景にある個別的・流動的な側面があることを主張した。すなわち、言語化においては、それぞれの組み合わせ内の一部の要素のみに注目するという視点が必要であると提案した。

上記の抽象化した枠組み・図式と個別的・流動的側面を示す記号を導入することで、従来気づかれなかった現象も浮き彫りになった。まず、日本語でも中国語でも感謝の場面では、「{S (+) } , \boxed{H} (-) 」という注視が可能であり、それが謝罪表現として言語化することによって、両言語の感謝場面で謝罪表現が用いられる事実を説明することが可能となった。さらに、感謝場面にとって必須の「S (+) 」という要素の言語化に関する制約によって、日本語の「すみません」と中国語の「不好意思」の単独使用に関する差が説明できる可能性について指摘した。

さらに、日本語の「すみません」（「謝罪型表現」）と「ご迷惑」類と「お疲れ、ご苦労」類と、中国語の“麻烦”“辛苦”“問責”“破費”類の表現が、同一の図式（{S (+) } , \boxed{H} (-) ）で解釈できるという事実や、「ご迷惑をおかけしました」と“给你添麻烦了”が「すみません」に類似する機能を持ち、単独で使用されても問題ないという事実も指摘し、日本語対中国語という全体的なレベルではなく、個々の表現に則した細かな比較が必要であることを強調した。

また、「その場の感謝」の延長線に位置する「再度の感謝」は、「感謝型表現」・「プラス指向表現」と同様、同一の図式で解釈できる。しかし、「再度の感謝」の注目条件が時間の流れとマイナスの回避などの影響を受け、「その場の感謝」と異なる特徴があると考えられ、本研究では、「再度の感謝」に関する研究データはテレビドラマのセリフからの入手が難しいため、アンケート調査を行い、データを収集し考察することにした。考察した結果、“①「その場の感謝」と「再度の感謝」の間に、頻度の相関性は存在しない。②一般的には、行為をしてもらった人の利益が、大きければ大きいほど、「再度の感謝」をする傾向が強くなる。③個人的付き合いのある相手の場合は、相手との「社会的距離」が大きければ大きいほど、「再度の感謝」をする傾向が強くなる。個人的付き合いのない相手の場合は「再度の感謝」は生じにくい。④中国語において、「再度の感謝」は存在しているものの、

使用頻度は日本語より低い。⑤「再度の感謝」の表現について、日本語においては「先日はありがとうございます」のような慣用表現がよく用いられる。中国語においては慣用表現が定着しておらず、「再度の感謝」表現のバリエーションが豊かである”ということが明らかになった。

要 旨

对照语言学是通过语言和语言的对照研究来弄清各自的语言特性，也是研究语言本质的语言学的一个领域。对照研究是主要关于各自语言的语音和音韵、文法、词汇、语言行动等的研究。其中，语言行动的对照研究作为对照语言学领域重要的一环倍受瞩目。

语言行动不仅是传达信息的工具还是文化的载体。语言行动，与根植于其所属社会的规则和规范等紧密地相连，某种程度也表达着文化的侧面。因此，通过进行语言行动的对照研究，可以看到社会的文化侧面。关于语言行动的对照研究，在许多的领域开展。譬如，传达不同意的表示，赞扬的表达，不满的表达，劝诱的表达等等。

“感谢”作为普遍的语言行动之一也被广泛研究。感谢的语言行动无论在哪个国家的语言中都存在，日语和汉语也不例外。无论在哪个文化圈，恰当地使用感谢的表达，都能保持良好的的人际关系。先行研究中，有许多关于日语的感谢的研究、日语与其他语言的感谢的对照研究。其中，围绕“感谢表达”和“谢罪表达”的研究占多数。

在日语的感谢语言行动研究中，谢罪表达在感谢场面的使用倍受关注。许多先行研究是从利益和不利、补偿方法、感谢和谢罪的交替、负的意识等视点，进行感谢场面谢罪表达的研究。在这些研究中，谢罪表达被理解为感谢场面的表达之一。然而，这种语言现象并不是在所有的感谢场面中有效，对于某种社会职能的行动的感谢，一般不使用谢罪表达也被指出。还有，在日本社会“再次感谢”频繁的使用，在中国却很少见。对照研究，特别是日中两语言的对照研究中，感谢场面的不同点已经在一定的程度上被弄清，不过，在感谢场面谢罪表达怎么使用，以怎样的形式存在，以及为何日语中有单独的谢罪表达，汉语中却没有这样的表达等课题依然亟待解决。

本论文在关于日中两语言的感谢语言行动的方法以及特征方面、以及对尚未有详细研究的“再次感谢”进行考察。日中语言行动的对照研究能够使彼此的语言学习者更清楚地认识日中两语言的共同点和不同点的同时，也对学习者理解日中两语言背后的文化有一定帮助。此外，通过此对照研究，也可考察与感谢的语言行动的普遍性相关的框架。

关于各章中的内容，第一章阐述研究的背景和目的。第二章概述研究的框架、语言行动的对照研究、配慮交际等理论背景。还有，概述“感谢的语言行动”的定义及种类等特征，对本论文所考察的“感谢的语言行动”进行定义。并对“日语的感谢表达和相关语言行动的研究”，“日语和其他语言感谢表达和语言行动的对照研究，以及“再次感谢”的先行研究中的见解进行概括。最后，总结感谢的语言行动的先行研究，以先行研究成果和课题为背景，

提出本研究的研究课题。在第三章中，基于先行研究，为解决研究课题，对本研究的研究方法及数据采集做出说明。还有，整理收集的数据，对感谢的语言行动的表达多样性进行总结和分析。根据收集的数据，考察感谢的程度的表示、亲切度的表示、感谢的回答等日语及汉语感谢的语言行动的特征。第四章，提出与感谢的语言行动相关的框架，在这个框架下分析，对第三章收集的数据进行考察。在第五章中将“再次感谢”和“当场的感谢”的相关，“再次的感谢”相关要素等进行考察分析。还有，作为“再次感谢”的反面的“事前的感谢”进行简单地考察。

本论文在收集日中两语言的感谢语言行动的使用表达时，把电视剧的台词作为研究数据，考察感谢场面的表达的多样性。为了弄清楚在日中两语言中谢罪表达在感谢场面的使用，将数据分为“感谢型表达”、“谢罪型表达”、“其他表达”、“混合型表达”。从数据的分类可以判断，先行研究中“汉语的感谢场面没有单独谢罪表达使用”这个观点在某种程度上是正确的，不过在汉语中有包含谢罪表达的“混合型表达”的使用却是事实。

分析数据，考察日中两语言的感谢表达的特征以后，提出“有关感谢的语言行动的框架”。首先，将说话人定义为S，听话人为H，再将两者的「正(=利益)」和「负(=不利·负担)」用(+)和(-)的记号来表示。还有用[S]と[H]分别表示“由说话人的行为带来的状况”和“由听话人的行为带来的状况”。S对H，有(+)和(-)的认识并进行某种语言行动。在以上前提下，可以设定八个组合。

典型的感谢语言行动的适用图表是「S(+), [H](+)」と「S(+), [H](-)」，谢罪的语言行动的适用图表是「[S](+), H(-)」と「[S](-), H(-)」。

因此，可以指出，「S(+), [H]」是感谢的语言行动的必要要素，「[S]とH(-)」是谢罪的语言行动的必要要素。也可以进一步认为，在语言行动中有把握状况的全部的·固定的侧面和在各个词语背景下的个别的·流动的侧面。即，可以提出，在语言化中只对组合中一部分要素关注的视点是很必要的。

由于导入上述的抽象化了的框架·图表和表示个别的·流动的侧面的记号，以前尚未注意到的问题也突显出来。首先，无论日语还是汉语，在感谢的场面，都可能会注目「{S(+)}」，「[H](-)」这个要素，通过这要素作为谢罪表达的语言化，可以说明在两语言的感谢场面中谢罪表达都可以使用的事实。并且，也可以指出，通过对感谢场面来说所必须的「S(+)」这个要素是否有义务进行语言化的制约，可以解释日语的「すみません」和汉语的「不好意思」的单独使用上的不同。

最后，位于“当场的感谢”延长线上的“再次感谢”，与“感谢型表达”“正指向表达”同样，可以用同样的图表解释。可是，「再次感谢」的关注条件受到时间的流动和对负面的回

避等影响，可以想像与“当场的感谢”有着不同的特征，在本论文中，由于“再次感谢”的研究数据从电视剧的台词中不易收集，所以进行问卷调查，收集数据考察。其结果是，①“当场感谢”和“再次感谢”之间，不存在频度的相关性。②一般来说，说话人得到利益越大“再次感谢”的倾向就越强。③对于有个人交往的对方，与对方的“社会距离”越大“再次感谢”的倾向也越强。对于没有个人交往的对方难以产生“再次感谢”。④在汉语中也存在“再次感谢”，不过使用频率较比日语低。⑤对于「再次感谢」的表达，日语的“先日ありがとう”作为惯用表达经常被使用，但在汉语中作为惯用表达却没固定下来，“再次感谢”表达也很丰富。

目 次

はじめに	1
第一章 研究の概要	3
1.1 研究の背景	3
1.2 研究の目的	4
1.3 論文の構成	4
第二章 研究の枠組み、「感謝の言語行動」に関する先行研究及びその問題点	6
2.1 言語行動と対照研究	6
2.2 配慮言語行動の理論と対人配慮の方法	7
2.2.1 配慮言語行動とは	7
2.2.2 対人配慮の方法	8
2.3 感謝の言語行動	9
2.3.1 言語行動としての「感謝」	9
2.3.2 感謝と他の言語行動の比較	11
2.4 「感謝の言語行動」の定義	12
2.5 「感謝の言語行動」に関する先行研究	13
2.5.1 日本語の感謝表現やその言語行動に関わる研究	13
2.5.1.1 理論的及び概念的的研究	13
2.5.1.2 実証的研究	18
2.5.2 感謝表現やその言語行動に関わる日本語と他言語との対照研究	21
2.5.2.1 日英の対照研究	21
2.5.2.2 日韓（朝）の対照研究	23
2.5.2.3 日中の対照研究	24

2.6 「再度の感謝」の先行研究	25
2.7 問題点と研究課題	27
第三章 日本語と中国語における感謝の言語行動の特徴	29
3.1 研究方法	29
3.1.1 言語行動に関する研究方法の概観	29
3.1.2 本論文の研究方法	30
3.2 研究データ	32
3.2.1 感謝型表現	37
3.2.1.1 日本語の感謝型表現	37
3.2.1.2 中国語の感謝型表現	43
3.2.2 謝罪型表現	53
3.2.3 その他の表現	54
3.2.3.1 プラス指向表現	54
3.2.3.2 マイナス指向表現	59
3.2.4 混在型表現	62
3.2.4.1 「謝罪型+感謝型」	62
3.2.4.2 「感謝型」+「その他」	64
3.2.4.3 「謝罪型+その他」	65
3.2.4.4 「感謝型+謝罪型+その他」	66
3.2.5 データの統計	67
3.2.6 感謝の言語行動の側面	69
3.2.6.1 感謝の程度の表示	69
3.2.6.2 丁寧度の表示	71
3.2.6.3 感謝への応答	72

第四章 「感謝の言語行動」に関する枠組みの提案	77
4.1 感謝場面が成立するための条件	77
4.2 言語行動における全体的・固定的側面と個別的・流動的側面	81
4.3 感謝の言語行動に関わる要素と言語表現	85
4.3.1 S (+), { H } (+)	86
4.3.2 S (+), { H } (-)	86
4.3.3 {S (+)}, H (+)	86
4.3.4 {S (+)}, H (-)	87
4.4 謝罪型表現に関する日中の類似点および相違点	88
第五章 日本語と中国語における「再度の感謝」	96
5.1 問題点と研究目的	97
5.2 調査の概要	98
5.2.1 調査対象	98
5.2.2 場面設定	98
5.2.3 対人設定	99
5.2.4 質問設定	99
5.3 調査の結果	100
5.4 考察と分析	101
5.4.1 「再度の感謝」と「その場の感謝」との相関	101
5.4.2 「再度の感謝」に関与する要素	102
5.4.2.1 分析 1	102
5.4.2.2 分析 2	103
5.4.3 中国における「再度の感謝」の言語行動	104
5.5 「事前の感謝」	107

第六章 まとめと今後の課題	111
まとめ	111
6.1 今後の課題	114
謝 辞	116
参考文献	117

はじめに

日本と中国とは隣国として長い交流の歴史を有している。特に中国の改革・開放以来、経済の発展にしたがって、政治と経済のみならず、教育・医療・科学などいろいろな分野で交流が盛んである。日中両国の交流が飛躍的に発展するにつれ、両国の人々の移動、接触の機会も多くなってきた。また、日本人中国語学習者や中国人日本語学習者の数も毎年増加している。日中両国とも漢字圏の国として、共通の漢字文化を有しているが、漢字以外の文化の面では、異なることも多く、一つの物事に対する思考や行動様式は必ずしも一致しない。そのため、両国の人々、特に日中交流に携わっている人々が、互いの文化を知り、互いの理解を深めることは重要な課題の一つである。日中の異文化コミュニケーションにおいて、相手のことばの背後にある文化や習慣をよく知り、最大限に摩擦を避け、相手とのコミュニケーションが円滑に進められることが望まれる。

実生活では、言語行動が途絶えることはない。言語行動の一分野として、感謝の言語行動も頻繁に行われている。これは他人から何らかの好意や利益を受け、感謝の言葉で謝意を表すというものである。しかし、異なる社会では、それぞれの言語文化、対人意識、社会規範などが必ずしも一致するわけではない。従って、これらのものに深く根ざしている感謝の言語行動も必ずしも一致するわけではない。感謝の言語行動における条件が、各言語において、共通の部分もあると同時に異なる部分もある。しかし、ある言語社会では、他言語話者には独特と思われるところが、母語話者にはそれに対しての違和感が全く存在せず当然だと思われている。例えば、異文化コミュニケーションを行う際に、母語の立場に立って他言語の感謝の言語行動を観察すると、感謝すべき時に感謝しなかったり、感謝すべきではない時に感謝したりするようなことを、奇妙に感じるケースが多い。従って、感謝の言語行動における対照研究を行う際に、有効な研究方法を利用して、対象言語間で共通している点と、ある言語で特別に扱われる点、またその背後にある要因を明らかにするのが、言語行動の研究にとって重要な課題である。

日中における感謝の言語行動において、「感謝場面での謝罪」と「再度の感謝」がもつとも注目されている。日本の言語文化では、相手から利益を受けた場合のみに留まらず、相手の負担に配慮して「謝罪する」ことによって感謝を表し、また、話を始めたり、依頼したりする時にも、相手の立場や感情に配慮することばを盛んに使う。また、過去の利益を受けたことに言及し、再び感謝する言語行動も頻繁に行われている。その理由は何なの

か、中国語にはあるのか、あるとすればどのような形式で存在するのかなど、本論文ではこれらの課題を踏まえ、日中における感謝の言語行動の特徴を解明することを目指し、日中両言語における「感謝表現の使用」と「感謝場面での謝罪表現」と「再度の感謝の使用」について明らかにする。

第一章 研究の概要

1.1 研究の背景

対照言語学は、英語では contrastive linguistics という。この分野では、音声、音韻、文法、表現、語彙といった、幅広い範囲が対象となる。

生越（2006）によると、対照言語学が登場したのは、1950年代から60年代にかけてだとされる。対照言語学的研究は複数の言語体系を比較し、その異同から対象とする諸言語の特徴を明らかにしようとする。対照言語学が登場した当初、対照研究の成果は、例えば、外国語学習者が犯しやすい誤用のメカニズムを解明し、外国語教育に大きく寄与するものだと考えられた。

対照言語学は複数の言語を比較するという点では、比較言語学とよく似た特徴を持っている。比較言語学はそもそもの出発点である印欧比較文法に見られるように、比較の対象を系統関係にあると考えられる言語に限定し、共通の祖語の再構を目指す、通時的な言語研究の方法である。これに対し、対照言語学は比較の対象となる言語を限定せず、異なる言語を比べるだけでなく、同一言語の古い時代の体系と現在の体系、あるいは同一言語のいくつかの方言を比べることも可能である。

また、対照言語学は、言語を比較し、言語の普遍性について考察するという点では、言語類型論とも近い関係にある。言語類型論は、系統関係や地域的隣接による影響がないと想定される多くの言語を比較することで、系統関係や影響関係がなくても現れてくる言語の普遍的特性を明らかにするとともに、言語間の違いを説明できる何らかの法則・原理を見出そうとする。従来は、対照言語学が外国語教育など応用分野への貢献を目指すのに対し、言語類型論は、言語理論面での貢献を目指す点で、方向性が異なるとみられてきた。しかし、近年の対照研究は、単に言語間の個別的な異同について論じるのではなく、言語の普遍性と多様性の追求を背景とした研究になりつつある。そういう点では、対照言語学と言語類型論は、以前に比べその境界がはっきりしなくなっている。

「感謝」も普遍的な言語行動の一つとしてよく研究されている。感謝の言語行動はどの国の言語にも存在し、日本語や中国語も例外ではない。どの文化圏でも、感謝の表現を適切に使うことで、よりよい人間関係を保つことができる。これまでの研究の中で、日本語における感謝の研究と日本語と他言語における感謝の研究が数多く行われてきた。その中でも、感謝の気持ちを表す際の、「感謝表現」と「謝罪表現」の選択に絞って行われた研究が大半を占めている。

本論文は日中両言語における感謝の言語行動のストラテジーとその特徴について対照研究を行う。さらに、詳細な研究のなかった「再度の感謝」についても考察する。日中両言語の言語行動の対照研究は、互いの言語学習者に日中両言語の共通点と相違点をより詳しく認識させるとともに、日中両言語の背後にある文化をも理解させる一助になればと考えている。加えてこの対照研究を通じて、感謝の言語行動の普遍性につながるような枠組みを考えていきたい。

1.2 研究の目的

日本語における感謝の言語行動に関わる研究の中では、謝罪表現が感謝場面で使用されることが大いに論じられている。先行研究の多くは利益と不利益、補償方法、感謝と謝罪の交替、負の意識などの視点から、感謝場面での謝罪表現の研究を行っている。これらの研究は、このような謝罪表現を感謝場面の表現の一つとして捉えている。このような言語現象は、すべての感謝場面で有効というのではなく、社会的役割に相当する行動に対する感謝の場合は、謝罪の言語行動を取らないと指摘されてきた。また、日本社会では「再度の感謝」が頻繁に使用されているのに対して、中国ではあまりないと指摘されてきた。本研究では、感謝場面での謝罪表現の使用と「再度の感謝」が、本質的に何らかの関連があるのかどうかを調べながら、日中両言語における感謝の言語行動の共通点と相違点を明らかにする。また感謝の程度の表示、丁寧度の表示、及び感謝への応答など日中における感謝の言語行動の特徴も考察することとする。さらに、「再度の感謝」の場合に、日中両言語で使用される表現がどのように違っているかという点と、「再度の感謝」の逆バージョンである「事前の感謝」というものについても考察する。

1.3 論文の構成

本論文における各章の内容を簡略に記す。

第一章では、研究の背景と目的に言及する。

第二章では、研究の枠組みである、言語行動の対照研究、配慮コミュニケーションなどの理論的な背景を概観する。また、「感謝の言語行動」の定義及び種類などの特徴を概述し、本研究で扱う「感謝の言語行動」を定義する。さらに、日本語の感謝表現やその言語行動に関わる研究、日本語と他言語との感謝表現やその言語行動に関わる対照研究、及び「再度の感謝」に関する従来の見解について概観する。最後に感謝の言語行動に関する先行研究をま

とめ、その成果と課題を踏まえ、本論文の研究課題を提示する。

第三章では、先行研究に基づき、研究課題を解決するために、本研究の研究方法与データ収集について説明する。また、採取したデータを整理し、感謝の言語行動における表現のバリエーションをまとめ、分析を行う。さらに、収集したデータに基づき、日本語と中国語における感謝の言語行動の特徴を考察する。

第四章は、感謝の言語行動を分析するための枠組みを提案し、第三章で収集したデータをこの枠組みの下で考察する。

第五章は「再度の感謝」を取り上げ、「再度の感謝」と「その場の感謝」との相関、「再度の感謝」に関与する要素などを明らかにする。

第六章では、本研究のまとめと今後の課題や展望などを述べる。

第二章 研究の枠組み、「感謝の言語行動」に関する先行研究及びその問題点

本章では、まず、言語行動の概念、そして、関連する配慮コミュニケーションの理論を概観する。次に、感謝の言語行動の特徴を考察し、「感謝の概念」を定義する。また、「感謝の言語行動」に関する先行研究をまとめ、それを基にして本研究の具体的な研究課題を提示する。

先行研究における「感謝の言語行動」の定義を概観した後、日本語の感謝表現や言語行動に関わる研究を理論的、実証的の両方面から考察する。次に、日本語と他言語との感謝表現やその言語行動に関する対照研究を考察し、その中から日英・日韓・日中の対照研究について論じ、続いて「再度の感謝」についての先行研究を概観する。最後に先行研究における問題点や不十分な点を明らかにする。

2.1 言語行動と対照研究

言語行動について、国広(1977)は、従来広く見られた意見では「話す・聞く・読む・書く」のいわゆる四技能、すなわち「言語の実際使用」ということであり、その研究は単なる使用面から一歩進んで、使用の場面に見られる諸条件との関連における使用上の法則性を明らかにしようとするようになったと述べている。そして、社会言語学的な見方が発達してきたと指摘している。

言語行動における関連要素について、国広(1977)は、音声言語による行動「話す・聞く」が中心となるとしている。つまり、話す主体としての話し手、聞く主体としての聞き手が、言語行動を行うもっとも基本的な要素となる。また、言語行動における要素として、「場面」・「話し手と聞き手の役割関係」・「話題・用語」「場面の性質」を挙げている。「話し手」には、話し手の固有の性質が使用言語に規制を加えることがある。日本語では性別が特に目立つ特徴である。男女における使用頻度の違いに加え、話し手の年齢もある程度の関連を持っている。「話し手と聞き手の役割関係」、すなわち広義の社会的関係であり、身分の上下・年齢の上下・性別・親しさ・集団所属関係などの尺度があると述べている。

また、言語行動に関して、石綿・高田(1990)は、それを「人間が言語を使う行動」と定義し、言語行動研究を「言語を使う行動に関わることがらを扱う研究である」と述べている。さらに、「人が言語を使う行動」に関して、さまざまな要素が関係しあっていて、すべてを一望のもとにおさめるのは容易ではなく、実際には部分を見るということしかでき

ないとしている。また、人により「言語行動」として捉える現象の範囲もさまざま、いわば、語彙や文法、音韻と言った言語体系のいわゆる純粋な記述以外はすべて含むとさえ言えると指摘している。

言語研究分野では、異なる言語を比較し研究する方法がある。これを対照言語学と呼ぶが、対照言語学は言語と言語の対照研究を通じてそれぞれの言語の特性を明らかにし、また、言語の本質を考えようとする言語学の一分野である。対照研究は、主にそれぞれの音声と音韻、文法、語彙、言語行動などについて研究するものである。その中で、言語行動の対照研究は対照言語学領域の重要な構成要素として注目されている。言語行動の対照研究は、すなわち、異なる言語の実際使用の共通点と相違点を明らかにする過程であると言える。

言語行動はメッセージを伝える道具であるだけでなく、文化の担い手でもある。言語行動は、所属している社会に根ざしているルールや規範などと緊密につながり、文化の側面もある程度示している。したがって、言語行動の対照研究を行うことで、その社会の文化の側面も観察することができる。これまで言語行動の対照研究は、数多くの分野で行われてきた。例えば、不同意の表明、ほめの表現、不満表現、勧誘表現など、話し手の意思を伝達する多数の言語使用が対照研究の分野で扱われている。

2.2 配慮言語行動の理論と対人配慮の方法

2.2.1 配慮言語行動とは

三宅（2011）は、対人関係や場面に留意して行う表現や行動を総称して「配慮言語行動」と呼ぶことができると主張している。また、その範囲は、敬語やポライトネスを含むが、対人関係に関わる言語以外の要素を含む極めて広い意味で使われると言う。

また、配慮言語行動の考察対象について、三宅（2011）は主に表現や行動の選択に影響を与える「意識」や「態度」の問題であるとしている。そして、言語表現の表面的な意味と、言語使用の意識とは必ずしも一致しないと指摘している。例えば、いわゆる謝罪の言語表現（「すみません」「悪い」など）を使って感謝の気持ちや態度を伝える例もある。特に、使い方が慣用化している言語表現や、談話の中で無意識に使われるぼかし表現などのように、配慮に関わるものは辞書上の意味と食い違ふことが多い。そして、待遇言語行動の研究では、これを念頭に、言語表現や行動のみを研究対象にするのではなく、その背後にある「意識」や「態度」、あるいは「心理」を注視する必要があると指摘している。

三宅 (2011) は、「プラス配慮」と「マイナス配慮」という概念を提案している。

「プラス配慮」の言語行動とは、一般に「配慮」ということばから想起される「気配り」「思いやり」「丁寧さ」を含む言語行動を指す。

「マイナス配慮」の言語行動とは、「配慮」がないだけでなく、敬語を使うべきところで使わない（非言語）言語行動や、積極的に無礼な態度や不躰なものいをする言語行動を指す。「馬鹿にする」「傷つける」などに代表される態度や軽卑表現、慇懃無礼をも含む言語行動である。「相手の発言を無視する」行為もこれに含まれる。いわば、「気配り」や「思いやり」を意識的にしない、その期待に答えない言語行動だと言える。

配慮言語行動：(三宅 2011 によってまとめたもの)

プラスの配慮言語行動	気配り、思いやり、丁寧さなどを含む言語行動（敬語、配慮表現、気配り発話など）
マイナスの配慮言語行動	馬鹿にする、傷つけるなどを含む言語行動（軽卑表現、尊大表現、慇懃無礼、相手の無視など）

2.2.2 対人配慮の方法

西尾 (2012) は、日本語の配慮言語行動の社会多様性を考察した。言語の多様性研究から、配慮の示し方が日本語内でどのような多様性を持っているのかを、社会的な観点から検討している。感謝場面での対人配慮の表出に関わる機能的な要素の使用意識を分析対象とし、その意識の傾向には、世代差や性差だけでなく、地域差や居住地の社会環境による違いがあることを明らかにした。その分析から人間関係が希薄な都市部や、人間関係が濃密な非都市部における配慮言語行動の具体像が見られた。また、配慮言語行動のスタイルがどのような性別、世代、地域、社会環境に共有されているかを分析した。また、配慮言語行動の社会的多様性を解明する手法を提示し、一つの言語社会には多様な社会的背景に影響を受けた、配慮言語行動の意識が形成されていることを指摘した。

西尾 (2012) は、「夕方の 5 時頃、あなたが家の中で、探し物をしています。財布が見当たりません。お隣さん(子供以外)が家に来て、財布を届けてくれました。あなたが財布を落としたのを見て預かってくれていたようです。大事なものなので、直接渡しにきたとのことです」のような場面を設定し、アンケート調査を行った。表現の選択意識については、以下のような回答が集まった。

- ①いや！！ありがとう！！探しても探してもないんで困ったんよ！よかったー
- ②ありがとう。助かります。
- ③いや、ホンマ申し訳ナイっす
- ④わあ、すいませーん。ありがとうございます。
- ⑤どうもすみません。ありがとうございます。ほんとに助かりました。

西尾(2012)によると、上の回答には、丁寧体の使用に違いが見られる。①は普通体発話で、②は普通体と丁寧体の混合体である。また、③から⑤は丁寧体である。日本語発話の普通体と丁寧体の選択は、話し相手による制約が強く、特に、通常丁寧体で話す相手に普通体を使用すると失礼になることは、実際の発話でも意識に上りやすい。また、①の「困ったんよ」や③の「ホンマ」のような方言形式を用いたスタイルの選択にも、話し相手との日常的な親疎関係が関与していると考えられる。

一方、対人配慮の方法について、西尾(2012)は、「受益」、「困窮」、「評価」、「描写」、「感情」、「補償」などの視点から分析を行い、次のように述べている。「受益」(受けた行為が話し手にとって利益であることを表明する)は相手からの利益供与が、話し手に好ましい結果を招いたことを示す。「困窮」(相手に解決してもらった話し手の困窮状況を描写する)は相手からの利益供与によって解消された、話し手の好ましくない状況を示すものである。

「評価」(相手の負担を評価する。副詞や修飾語による場合が多い)は、「ご親切に」「ご丁寧に」と、相手が負った負担をプラスに評価する。「描写」(相手に負わせた負担を描写する)は、相手の負担を積極的に認知していることを示し、感謝表現とあわせて用いることで、相手の負担を厚意として表現できる。「感情」(話し手の心情が平静でないことを感動詞、程度副詞、形容詞によって示す)を用いることは、相手の負担を非日常的で、価値あるものであることを表出する。「補償」(相手に負わせた負担を補償する行為提供の申し出)は、相手の利益供与と負担を補償する利益供与を行うことを、話し手が表明するものである。

2.3 感謝の言語行動

2.3.1 言語行動としての「感謝」

感謝の気持ちは、実際の行動で表すこともできるし、口頭でも表すこともできる。実際

の行動で感謝の意を表明する行動は、通常、より深い感謝の意を表す場合に行われる。例えば、不注意で川に落ちて、溺れそうになった子供が、他人に命を救われたことに対して、保護者がただ「ありがとう」の言葉で感謝の意を表明して済むであろうか。特に、人の命を救った人も怪我をして入院した場合に、簡単な「ありがとう」の一言だけで、命を救ってくれた恩に報いたことにはならないだろう。この場合、感謝の言葉に伴う実際の行動が必要となる。

森山(1999)では、お礼は聞き手からの利益の提供に伴う不均衡の修復であり、お詫びは聞き手へ損害を与えたことによる不均衡の修復であると指摘されているが、上述の場面で、利益の不均衡を修復するには、もちろん感謝の言葉を使うのも必要であるが、誠心誠意に何らかの実際の行動を行わないと、本当に感謝したとは思われまいだろう。したがって、ある感謝場面では、実際の行動と口頭の感謝がどちらも欠けてはならない。実生活では、実際の行動を通じての感謝の表明と、口頭の言葉を通じての感謝の表明のうち、どちらが優先されるかは、利益の大小や社会集団の属性などによって異なっているだろう。上で挙げた人を救う例から見ると、実際の行動を通じて感謝を表明する方法が多くの社会において観察されるはずである。しかし、普段の生活場面では、人命が救われるなどのような巨大な利益に触れるケースはそれほど多くない。最も多いのは、小さな利益、あるいは相対的に利益が小さい場面である。そして、類似する場面で、感謝のことばを言うか否か、どのような感謝表現を用いるか、また、感謝の言葉を使わない場合には本当に感謝の気持ちが存在しないのか、あるいは、感謝の言葉を使った際に心の中で本当に感謝しているのかは、社会によって異なる。

日常的な口頭の感謝による言語行動が、本論文で扱う対象であり、実際の行動で感謝の意を表す場合については、研究対象外とする。

言語行動としての感謝にはどのような基本的な特徴が備っているのだろうか。感謝は感情を表す言語行動の一つである。『現代日本語文法 7』(2009)では、「話し手は聞き手によって利益をもたらされたり、逆に聞き手に対して負担を与えるようなことをした場合、そこで生じた心理的な齟齬や対人関係上の不均衡を調整するために、感謝や謝罪といった調整系の対人行動を行う」と指摘されており、感謝は調整系の言語行動として位置づけられている。

感情には、マイナスとプラスの感情がある。プラスの感情は聞き手を喜ばせる可能性が高いが、感謝場面での「ありがとう」のような感謝型表現及び恩恵の叙述などは、相手と

の恩恵関係の成立を明確にし、このような関係をこれからも続けてほしいという希望を表明する。

一方、マイナスの感情の伝達は話し手と聞き手との関係を危機の状態に陥らせる可能性が高い。しかし、「すみません」のような謝罪型表現はマイナスの感情表明ではあるが、相手との「負」の関係を表明し、自分の「負」の感情を相手に伝えることで、より深い感情を表明する。

このように、実生活では、マイナスの感情であれ、プラスの感情であれ、聞き手に対する表明は一定の規範に従って行われる。

2.3.2 感謝と他の言語行動の比較

話し手が感情を表す言語行動の中で、マイナスの面に注目する感情を表す言語行動としては、「不満」、「非難」、「謝罪」などが挙げられる。プラスの面に注目する感情を表す言語行動としては「感謝」、「ほめ」などが挙げられる。以下にそれぞれの基本的な特徴をまとめる。

i) マイナスの感情表現：

「不満」は、十分に満たされていないと思うこと、そのような気持ちや心のわだかまりなどを指す。不満な気持ちを表す言語行動が不満の言語行動である。聞き手を不満の対象にして、聞き手によって不利益などがもたらされたことに言及する、話し手の感情の表出である。

「非難」は「不満」と同様、聞き手によって不利益などがもたらされたことに注目し、さらに激しく「不満」や「怒り」の感情を表す。この種の言語行動は聞き手のフェイスを侵害することで、話し手の心情の崩れたバランスをある程度修復できるが、聞き手との関係の崩壊につながり、非常に危険な言語行動の一つだと言えよう。

「謝罪」は、話し手が自分のした行為によって聞き手に不利益や損失をもたらしたことについて、自分が悪いと聞き手の許しを乞うものである。

ii) プラスの感情表現：

「感謝」は、話し手が聞き手から何らかの恩恵や利益を受け、自分の嬉しい気持ちやありがたい気持ちを表出する言語行動である。

「ほめ」は聞き手の属性に注目し、同時にそれに対して高い評価を表し、相手を喜ばせる言語行動である。

これらの言語行動の中では、話し手にとっての利益と、聞き手によって利益がもたらされたことの、いずれもが必要条件と位置づけられるのは「感謝」のみであり、この点ではかの感情を表す言語行動と異なっている。

2.4 「感謝の言語行動」の定義

まず、先行研究の中で感謝はどのように捉えられているかを考察し、それを基に、すべての感謝すべき状況を解釈できるような定義、即ち、本研究が扱う「感謝の言語行動」の定義を示す。

岡本（1991）では、感謝を「相手の何らかの行動が、話し手に利益を与えた場合に、それに対してなされる言語行動である」と定義し、岡本（1992）は「相手の何らかの行動が、話し手に何らかの利益をもたらした場合に、お返しとして行われる言語的コミュニケーションである」と再定義した。ここで指している「相手の行動」には、労力・技術の援助、金品の授与等のほか、知識の提供、話し手を賞賛すること、話し手との友好関係の表明等の言語行動などが含まれる。森山（1999）は、お礼（感謝）とは聞き手からの利益提供に伴う不均衡の修復であり、対人関係の修復の一つの手段であると述べている。安（2005）は、感謝表現というのは、人が他人からの恩恵を受けた際に行われた感謝を表すための言語行動であると定義した。頼（2008）は、「感謝」とは感謝を行う「主体A」が、ある確定された行為によって、自分に何らかの利益あるいは好感情がもたらされたと認識し、ありがたい気持ちが生じ、その確定された行為と関係する「主体B」とよりよい関係を築くために、ありがたいという気持ちを「主体B」に伝える「行為」と定義する。

岡本（1991、1992）、安（2005）では、感謝の本質を基本的に述べているが、利益を受けた際に行われる感謝のみ扱われており、感謝の時機（例えば、再度の感謝）などは考察されていない。また、頼（2008）では、「確定された行為と関係する「主体B」とよりよい関係を築くために、ありがたいという気持ちを「主体B」に伝える「行為」と指摘しているが、実生活では、聞き手との関係を維持するためでも、良くするためでもない例が少なくない。例えば、見知らない人にも頻繁に感謝の言語行動を行うことが指摘できる。

以上の感謝の定義に基づき、より合理的に「感謝の言語行動」を解釈できる定義をまとめると次のようになる。

感謝とは、話し手（或は話し手側の人）が聞き手（或は、聞き手側の人）から何らかの利益や恩恵を受けた場合に、それを認識して何らかの働きかけをしようとする際に、話し手の気持ち（ありがたさ、恐縮、それらが混在した気持ちなど）を述べること、及び、しばらく時間をおいて、再びそれに言及して恩を忘れていないことを強調する話し手の気持ちを述べることである。

2.5 「感謝の言語行動」に関する先行研究

本節では、日本語の感謝表現やその言語行動に関わる研究と、日本語と他言語における対照研究と、「再度の感謝」の研究を概観する。

2.5.1 日本語の感謝表現やその言語行動に関わる研究

感謝表現と謝罪表現を扱った理論的研究として、金田一(1987)、熊取谷(1992)、西原(1994)、森山(1999)等があり、感謝表現と謝罪表現を扱った実証的研究として、佐久間(1983)、岡本(1991)、小川(1993・1995)、赤堀(1995)、山本(2003)等がある。

2.5.1.1 理論的及び概念的研究

日本語における理論的研究には、感謝と謝罪の成立条件、機能、両者の関係、特に謝罪表現の「すみません」が感謝として機能する用法について、発話行為理論や社会言語学の視点から分析したものが多く見られる。

○ 金田一(1987)

金田一(1987)は、「ありがとう」の使用条件について、次のように述べている。「「ありがとう」は、お礼の言葉である。甲と乙の2人の人間を設定する。甲がなんらかの行為を行った（あるいは、しないという行為を行った。）その行為は甲が意図する、しないにかかわらず、乙に益することになった。そこで、乙は甲に、「ありがとう」と言う」。

また、「すみません」について、金田一(1987)は、それが感謝として使われる時、そして依頼に使われる時、原行為、相手に不利益を与えたと同時に、自分にとっては、利益をもたらすものであった、ということも意味してしまうように思われる。特に感謝として使われる時に、その条件は、基本的に「ごめんなさい」と同様であり、自分のした行為（あるいはしなかった行為）によって相手に不利益を与えた、ということであると指摘している。

また、「ありがとう」と「すみません」、両者の現実の捉え方を比べると、「ありがとう」は、ずっと単純であり、感謝の気持ちが素直に出ている。「すみません」は、自分が立つ、という一見何の害もなさそうな行為をしたそのことに、現状の原因を求め、相手の不利益をも認めていることになって、より深い挨拶になるのであるが、また、その複雑さにいやらしさを感じることもなる。従って、使われることに抵抗を感じる人も多いと、金田一(1987)は解釈している。

「すみません」の制限について、相手の不利益を認めてしまうために、デパートなどでは使用されないと述べている。もし使ってしまったら、客はその商品を買ったことで損をしたような気分になってしまうだろう。また、相手の不利益が考えられない役割行為の場合、「ありがとう」の代わりに「すみません」を使うことができない。例えば表彰状をもらう際には、相手の損得は考慮しなくてもよい。

補償の力について、感謝の場合は、「ありがとう」と「すみません」が両方使える場面では「すみません」の方が個人的な分だけ強いかもしれないが、これらは、様々な副詞句(どうもや全く、誠になど)や時制、語調により、また丁寧さにより、変化すると指摘し、「大変失礼いたしました」という方が、ただ単に「申し訳ない」というよりも、補償の力は強いようだ。

日本人は出会いや別れなどで、補償の挨拶を頻繁に使い、人と人との関係(主に上下関係やウチ・ソト関係)を重視する文化があるが、補償の挨拶を使うことで、お互いの関係を確認し、秩序立てておいてからでないと、話が始まらないため、詫びは、日本文化の秩序回復の応急処置であると、金田一(1987)は結論づけている。

○ 熊取谷(1990)

熊取谷(1990)は、日本の「感謝」における表現交替現象とその社会言語学的モデルを明らかにした。交替現象について、以下の二例を挙げ、「ありがとうございます」を「すみません」で置き換えることが可能であると指摘している。

例 A これ落ちましたよ。

はい。

あ、ありがとうございます。

B これ落ちましたよ。

はい。

あ、どうもすみません。

このような、感謝の場面で「すみません」を使用する現象を「感謝の表現交替現象」と定義した。このような言語現象を、熊取谷(1990)は、丁寧行動の方策としての「状況転換」と位置づけ、視点の移動を伴うこの状況が丁寧行動の方策として機能するのは、聞き手の立場から快適状況を捉えるという共感度の高い言語行動となるからだを指摘している。

さらに、感謝の場面で「すみません」を用いる現象は、「話し手にとっての快適状況」を「聞き手にとっての不快感」として扱う視点の移動を伴う「状況転換」の結果生じたものであり、この「状況転換」は丁寧行動の方策として機能していると分析している。また、方策の適用と制約も存在しているとし、感謝の対象となる快適状況の内容を、聞き手の実質行動からなるものと、聞き手による発話行為からなるものの二つの種類に分けた。

「共感制約」：快適状況が共感型の発話行為から成るとき状況転換の方策は適用しない。

「(社会的)役割期待制約」：快適状況を形成する行動が、社会的役割が規定する役割期待の一部であると話し手が判断するとき状況転換の方策は適用しない。

また、状況転換は、社会的役割に対する期待の範囲を超えたと判断した行動に対して「社会的役割が要求する以上のことをあなたは私にしてくれた」と相手に示すことにより丁寧さを表現する方策である。状況転換の適用(特に、役割期待に対する解釈や、方策使用の選択権など)に関する個人或いは社会属性(年代、性別、地位など)に基づくバリエーションについては、今後解決されなければならない課題として残されていることを指摘している。

○ 西原(1994)

西原(1994)によると、「感謝」に関わる言語行為は、直感的には、話し手の謙遜の態度を表す点で共通する「陳謝」「遠慮」「妥協」などに比べて肯定的・積極的なニュアンスを持つように思われるという。日本語では「すみません」「申し訳ありません」「ごめんなさい」などの表現が感謝・陳謝両方に通用するとされていることを例にとってみても、運用条件

に関して両者に共通する点は列挙できる。「感謝する」ということを一連の行為の総体として考えてみると、その中には「ありがとう」などの表現を口にするという行為のほか、「恩を感じる」「気が重くなる」「お礼をする」「お返しをする」など、「気持ち」のバランスや「もの」のやりとりもその過程の一部として入っている。

「感謝」と「謝罪」を分ける要因は、話し手が何に対して負の意識を持ったか、「感謝」「謝罪」の発話に先立つ言語行為がどのようなものであったかということである。まず、「感謝」の場合、話し手にとって好意的に捉えられること、あるいは好意的に聞き手及び他者が思ったことがなされたり、その状況が作られたりしたことが先行条件となる。その状況は話し手ではなく聞き手あるいは他者の作為に起因すると判断されるものである。一方、陳謝の先行条件となるのは、聞き手にとって不利益に思われること、あるいは不利益だと話し手が思ったことがなされたことである。そしてそのような状況は話し手及びその周辺の作為によるという判断がなされている。言い換えれば、負の意識の違いという次の4つの要因によって変わるということである。

- ① 話し手にとって（プラスである、歓迎すべき、有利である等）良いことか。
- ② 聞き手にとって（マイナスである、歓迎できない、不利である等）悪いことか。
- ③ 状況は聞き手（あるいはその周辺）に起因するか。
- ④ 状況は話し手（あるいはその周辺）に起因するか。

①と③が成立すれば話し手の感謝表現が誘発され、②と④が成立すれば話し手の陳謝表現が誘発されることになる。①と④の組み合わせは話し手の自慢や勝利の表現となり、②と③の組み合わせは話し手の同情、あるいは叱責などさまざまな表現を誘発する。

日本語話者なぜ①と③の条件下で②と④と同じように、「陳謝」を誘発する気持ちを同時に抱くのであろうか。この疑問の解答は、日本語の運用における「聞き手至上主義」とでもいうべき原則の存在を認めることによって得られる。つまり、①の条件は常に回避されなければならないが、本来あってはならないもので、①③が成立したことは直ちに②④と再解釈され、陳謝、すなわち聞き手の負を縮小させる行為へと直結することになるという転換が成立すると考えるわけである。これによって、謙讓表現の多くは①の成立を阻む制約によって成立するものであるという解釈も同時に成り立つことになる。

日本語の談話における「聞き手至上主義」は、多くの場合における「感謝」「陳謝」の同

時並存を説明する制約として成立する。しかし、それは①の話し手優位が成立してはならないと認識される範囲でのことであって、話し手にとって良いことが罪悪感なしに自覚できるほど聞き手の絶対的優位が認識されている場合は、話し手からの純粋な感謝表現が誘発されることになる（聞き手が神仏、保護者、スポンサーのような存在である場合）。負の修復・縮小を心配する必要のないほど絶対的優位の存在である聞き手に起因する話し手の「利益」は、話し手の「利益」を聞き手にそのまま「感謝」として表現するだけで次なるステップは踏まないという選択を許すことになる。

反対に、話し手が聞き手に比べて自分自身の優位を自明のこととしている場合、つまり①が当然であると自覚されている場合にも、「感謝」は「陳謝」及び負の修復、縮小への道をたどらない。例えば、職場の上司が部下にお茶を入れてもらって言う「ありがとう」、あるいは公共機関などの職務に関わるサービスに対する感謝などはこの範疇に入るものである。

○ 森山(1999)

「お礼」と「お詫び」について、森山(1999)は関係修復のモデルを提案した。

お礼とは聞き手からの利益の提供に伴う不均衡の修復であり、お詫びとは聞き手へ損害を与えたことによる不均衡の修復であり、両者は対人関係の修復としてまとめることができる。

(+-はそれぞれ利害関係を表し、Xは利害の事態内容を表す。なお、お詫びでは話し手の「-X」(害)が先行し、お礼では聞き手の「+X」(利益提供)が先行することになる)

	初期状態	→	利害を含む事態	→	関係修復(顕在化)	→	応答(否定)	→	回復状態
話し手:	0		-X		-X		-X		(0)
言語行動:					↓「不均衡」		↑「否定」		
聞き手:	0		+X		+X		+X		(0)
	(例		行為		ありがとう		どういたしまして)		

これは不均衡処理による関係修復のモデルと呼べるが、ある程度の普遍性が想定できる。ただ、文化や親疎関係によって、不均衡状態の認定や処理の方略は違う（例えば、漢民族では家族など親しい関係の場合、日本人ほどお礼は言わないとされる。）また、言語的に不

均衡が解消しても、その事実は当然残り、賠償やお返しといった補償行動は別に考えるべきである。

「お礼」と「お詫び」の表現について、関係認定と心情表明の形式は、現在形のものもあるし過去形のものもある。関係修復時の不均衡の存在を述べる場合は現在形であるが、不均衡の生起が先行することを取り上げる場合、過去形が使える。通常、手伝ってもらった時に「ありがとうございます」、終わってから「ありがとうございました」となるように、中心的な出来事が終了しているがどうかで、ル・タの使い分けがなされる。しばしば「先日はありがとうございました」のように行われる再生的な挨拶では、こうした過去形によって関係の確認が行われるのである。

以上の研究では、各側面から感謝場面における「すみません」の使用について考察された。金田一（1987）は、「すみません」が感謝として使われる条件が、基本的に「ごめんなさい」と同様であり、自分のした行為（或はしなかった行為）によって相手に不利益を与えたことと指摘している。熊取谷（1990）は「すみません」が感謝として使われる現象を「感謝の表現交替現象」と位置づけ、視点の移動を伴って丁寧行動の方策として機能するとしている。西原（1994）は、いくつかの条件を挙げ、それぞれの組み合わせが感謝表現と謝罪表現などを誘発し、また、感謝表現から謝罪表現に転移する言語現象を「聞き手至上主義」と解釈している。

2.5.1.2 実証的研究

日本語における実証的研究には、アンケート調査、或いは仮説を立ててアンケート調査で検証する方法と、テレビドラマのシナリオからデータを含む会話を抜き出して考察する方法が多く見られる。これらの研究は、「感謝の対象」と「表現形式」及び「待遇表現」、言語表現のバリエーションと対人関係、社会言語学、言語表現のバラエティや場面による使い分け、FTAなどの視点から、感謝表現のストラテジー、特に謝罪表現の「すみません」の感謝としての用法を分析、考察している。

○ 佐久間(1983)

佐久間(1983)は、日常の言語生活における感謝や詫びの表現は決して単純なものではないと指摘しつつ、「感謝する」「詫びる」を単純化して、問題を話し手(A)と聞き手(B)二者間の場合だけに限って、両者の特徴を確認した。

佐久間(1983)は、感謝したり詫びしたりする時、実際にどのような表現が用いられるかを見るために、参考素材としてテレビのドラマを選んだ。場面、人物、題材などの偏りを少しでも避けるため、異なる作家による一回完結の六つの作品を選び、脚本ではなく実際に放映されたドラマ(それぞれ50分間)の全台詞から、感謝と詫びを表していると思われる発話を拾った。感謝の表現を約70例、詫びの表現を約60例収集し、これらのデータに基づいて、「感謝」と「詫び」の特徴をまとめた。

「AがBに感謝する」「AがBに詫びる」という場合、話し手であるAが、それぞれ「AがBから利益を受けた」「AがBに不利益を与えた」と認識し、その認識に基づいて、AがBに対する何らかの働きかけをしようとする気持ちを持つことが前提条件である。したがって、Aは、実際にはBから利益を受けていてもその事実を知らなければ、Bに対して感謝の行動を取ることはないし、反対に、実際にはそうでなくてもAがBに不利益を与えたと認識(誤認)すれば、詫びるという行動をとることになるとする。

○ 岡本(1991)

岡本(1991)は、感謝表現の使い分けに関与する要因について、日本語の中で「ありがとう」と「すみません」はランダムに使用されているのではなく、何らかの使い分けの基準が存在すると考え、感謝を表明するための言語表現のバリエーションと対人関係や状況要因との関連を、調査結果を手がかりに考察を行った。表現を規定する要因に関して、場面と表現の関係、そこに介在する心理的過程の考察のためにさらに様々な角度からの分析が必要だが、感謝型や謝罪型の使い分けについて、現時点での推測を述べている。以下がその概要である。

謝罪型表現の使用は気楽さや相手の気分の良さの認識と負の相関が高く、相手のネガティブな感情状態への配慮の必要性和大きく関連している。感謝型表現は全く逆に、相手の負感情への配慮の必要が少ない状況で使用されやすい。

相手の感情状態は話し手によって推測されるが、その推測に影響を与える大きな要因として、相手の履行コストの大きさをあげることができる。ただ、コストの大きいことが相手へのネガティブ感情の帰着に直結するわけではない。結びつきを強めたり弱めたりする介在要因が考えられる。贈り物をする、昼食をおごるなどの場面ではコストがそれほど小さくないにも関わらず、謝罪型に比べて感謝型が多用されている。これらの状況では、相手は話し手に恩恵を与えることで好ましい関係の構築・深化を目指していると想定できる。

この場面では相手の負感情に関する懸念は少ない。したがって話し手は、感謝型表現によってその恩恵を積極的に認めることが、相手のコストに配慮することよりも適切だと考えることになる。

一方、補償場面ではコストの大きさから考えられる以上に謝罪型が多用され、感謝型が用いられにくい傾向がある。話し手と相手との対人関係による使い分けも、以上と同じ枠組みで説明可能である。相手が親密な場合には、疎遠な場合と比較すると、相手の行動は話し手との友好関係を深めるための試みと解釈される場合が多く、仮にそうでないにしても、相手のネガティブ感情への配慮は少なく済む。したがって感謝型が多用、謝罪型が抑制される。

○ 小川(1993・1995)

小川(1993・1995)は、「すみません」の社会言語学的考察を行った。日本語の感謝と詫びの「定型表現」には、「ありがとう」「ごめんなさい」のような典型的な表現のほかに「すみません」のように感謝にも詫びにも使うことのできる表現がある。そこで、感謝の「すみません」の使用制約と使用場面の世代差を調査し、さらに「すみません」の機能の分析を行った。

感謝の「すみません」は、使えない場面はあるが、若い世代の軽い感謝の言葉として、目上やソトの人に多用される。逆に上の世代では、目下や友達(ウチ)に対して使われる傾向がある。「すみません」は感謝や詫びに使われるだけでなく、話の場づくり、話題づくり、さらに会話を円滑に進める機能を持っている。

感謝の「すみません」によって日本語の感謝と詫びは対立する二つの概念ではなく、一つの連続体として存在すると考えることができる。感謝の「すみません」を中間部分とし、一方の極に「すみません」では表すことができない典型的な感謝の表現があると考えられる。これは感謝の「すみません」の使用制約のある部分である。

○ 山本(2003)

山本(2003)は、「感謝」と「謝罪」という異なった言語行動が日本語では両方とも「すみません」で表現できるという事象を、Brown and Levinson(1987)が「感謝」と「謝罪」を Face Threatening Act=FTA として同じカテゴリーに分類していることを切り口に「丁寧さのストラテジー」によって説明している。そして、日本語学習者用テキストやドラマのシナリオから感謝の意味を持つ「すみません」と「ありがとう」との使い分けを分析し、特に日本語では

話し手と聞き手の相対的力関係や社会的規範がこれらの言語行動の違いに強く影響していることに言及する。また、アンケートの結果から、近年では感謝の気持ちを表すのに「すみません」より誤解の少ない「ありがとう」を用いる人が多いことを明らかにした。

感謝や謝罪は両方とも丁寧さのストラテジーとして用いられる発話行為であり、話し手に少しでも「自責の念」がある場合、「すみません」が選択され、感謝の気持ちだけの場合、「ありがとう」が選択されると述べている。また、日本語では話し手と聞き手の心理的な距離や社会的距離、感謝の対象、話し手の心理状態がこれらの言語行動に強く影響しているため、単純に「すみません」と「ありがとう」の使い分けを公式化することは困難であり、したがって、日本語学習者用テキストでは初対面の人に感謝を表す場合「すみません」を採用しているが、近年では聞き手の年齢を問わず感謝表現「ありがとう」を言われても不快になる人が多くないことから、より自然な会話を身につけるためにテキストの会話の再検討が必要であると指摘している。

2.5.2 感謝表現やその言語行動に関わる日本語と他言語との対照研究

日本語と他言語における対照研究は、日英(中田(1989)、三宅(1993・1994))、日韓(生越(1994)、秦(2002))、日中韓(崔(2000)、安(2005))、日中(施(2007))などがある。これらの研究の多くは日本語と他言語における感謝表現のストラテジー、同じ場面の比較などの使用について論じている。特に、日本語の謝罪表現「すみません」の感謝の用法は、例外なくこれらの研究で扱われている。

2.5.2.1 日英の対照研究

○ 中田(1989)

用例をもとに日英の陳謝や感謝の使用条件の共通点・相違点を考察した。英語と比べて日本語に特徴的なのは、相手の自発的な尽力なども陳謝の対象となること、自分に身近な人物の代理でもよくお詫びを言うことなどがあり、感謝では、「すみません」など陳謝と両用される表現が日本語には少なくないと指摘した。

○ 三宅(1994)

三宅(1994)は、感謝するという言語行動はさまざまな言語社会の中で、かなり普遍的に繰り返される人間の日常的な営みの一つであるが、どのような状況の時、どのように感謝

を表現するか(またはしないか)は、それぞれの言語社会によって異なると述べ、日英の差を次のように分析した。

例えば、アメリカでは人に「感謝の言葉」(ここでは Thank you などのように一般的に感謝の言葉と考えられているものを指す)を言うことが社会的に重要視され、幼児期から厳しくしつけられる。レストランでウェイトレスが料理を運んできたときや、スーパーのレジでお金を払った時など、店員も客も気軽に「感謝の言葉」をかけ合う。ところが、日本では、店員が「感謝の言葉」を言っても、客が返事を返すことはほとんど期待されていない。さらに、マラッタ語やヒンディー語話者の間では、金銭を介するサービスの場合、客も店員も「感謝の言葉」を発するべきではないとされている。また、家族や親類、親しい友人の間では、「感謝の言葉」を発することはタブーで、そのような関係のものから「感謝の言葉」をもらえば、侮辱されたか見下されたと考えるべきだという。

異なる社会で「感謝の言葉」がともに期待されている場面でも、用いられる表現の種類が違う場合がある。例えば、英語で「Thank you」という場面で、日本語では「すみません」のような一般に詫びを意味する表現がしばしば使われる。この使い方は、感謝と詫びがまったく異なる言語行動だという認識の強い欧米人にとって、しばしば奇異に感じられる。さらに、英語で「Thank you」が使える範囲をカバーするためには、日本語では「感謝の言葉」にさまざまなバリエーションが必要となる。日本語では、話し手と聞き手の親疎や上下関係、話し手の性別、感謝すべき行為がなされる前か後か、などで細かく表現を変えなければならないからである。

そして、言語間の感謝の言語行動にはさまざまな違いがあり、その違いにはその言語が話される文化・社会規範や価値観が大きく反映しているという前提で、日本人とイギリス人に対して行った感謝の言語調査を通して、文化・社会を反映する言語行動の違いを分析し、特に、日本語では「すみません」が多く使われる場面を日英で比較し、その心理的な背景の違いの解明を試みている。

「感謝する」現象は日英双方に見られても、その言語行動はさまざまなレベルで異なり、その要素は「借り」の有無や大小に対する考え方、相手との上下・親疎関係、話し手の性別などさまざまであり、それらが複雑に作用し合って言語行動の違いとして表出していると結論づけている。

2.5.2.2 日韓（朝）の対照研究

○ 生越(1994)

生越(1994)は、日本語において、「感謝」を「謝罪」の表現と共に考察することは意義があると述べ、日韓の差を分析した。

「先日はどうも～～」と切り出す挨拶言葉において「～」の箇所には「ありがとうございました」という感謝の表現でも可能であるし、「すみませんでした」という謝罪の言葉も可能である。内容から見れば、特に取り立てて言うほどの「感謝」も「謝罪」も意図していないことが多い。このような「話し手」と「聞き手」との間の共通体験を喚起させる手法は「コ・ソ・ア」の文脈指示において、両者にとって既知か否かという共通体験を重視するあり方と共通すると思われる。また、実際に何らかの恩恵を受ける場合に、「ありがとう」という代わりに「すみません」と表現することは、日本語では日常茶飯事である。この二つを疊語的に用いることで、より一層の「感謝」や「謝罪」の意を表すという用法がある。

一方、韓国語では普通、「すみません」を「ありがとう」の意味で使うことはない、と言われる。もちろん、明瞭に線を引きがたい時もある。例えば、「傘を貸してくださり、ありがとうございます／すみません」はどちらでもよい。韓国語における「感謝」と「謝罪」を、日本語と同様に扱うことはあまり有効ではないように思える。韓国語では、「感謝」は、日本語におけるような「謝罪」と表裏の関係をなさず、また「感謝」は韓国語では目上に向かって、日本語では「ウチ」の関係にある者に向かってなされる傾向が強いと言える。日本語の「感謝」は「謝罪」と表裏の関係をなしているが、韓国語では「慰労」と密接に関係している。

○ 秦(2002)

秦(2002)は、テレビドラマや映画を資料に、「ありがとう」「すみません」など、決まり文句のように使われるものを「定型表現」、そして「定型表現」を用いた感謝表現以外に話し手によって感謝表現の言い方にバリエーションを持つものを「定型表現以外のストラテジー」と分類し、日本語と韓国語における感謝の言語表現ストラテジーについて考察を行った。そして、日・韓とも「定型表現」の使用が多いという点では同じであるという結果を得た。しかし、日本語は「定型表現」のバリエーションが豊富であるのに対し、韓国語は「定型表現」のバリエーションが少ない。そして日本語では親疎・上下にかかわらず、常に「定型表現」が使用されているが、韓国語では日本語ほどではない。特に、親しい関係の人に対して「定型表現以外のストラテジー」のみの使用が多くなる傾向があることを

明らかにした。

2.5.2.3 日中の対照研究

日中両言語の対照研究では、崔(2000)と安(2005)が日中韓(朝)において、感謝を表す表現の使用状況を調査し考察した。

○ 崔(2000) : 日中韓

崔(2000)は、アンケートを用いて次のような調査を実施した。

- 1) 与えられた各状況において、被調査者が感謝の気持ちを表すのにどのような表現を用いるか。
- 2) 感謝・詫び・挨拶・その他の種類の心理を設定し、それぞれの状況における心理状態は何か。

結果は、日中韓における感謝を表す表現の仕方、及びそれぞれの表現を使用する時の心理状態は異なっていることが明確になった。特に日本人の感謝を表す表現の仕方は、中国人と韓国人に比べて大きく異なっていることが浮き彫りになったが、これは日中韓における感謝を表す表現の使用を規定する社会的規範と「先生」や「母」に対する意識の違いに起因するものである。中国人と韓国人の差はあまり出てこなかったが、それは中国語と韓国語においては、詫び表現が感謝を表す表現として定着していないからだと主張した。

○ 安(2005) : 日中朝

安(2005)は、相手から何らかの恩恵を受けた際、感謝表現を用いて相手にお礼を言うのは日常生活の中で欠かせない言語行動であるとしている。感謝表現にはいろいろな形式のものがあ、相手によって、場合によって、それぞれニュアンスの違う言語表現が用いられると述べ、日本語、中国語、朝鮮語における感謝表現についてその使用実態を探るため、それぞれの言語を母語とする日本人、漢族、朝鮮族に対し、アンケート調査を行い、以下のような相違点を明らかにした。①漢族と朝鮮族は日本人より詫びの言語表現の使用が顕著に低い。②金銭的問題において、日本人は詫びの言語表現を多用し、漢族と朝鮮族はほとんど使用しない。③漢族と朝鮮族は相手が「自分の両親」である場合、その他の言語表現を多く使用するが、日本人はあまり使用しない。

2.6 「再度の感謝」の先行研究

日本語では「先日はありがとうございました」のような「再度の感謝」をよく耳にする。日本社会で、機会があるたびに、何回も他人にもたらされた過去の利益や恩恵に対して感謝する。その場で誠心誠意に感謝すれば十分ではないのか、何のために何回も感謝するのか、他人行儀に思われないのかなどの疑問点が残されている。また、「再度の感謝」は「その場の感謝」とどこが異なるのだろうか。そして、日本語に対して中国語では「先日はありがとうございました」のような感謝表現が非常に少ないが、この差が何を意味しているのかを解明するために、本論文の第五章で考察する。

「再度の感謝」を中心に行った研究は、筆者の知る限りでは施(2007)しかないが、「再度の感謝」が中心ではないが、部分的に扱った研究はいくつか見られる。国広(1977)、佐久間(1983)、金田一(1987)、鍋倉(1987)、川村(1991)、西原(1994)、森山(1999)、加藤(2001)、野元(2001)、彭(2005)、相原(2007)などである。ここでは、それらの先行研究の中で「再度の感謝」に言及している内容を抽出し、まとめる。

施(2007)は、アンケート用紙を用いる方法のほか、面接調査と観察調査も加え、中国人と日本人、合計 640 名を対象に調査を行った。調査の結果に基づいて、再感謝表現における日本語の「先日はどうも」、中国語の「前几天太谢谢了～」について、両言語の使用意識、評価、特徴及び性差、年齢差などの対照研究を行った。その結果、再感謝表現は日本語独特のものであることが検証された。中国語では恩恵を受けた時点で一度だけ心を込めて深く感謝すればそれで十分であり、次に会った時一切そのことに言及しないのが一般的である。これに対して日本語ではその時点のみならず、再会のたびに何度も感謝の意を述べるのが好まれる。したがって、異文化コミュニケーションを行う際に、中国人の目から日本人がせせこましく、付き合いづらいと映ることもある。逆に恩恵にあまり固執しない中国人は、日本人からは相手への遠慮を欠いて無神経な人として捉えられることもある。こうした言語行動上の違いは異文化間の誤解・摩擦の原因にもなると指摘している。

川村(1991)は、「先日はどうも」について、日本人にとって相手からの恩恵行為に対して機会あるごとに言及することが人間関係をよりよく保っていくための重要なコミュニケーションルールになっていると述べた。しかし、機会あるごとに言及するといっても、いつまで続けるかについて、西原(1994)は、「先日はどうも～」のような「感謝」はいつまで続けるのが適切なのか正確な資料はないと指摘している。

加藤(2001)は、「先日は大変お世話様でした」や「昨晚は大変ご馳走に～」など是一種の出

会いのあいさつにもなっていて、出会いがしらに、まず言わないと「恩知らず」という評価を受けたりすると指摘している。そして、相原(2007)は、「この間はどうも」はあいさつ言葉になっており、感謝の心情を伴わなくてもよく、コミュニケーションの潤滑油のようなものであると主張している。

日本語と中国語における感謝の相違点について、彭(2005)は、日本の「感謝表現」において、「先日はどうもありがとうございました」などが中国語の言語習慣と異なるのは、全く気に留める必要はないほど小さいことでも、例えば、一度、一緒にコーヒーを飲んだとか、電話を一回かけたぐらいでも、次回会ったとき、きちんとお礼を言うのが当然と考える点であり、そこに対人的な「配慮」が見られると主張している。

一方、日本の「再度の感謝」の背景にある理由についての研究としては、国広(1977)、鍋倉(1987)、金田一(1987)などがある。

日本語の感謝表現では、過去のことに関連する表現が多く、国広(1977)は、日本とアメリカでは「再会」の形が異なり、日本人は「この間はどうも(ありがとうございました・お世話様でした)」のような発話をするのが非常に明確な習慣であると指摘している。そして、「この間はどうも(ありがとうございました・失礼しました・お世話様でした)」の類の発話は、この前会ったときのことがずっと念頭にあったということを示すものであるが、換言すれば、この前から再会までの物理的な断絶を心理的な記憶によってつなごうとするものと解され、特に何らかの恩恵を蒙っている場合は、その恩恵を忘れずにいたということ「この間にご馳走さまでした」のように表明することが期待されていると分析した。また鍋倉(1987)は、「先日はどうも～」などの言い回しに触れ、日本文化では、過去という時間が英米文化でよりも重要視されていると主張している。

さらに、「再度の感謝」にとどまらず、金田一(1987)は、感謝の原行為による不均衡は持続しやすく、その不均衡を何度でも補償しなければならないという傾向が強いと述べた。

「再度の感謝」に関する先行研究の大半は、簡単に「再度の感謝」に触れ、あいさつ言葉の一種、過去の関係の確認などとして扱っているが、「再度の感謝」の条件、すなわち、どのような状況で「再度の感謝」が起こるのか、利益が大きければ大きいほど「再度の感謝」をする傾向があるのかなどには一切触れていない。また、中国語では、そもそも「再度の感謝」が重要視されず、「先日はありがとうございました」のような感謝表現もないが、再度の感謝場面においては他の感謝表現が使用されるのだろうか。これらの課題については第五章で考察する。

2.7 問題点と研究課題

感謝に関わる研究では、感謝と謝罪、感謝場面の「すみません」、感謝の相関要素などの考察がなされた。また例外なく謝罪表現「すみません」の使用が扱われている。

「すみません」について、金田一(1987)は、感謝として使われる時に、その条件は、基本的に「ごめんなさい」と同様であり、自分のした行為(あるいはしなかった行為)によって相手に不利益を与えた、ということであると指摘している。また「すみません」の機能について、熊取谷(1990)は、「話し手にとっての快適状況」を「聞き手にとっての不快状況」として扱う視点の移動を伴う「状況転換」の結果生じたものであり、この「状況転換」は丁寧行動の方策として機能していると分析している。また、このような丁寧行動がすべての感謝場面で有効ではなく、制約も存在しているとしている。また、西原(1994)、森山(1999)、岡本(1991)、小川(1993・1995)、山本(2003)等は異なる側面から分析している。

先行研究では、研究者は第三者の角度から客観的に、ある状況で話し手の使用表現を分析し、客観的な手がかりに基づいて考察するのが一般的であったが、実際の話し手の認識とは異なる可能性がある。また、感謝場面と謝罪場面が考察されてきたが、話し手の意識を詳しく分類して考察した研究はない。従って、話し手と聞き手の状況を考慮し、ある状況とある条件に基づき、感謝場面と謝罪場面はどのような条件下で成立するか、根本的な特徴を分析していく必要がある。これらの問題を解決するために、有効な枠組みを作り、出来事の発生、それに対する意識、意識に基づく可能な表現などの手順に沿って、感謝場面と謝罪場面の本質を分析し考察する。

一方、日中の対照研究では、崔(2000)が、中国語と韓国語においては謝罪表現が感謝を表す表現として定着しておらず、感謝を表す表現の仕方は異なっているものの、日中韓とも感謝の気持ちと謝罪の気持ちを共通して持っていると指摘している。しかし、中国語において謝罪表現はどのような形式を用いるのか、そしてどのような条件が整った場合に謝罪表現が感謝の場面で用いられるのかには、言及していない。

また「再度の感謝」について、日本語における感謝及びその言語行動の研究では、「再度の感謝」に言及するものが少ない。「再度の感謝」は、佐久間(1983)、金田一(1987)などでは触れられたが、それを中心に据えて深く掘り下げた研究は少ない。日本語における「再度の感謝」について、施(2007)は、再感謝の研究を行ったが、場面の設定、「再度の感謝」の成立条件と制約などには言及していない。誰に対して、どんなことに対して、用いられるの

か、また、感謝の事柄によって異なるのであれば、どのような要素の影響を受けて行われるのかに関しては、先行研究の中では触れられていない。

以上の問題点を踏まえ、本論文では以下のような研究課題を挙げる。

- ①日中両言語における感謝の言語行動の表現には、どのようなバリエーションがあるかをまとめる。
- ②日中両言語において、謝罪表現の感謝場面における使用を解明する。
- ③「再度の感謝」の成立条件や制約などを明らかにする。
- ④日中における感謝の言語行動の差の要因を明らかにする。

第三章 日本語と中国語における感謝の言語行動の特徴

3.1 研究方法

3.1.1 言語行動に関する研究方法の概観

まず、言語行動の研究にあたっての資料収集の方法を概観し、それぞれのメリットとデメリットをまとめる。

表1 言語行動の研究にあたっての資料収集の方法

(秦 (2008) に基づいてまとめたものである)

	メリット	デメリット
1 自然会話の観察・録音	信頼性、客観性が高い	自然な会話の採取を目的とする以上、被験者に研究テーマを明かさずに採取することになるので、必ずしも欲しいデータが取れるとは限らない。多量に採取するのは簡単なことではない。
2 テレビドラマ・映画のシナリオ、小説中の会話の分析	資料を手に入れやすい。多量のデータを採取できるので、言語表現の傾向や特徴をつかみやすい。	シナリオ・小説の作者の個人差があり、内容の主題と場面の設定をコントロールできない。
3 アンケート調査	多様な調査形式がある。設問回答、自由記述回答、談話完結テストなど、目的によって適切な形式を選ぶことができる。	誘導性が存在している。被験者に先入観を持たせる恐れがある。
4 ロールプレー	書き言葉の短所を補うことができる。	最初に被験者にテーマを明かす場合、誘導性が存在している。被験者に先入観を持たせる恐れがある。テーマを明かさずに行う場合、必ずしも欲しいデータが取れるとは限らない。
6 インタビュー	特に、フォローアップインタビューでは前回のアンケート調査の解釈を求めることができる。	被験者が前回のアンケートを書いたときの心境を完全に覚えているとは限らない

3.1.2 本論文の研究手法

言語行動に関する研究方法については、実生活の、自然な会話の収集が重要である。しかし、特定の言語行動の研究に役立つ言語表現は、生活でよく使用される言語表現全体の一部しか占めていない。有効かつ頻繁に使用されるのがアンケート調査法と映画やテレビドラマのシナリオを用いる方法である。まず、先行研究の研究方法をまとめる。

①アンケート調査：

住田(1990)、岡本(1991)、小川(1993・1995)、赤堀(1995)、(三宅(1993・1994)
洪(2006)、崔(2000)、安(2005)、施(2007)、田中(2007)

②映画やテレビドラマのシナリオ、セリフの文字化

山本(2003)、(中田(1989)、生越(1994)、谷口(2007)、秦(2002)

上述した二つの方法には、それぞれ長所と短所があるからこそ、特定のデータ収集に対しては、それぞれの効果が得られる。例えば、同一の場面に対する反応の違いを明らかにするには、アンケート調査の方法がより有効である。それに対して、言語行動の研究の中では、言葉の使用を再現するのも重要であり、言語行動の成立する条件を満たすテレビドラマのセリフが、有効なデータに成りうる。より多くの場面における会話が採取でき、研究素材となるデータの収集もできるためである。さらに、テレビドラマのセリフは、大量のデータを集めやすいという長所もある。

研究課題①②を解決するために、本研究の資料の収集方法として、予備調査では対面インタビュー調査を行うが、本調査では日中両言語のテレビドラマの台詞からデータを採取する。研究課題③を解決するために、場面や人物などを設定し、回答者自身がその場面や人物であると想定した場合の反応や対応などをアンケートの形式で調査する。

テレビドラマの中で現れる会話は、完全な自然な会話とは異なるが、その発話が感謝表現の研究に使われることに対して無意識である点で、自然発生的な会話であると言える。しかし、欠点は、収集したデータが、必ずしも日本語母語話者と中国語母語話者の感謝表現に使われる戦略のすべてを網羅しているわけではないという点である。これまでの先行研究でも、このような限界が存在している。ただ、実際の状況から見ると、このような収集方法でも、基本的な感謝表現のバリエーションを収集でき、感謝の言語行動の特徴を観察できると考える。

また、テレビドラマの選択も重要であり、実際の生活にもっとも近接している題材の中

心に選択し、文字化した感謝に関わる台詞を標的データとして分析する。本論文は、評価が高いテレビドラマと映画の中から、登場人物、話者の世代や場面などが多様なものを選び、その中の「感謝」に関する用例を収集し、整理する。以下の表 2 で資料を採取する段取りを説明する。

表2 本研究のテレビドラマによる資料の採取方法

	テレビドラマによる資料の採取方法
1	できるだけ日常生活に近いテレビドラマを選ぶ。
2	テレビドラマの中で感謝に関する表現を採取する。

テレビドラマのデータは、シナリオの作者によって書かれたものではあるが、場面の論理性・言葉の選択・人物関係が多数の観衆の理解や行動意識の範疇と一致するように作られていると考えられる。もちろん、題材によって、人物や物事も変わり得るが、感謝表現の研究を意識していない話し手の発話が研究データとして利用できる。

大量の言語表現の入手には、テレビドラマのセリフが便利で有効な手段である。しかし、シナリオには、しばしば言語行動の研究に役立つ部分が省略されることがある。言い換えれば、テレビドラマの対話の中で、作者によって書かれたシナリオには存在しない部分も、実際の言語行動には存在している。また、シナリオの或る言語表現が登場人物の声調や表情などの変化に伴い、実際に表したい意図も変わる可能性がある。さらに、会話の場所、環境、第三者がいるか否かという状況などが、言語行動に一定の影響を与える可能性もある。したがって、テレビドラマのセリフを考察する際に、実際のテレビドラマを最初から最後まで、音声を聞きながら登場人物の言語行動を考察していくのが最も適切である。

データを採取する際、日中両言語のテレビドラマに対して共通の分類法を用いた。データ採取は、出演した人物が何らかの恩恵や好意を受けた際の、聞き手に対する発話表現が対象となっている。感謝の意味だと判断できる発話であれば、表現形式自体が感謝表現・謝罪表現であるかは問わない。

謝罪表現に関して、先行研究では主に感謝場面での使用について議論されてきた。本調査はこれらの先行研究に基づき、出現した謝罪表現の前後の文脈を考慮しながら、謝罪場面であるか、感謝場面であるかを確認した上で、有効なデータであるかどうかを識別する。

また、対象となる表現そのものだけでなく、感謝表現に関わる周辺部分の会話も採取して文字化し、感謝場面の特徴を分析する。

データ資料の説明：

調査したテレビドラマは、以下の通りである。

中国語のテレビドラマ：	《媳妇的美好时代》	10 話	400 分
	《蜗居》	10 話	450 分
	《奋斗》	10 話	472 分
	《家常菜》	6 話	270 分
	《幸福像花儿一样》	1 話	45 分
	《杜拉拉升职记》	10 話	426 分

合計：2063 分

場面：161 個 データ：178 個

日本語のテレビドラマ：	『秘密』	9 話	441 分
	『同窓会』	9 話	438 分
	『白夜行』	11 話	558 分
	『大切なことはすべてあなたが教えてくれた』	10 話	475 分
	『流れ星』	10 話	475 分

合計：2387 分

場面：166 個 データ：190 個

3.2 研究データ

研究データを収集する際、日中両言語の対照研究の目的と照らし合わせ、適切な分類法を選択する必要がある。その前に、従来の感謝表現の分類を考察して、それをもとにして本論文の分類法を提示する。

Coulmas(1981) では、感謝事態を次の4つの基準で分類することを提案している。

- a 「事前の感謝」対「事後の感謝」
- b 「有形の物事への感謝」対「無形の物事への感謝」

- c 「恩恵をもたらす者が開始した行動への感謝」対「恩恵を受ける者の依頼、希望、命令により始まった行動への感謝」
- d 「恩義 (indebtedness) を暗に含む感謝」対「恩義を暗に含まない感謝」

佐久間(1983)は、感謝表現の方法と形式について以下のように分類した。感謝表現がどのように表されるかを表現方法の違いから大きく四つに分けた。

- a. 慣用的な定型表現をそのまま用いる：

「ありがとう」
「どうもありがとう」
「(どうも) ありがとうございます」
「(どうも) ありがとうございます」
「どうも」(単独)
「すみません」
「すいません」
「どうもすいません」

- b. 事実関係を叙述する：

「先だってはいろいろご教示いただきまして」
「本当に長い間、何から何までお世話になりました」

- c. 話し手の気持ちを叙述する：

「本日はこのような送別会を開いていただき本当に嬉しく、幸せに思っております」
「ありがたいな」
「いい気持ちだよ」

- d. 言葉にならない表現：

「お父さん…」(涙が流れそうな目で父を見つめる)

また、熊取谷(1994)は、適切性条件(命題内容条件、予備条件、誠実性条件、本質条件)の角度から、感謝表現ストラテジーを分類した。

- a. 感謝する旨の表明： 「感謝いたします」
「お礼を申し上げます」
- b. 感謝する意志・希望・必要性がある旨の表明：
「ここに感謝の意を表します」
「感謝の意を表したいと思います」
「～してくださった方々にあつくお礼を申し上げたい」
「なんとお礼申し上げてよいか分かりません」
- c. 聞き手が発話者に行為 A をもたらした旨の言述： 「本当にお世話になりました」
「いつもお世話になりました」
「いろいろご教示いただきまして」
- d. 聞き手が発話者に益をもたらした旨の言述： 「たいへん助かりました」
「おかげさまで」
- e. 嬉しく思う、ありがたく思う、旨の言述：
「ありがとうございます」
「本日私のためにこのような立派な会を開いていただき、本当にうれしく思っております」
- f. 聞き手に（あるいはその行為）に対する賛辞： 「これはご丁寧に」
「これはご親切に」

また、赤堀（1995）は、熊取谷（1994）の「表現ストラテジー」をもとにして、以下のような「感謝表現ストラテジー」を提案した。

a 感謝行為に関する言及

- 感謝する旨の表明： 「ご協力に感謝します」
感謝の必要性の表明： 「あなたには感謝しなくちゃね」
感謝の意志の表明： 「昨日のお礼を言いたくて」
感謝の方法を知らない旨の表明： 「何とお礼を言えばいいのか」

b 心的態度の表明

- 驚き・喜びの気持ちの表明： 「いやー、うれしいわー」
感謝の気持ちの直接の表明： 「ありがとうございます」

恐縮の念やすまないという気持ちの表明：「すみません」

c 感謝の対象事物への言及：「私にまで気を使ってくれて…」

d 負担に関する言及

相手の負担への言及：「これ手に入れるの大変だったんじゃないですか」

負担をかける/かけた旨への言及：「お手数かけました」

行為・気遣いの不必要性への言及：「気使わんでもええに」

e 利益に関する言及

利益内容への言及：「やー、なんとか間に合ったわ」

利益の有効利用に関する言及：「ぜひ参考にさせていただきます」

f 返恩の申し出： 「今晚ご飯おごるわ」

g プラス評価

相手自身へのプラス評価：「さすがー、お父さん」

関係事物へのプラス評価：「おもしろそうやなー」

念願の事物である旨の表明：「あ、これ見たいなー思ってたん」

h 相手（またはそのウチの人物）が受益者であることの明示

利益のもたらし手の明示：「あんたのおかげよ」

相手の存在、行為の不可欠性への言及：

「〇〇ちゃんがいなかったら間に合わなかったよ」

秦(2002)では、定型の感謝表現と定型以外の表現を分類した。定型表現は決まり文句のように使われる直接的な表現であり、定型以外の表現は「定型表現」を用いた表現以外で話し手によって言い方にバリエーションを持つ表現である。特に定型以外の表現が赤堀(1995)の「喜びの気持ちの表明」、「感謝の対象事物への言及」、「相手の負担への言及」、「行為・気遣いの不必要性への言及」、「利益に関する言及」、「返恩の申し出」、「プラス評価」、「相手（またはそのウチの人物）が受益者であることの明示」を参照し「非定型表現」と位置づけて分類した。具体的な分類は以下のように示す。

定型表現：

a 感謝の気持ち/そのものの表出：「ありがとう」類

「感謝する」類

「サンキュー」

「どうも」

b 申し訳ない気持ちの表出：「すみません」類

「悪い」類

「恐縮」類

c 相手への慰労の念の表出：「ご苦労様」類

d 恩を蒙ったことの表出：「恩に着る」類

e 面倒をかけたことの表出：「お世話」類

f 利益を受けたことの表出：「助かる」類

「お陰さま」類

「ご馳走さま」類

定型以外の表現：

a 直接的な感情の表出：「いやー」

「うれしいな」

b プラス評価：「さすが、あなた」

「美味しそう」

c 負担に関する言及：「これ手に入れるのに大変だったでしょう」

「気を遣わなくてもいいのに」

d 話し手の利益に関する言及：「やー、なんとか間に合ったよ」

e 話し手にとって聞き手（の行為）の必要性・不可欠性の言及：

「〇〇ちゃんいなかったら間に合わなかったよ」

f お返しの言及：「近々メシ奢るから」

g 言葉にできないことへの言及：「なな、なんていうか…」

「なんとお礼を申し上げたら…」

以上の諸研究では、Coulmas(1981)は感謝表現の全体をそれぞれ四つの角度から分類した。それぞれの分類が重なり合い、感謝表現の基本的な特徴が示された。佐久間(1983)、熊取谷(1994)、赤堀(1995)、秦(2002)は、感謝表現をそれぞれ独立のカテゴリーで分類した。特に、佐久間(1983)では「言葉にならない」という非言語行動も扱われている。また、これらの分類では、謝罪表現を含む感謝表現のバリエーションはほぼ同じであり、それぞ

れの表現の意味解釈の点で異なりが見られる。

本研究のデータでは、ほぼ、先行研究と同程度のバリエーションの感謝表現を集めたが、すべての感謝に関する表現を収集するのは非現実的である。まず、日中における感謝場面での謝罪表現の使用を主要な研究目的の一つとして、収集したデータを「感謝型表現」、「謝罪型表現」、「混在型表現」、「その他の表現」の四種類に分けた。このような分類では、先行研究で扱われていない混在型の表現をも研究対象の一部として考察し、日中の両言語では、どのような表現が同様にあるか、どのような表現が特殊なのかを明らかにすることができる。また、各表現を考察する際にも、日中の差を見つけ出すことができる。しかし、このような分類ですべての課題を解決できるわけではないが、まず基本的な日中における感謝の言語行動の共通点と相違点を明らかにすることが本研究の目的の一つである。また、「再度の感謝」を研究するため、アンケート調査法を採用したが、これについては第五章で考察する。

また、感謝の言語行動における表現を対照しやすくするため、両言語のデータ分類は共通の分類法で行う。収集したデータの分類について、本研究ではまず、「ありがとう」や“谢谢”などの典型的な感謝表現を「感謝型表現」と呼ぶ。そして、「すみません」、「ごめん」など、典型的な謝罪表現を「謝罪型表現」と呼ぶ。また、「感謝型表現」、「謝罪型表現」以外の表現を「その他の表現」のカテゴリーに入れることにする。最後に、「感謝型表現」、「謝罪型表現」、「その他の表現」が組み合わさった表現を「混在型表現」と位置づける。これら「感謝型表現」、「謝罪型表現」、「その他の表現」、「混在型表現」の分類を通して、日中両言語の感謝の言語行動における表現のバリエーションとその特徴を考察する。

3.2.1 感謝型表現

感謝型表現は、典型的な表現であり、感謝の表明が明確である。感謝の意を直接に相手に伝えることで、より相手との関係が円滑になる。

3.2.1.1 日本語の感謝型表現

「ありがとう」類

「ありがとう」、「ありがとうございます」、「ありがとうございました」等は、最も典型的な感謝型表現である。特にサービス業において、感謝の言葉がよく用いられている。

【用例1】 (デパートで)

杉田：このショートケーキ二つ。
店員：はい、かしこまりました。
杉田：いや、あ、三つください。
店員：はい…大変お待たせしました。
杉田：はい、ありがとうございます。
店員：ありがとうございます。

(『秘密』第2話)

【用例2】 (イカ焼きを買う場面)

従業員：はい、お待たせ、300円ね。
笹垣：はい、ありがとう。
従業員：はい、ありがとうございました。

(『白夜行』第1話)

上述した二つの場面は、いずれも客が店でサービスを受けている場面であり、現金を払って売り場や店を離れようとしている際に、客が店の従業員に感謝の意を表す表現である。客から従業員に対する感謝の言葉については、表面上、両者が「感謝」と「感謝の返答」を行っていると思われがちであるが、実際には、客の「ありがとうございました」と従業員の「ありがとうございました」は、感謝する対象が異なっている。前者は客が従業員に提供してもらったサービスに満足していることを表明するものであり、後者は、従業員が客の来店に対して感謝の意を表したものである。客がいなければ、店の経営が続けられなく、従業員も給料をもらえないが、その反面、店がなければ、客の生活も維持できない。この点では、客と従業員の依存関係、すなわち、客と店との依存関係が成立していると言える。さらに、この依存関係の認識が、やはり、長いサービス業の競争の中で生まれ、客を喜ばせる言葉を述べ、また客の来店を誘うという店の規則があると想像できる。サービス業において感謝の言語行動が頻繁に行われているのは、単純に客と従業員の個人的な関係においてではなく、店が客との関係を維持する手段として、従業員が店の代表者として、接客を行っているのである。また、上の2例から、待遇表現の違いが見られる。客は普通体を使ってもいいが、従業員は丁寧体を使わないと、客に対して失礼になる。根本的な理由と

しては客が上位にあり、店側が下位にあるという社会心理が働いている。

【用例3】

(笹垣は大通り向こうの建設中のマンションを見て、通行人の中年女性に聞く)

笹垣：お嬢さん。

中年女性：はい。

笹垣：(向こうの建物を指しながら)あれ、何ですか？

中年女性：ああ、バブルが弾けちゃってから、作りかけのままになってさ。今じゃ、子供たちの遊び場になってるんですよ。

笹垣：はあー、ありがとう。

中年女性：はい。

(『白夜行』第1話)

この場面は、情報を求める場面であり、通行人の情報提供に対して感謝しているのである。登場人物の笹垣さんは60代の男性であり、中年の女性に普通体を使い、典型的な感謝表現で感謝の意を表す。この場合、自分より若い人に丁寧体を避け、普通体を使うことが普通であると思われる。

「感謝する」類

【用例4】(フォーマルな場面で、生放送でテレビインタビューされる)

福島：今日をもって、私は国土交通省を退職しますが、真実を話したことは後悔しておりません。この場でお話しする勇気を持ってなければ、おそらく、一生逃げ回る生活をしていただいでしょう。身勝手な理由でいなくなった私を心配し、この場に送り出してくれた友人たちに感謝したいと思います。

(『同窓会』第9話)

【用例5】(ホテルの前で車を降りる客)

亮司：すみません。こちらにお泊りの方なんですか？

泊まる客：そうですけど。

亮司：(偽物の警察官証を出す)突然のお願いなんですけど、お部屋を譲っていただくこと

はできないでしょうか？先ほど、こちらのホテルに指名手配犯がチェックインしまして。

泊まる客：え？

亮司：我々としてはそばで監視したいのですが、部屋がいっぱいです。

泊まる客：そうですか。

亮司：あの、代わりとってはなんです、アトランティックホテルにお部屋をご用意させていただくということでは。

泊まる客：アトランティックホテル。なら、いいか。

亮司：ありがとうございます。キャンセルは私どもの方でやりますので、お名前をいただけますか？

泊まる客：三沢千都留です。

亮司：ご協力感謝します。

(『白夜行』第7話)

【用例6】(クラスの前で)

柏木：こうして終業式まで君たちと一緒に過ごすことができ、本当に感謝しています。

みんな、これから大変だと思うけど、頑張ってください。

(『大切なことはすべて君が教えてくれた』第9話)

話し手のありがたい気持ちを表明する「ありがとう」類が、全データの 55.8%を占めているのに対して、「感謝します」などはわずか 3.7%に留まった。両者とも慣用表現として受け入れられているが、使用の頻度の差が大きい。「ありがとう」類は生活場面でよく観察されるが、もっとフォーマルな場面では、「ありがとうございます」のような、「ます」「ました」をつけた丁寧体の感謝表現が用いられている。それに対して、上述した3つの場面では、いずれもフォーマル或は公務の場面であり、その中の2例は感謝する対象が特定の個人ではなく、複数の人々に対する感謝の表明となっている。「感謝します」は特に多くの人々の前で、感謝表現としてよく用いられているようである。

「サンキュー」類

【用例 7】

柏木：平岡だよな！教室ではボールを投げない。小学校でも言われたろ。

平岡：言われました。

柏木：とか、言いつつ、実はさっき平岡に頼んだんだよね。新しいクラスだから、最初にかっこいいところ見せたいって。なあ？

平岡：は？何だよ。

柏木：平岡、サンキューな。

(『大切なことはすべて君が教えてくれた』第1話)

【用例 8】

岡田：あつ、びっくりした。

梨沙：早いじゃん。

岡田：寒くなかった？

梨沙：ううん。

岡田：(缶コーヒーを渡す)飲む？

梨沙：サンキュー。

(『流れ星』第5話)

【用例 9】(食堂のカウンターで食事をする)

店員：(料理を運んで)はい。

梨沙：サンキュー。

(『流れ星』第8話)

「サンキュー」は英語の「thank you」に由来している。まだ定着していないのか、「サンキュー」の使用率はそれほど高くない。上述の用例では、「ありがとう」の代わりに使用されているが、「ありがとうございます」と「thank you」の違いについて、森山(2003)では、お礼が関係認定的な意味を持つことを述べているが、以前に感謝を感じるような出来事があったということが前提になっている。しかし、「thank you」に関しては、相手がそうしてくれることを前提として、先に感謝の言葉を述べ、ある意味で相手を動かすための

強い表現だと指摘している。このような先取りの感謝は、話し手の意志を一方向的に相手に押し付け、相手のフェイスを損ねるリスクが高い。

「どうも」類

【用例 10】

岡田の母：あっ、神谷先生。

神谷：夜分にすいません。まだ連絡はないですか。

岡田の母：ええ！

[お茶を出して]

神谷：どうも。

(『流れ星』第5話)

【用例 11】(電話で)

梨沙の兄：もしもし。ああ、先日はどうも。え？あっ、もう記事になるんですか？今日？
ああ、そうですか。ありがとうございます。

(『流れ星』第8話)

【用例 12】

義父：平介君、どうだ？一緒に。(コップを持ち上げる)

杉田：いいですね！いただきます。

義父：それじゃ。(乾杯)

杉田：どうも。

(『秘密』第4話)

「どうも」の意味について、『大辞林』第三版によると、「どうも」は、副詞で感謝や謝罪の気持ちを表す挨拶の語に添えて、その意を強調するものである。よく後半を略して感動詞的に用い、またくだけた挨拶語としても用いる。例えば、「どうもありがとう」「どうもすみません」等である。また、「どうも」はいろいろな意味を持ち、具体的にどのような意味を指しているかは、前後の文脈を見なければ読み取りにくいことがある。例えば、「先日はどうも」のように、感謝なのか謝罪なのかが曖昧で、文字上では判断しにくいので、通

話中のニュアンスからしか判断できない。「どうも、どうも、ご面倒をおかけしました」「これはどうも」「先日はどうも」はこの種の表現であろう。感謝のときに「ありがとう」の代わりに「どうも」ですませ、友達と顔を合わせて「こんにちは」の代わりに「どうも」であいさつする。また、込んでいる電車で隣の人の足を踏んだとき、「どうも」で謝罪する。「どうも」は日本語の便利な表現であると言えよう。

「おおきに」類

【用例 13】

刑事：笹垣さん、これ頼まれた資料です。

笹垣：おおきに。

(『白夜行』第7話)

【用例 14】

隣人：あ、いえ、すまへん。うちのたけしの嫁がくれたんですけど、たしかにお好きになったでしょ？もう、うちは鉢植えいっぱい、どうぞ。

雪穂の養母：おおきに。

(『白夜行』第9話)

「おおきに」は、近畿を中心とした西日本に主として分布するものであり、本来「大変に」という意味合いでの副詞で、この点では「どうも」の用法と似ているが、「おおきに」だけでもかなり丁寧度が高いという特徴がある。ただし、より高い丁寧を表す場合に「おおきにありがとうございます」のようになることもある。

3.2.1.2 中国語の感謝型表現

“谢谢”

【用例 15】(毛さんの両親が保管する玉の腕輪を宝石店の従業員に鑑定してもらう)

毛豆豆妈妈：十万呢？真的假的呀？

(十万元ですか？本当ですか？)

鉴定师：最少十万。你赶紧把它收好了。

(少なくとも10万、早く買ってしまったほうがいいですよ。)

毛豆豆爸爸：您不会看走眼吧。

(見間違えることはないでしょうね。)

鉴定师：不会的，你相信我。凭我这么多年的经验不会错的。

(ありません、私を信じてください。長年の経験で、そのような間違いはありません。)

毛豆豆妈妈：哦，谢谢啊！

(え、ありがとう。)

鉴定师：不客气。

(どういたしまして。)

(《媳妇的美好时代》第6話)

※中国語の用例における和訳は全て筆者による。以下同様。

【用例 16】

杜拉拉：你好，帮我查一下 305 的住客有没有入住。

(こんにちは、部屋番号 305 の客がチェックインしたか調べていただけませんか。)

服务员：是的，大概半个小时前。

(はい、半時間ほど前にチェックインしています。)

杜拉拉：太好了，帮我给她打个电话好吗？

(よかった、彼女に電話をかけてもらってもよろしいでしょうか。)

服务员：对不起，住客通知我们，拒绝一切打扰。

(すみません、お泊りのお客様から、一切の邪魔はしないでほしいと伺っております。)

杜拉拉：这样啊，谢谢。

(そうですか。ありがとうございます。)

(《杜拉拉升职记》第7話)

【用例 17】

二庆妈：中午就别做饭了，我正好要包饺子，咱们一块吃。

(昼はご飯を作らないでください、私がギョーザを作りますから、いっしょに食べましょう。)

何文惠妈妈：二庆妈，您甭客气了，太麻烦了。不用不用。

(二慶のお母さん、お気遣いなく、ご面倒でしょう。結構ですよ。)

二庆妈：那客气什么呀。就这么定了，俊玲，一块儿来。那我走了啊。

(遠慮しないでください。そうしましょうよ。俊玲、一緒に来てね。じゃお先に。)

何文惠妈妈：谢谢啊。

(ありがとうございます。)

(《家常菜》第2話)

“谢谢”は全データの41.8%を占めており、最も普遍的な感謝表現であると認められる、“谢谢你”“谢谢您”と合わせると、全データの79.7%を占める。

中国語では、何らかの利益や恩義を受けた際に、他人に対して儀礼的な言語行動をとるのが一般的である。このような言語行動を通じて、個人の教養と“礼貌”を示すことができる。しかし、儀礼的な“礼貌”について、鄧炎昌・劉潤清(1989)では、「小さいことで他人に手伝ってもらおう際に、例えば、鉛筆を貸してもらおうことや道を聞くことなどに対して、一般的に“谢谢”などを使用しない。特に、親戚関係や親しい友人関係では、さらに遠慮する必要はない。一方、中国人は自分に感謝の気持ちがあることを相手も分かっていると考えたとき、わざわざ言わない。(筆者訳)」と述べている。

中国語では、ウチとソトの境界ははっきりしている。家族内、親しい関係の間では「他人行儀」の言語行動をとらない。感謝の場面で、小さいことについて、一般の関係ではあまり感謝はしない。特に家族内で感謝の言語行動を行うことはさらに少ない。

“谢谢你”

【用例18】

徐志森：人家这样对你，你怎么好意思给人家九二折呀，要我说啊，九折得了。也算对得起

人家对你的一片深情啊。

(他人にこんなに優しくされて、あなたはどのようにして8%引きで家が売れるのだろうか。

私なら、1割引にします。こうして初めて、他人の一面の深い情に申し訳が立つというものです。)

杨晓芸：真的？九折。

(本当ですか、一割引。)

徐志森：没问题，叫朱经理带你去挑户型。

（問題無いですよ。朱經理に連れて行ってもらって、間取りを選びに行ってください。）

杨晓芸：哎呀，叔叔，谢谢你了，太谢谢你了。

（あ、おじさん、ありがとうございます。どうもありがとうございます。）

（《奋斗》第9話）

【用例 19】

余味：毛，毛峰他爸妈同意呀？

（毛峰の両親は賛成しますか。）

秦素素：同意同意，他们家人全同意，要不然我也不会这么快就结婚。我不会来求你的，真的我这真是没有办法了。余味，你真的你帮助我。就算我求你还不行吗。这么多年我什么时候求过你呀？

（賛成します、彼の家族すべてが賛成します、そうでなければ私もこんなに早く結婚できませんよ。結婚できないならば、あなたのところに頼みにも来ないじゃないですか、私は、本当に途方に暮れているんです。余味、助けていただけませんか。お願いします。今までこんなに頼んだことはなかったでしょう。）

余味：是，是，没问题，其实我给你说，我也是挺祝福你的，好不容易有一天能结婚了。就这样，这这这房子我就借给你了。

（そうだね。問題はない。本当に私も君の幸せを祈っているんだよ。せっかく結婚ができる日が来たんだ。じゃ、この家を貸そう。）

秦素素：你你你，你真的借给我了。

（本当に貸してくれるんですか。）

余味：真借给你了呀。

（本当だよ。）

秦素素：谢谢你，余味！（拥抱对方）

（ありがとう。余味！）

余味：不客气，不客气。

（かまわない、かまわない。）

（《媳妇的美好时代》第3話）

【用例 20】

同事：小郭啊，我想去南屏路，你知道怎么走吗？

（郭さん、私は南屏路に行きたいんですが、どうやって行くか知っていますか？）

海萍：南屏路啊，挺远的，你从哪出发？

（南屏路ですか、遠いですよ、どこから行くんですか。）

同事：就从办公室走啊。

（事務所からです。）

海萍：从办公室那你就在楼下做 89 路，然后到青少年活动中心下，再转 66 路，过江一户到时代广场下，原地不动，然后坐 193 机场快线，有一站叫松吴线路的，你下来以后沿马路右手边第二个红绿灯右拐就是。

（事務所からなら、外で 89 路のバスに乗って、それから青少年活動センターで降りてからまた 66 路に乗り換え、江一户経由タイムズ・スクエアで降りて、そこで 193 空港快線に乗って、松吴线路という駅で降りてから、道路の右側に沿って 2 つ目の交通信号を右に曲がると目的地に着きます。）

同事：太谢谢你了，谢谢妹妹。

（どうもありがとうございました。郭さん、ありがとう。）

（《蜗居》第 2 話）

「谢谢+第二人称」という形の感謝表現である。「你」（あなた）や「您」等の人称が、他人ではないことを強調し、相手を特定する。全データの中では「谢谢+第二人称」のパーセンテージは 34.7%であり、「谢谢」に次いで二番目によく使用される感謝表現である。また、「谢谢+第二人称」はしばしば、相手の名前や相手との関係も表明し、「你」の指している具体性を明確化する。例えば、上述した例の「叔叔，谢谢你了，太谢谢你了」「谢谢你，余味」「太谢谢你了，谢谢妹妹」の中の「叔叔」「余味」「妹妹」などは、相手の名前或は相手との関係である。しかし、[thank you]のように、既に感謝の相手は誰なのか示しているのに、二度も相手の名前或は相手との関係を表明するのはどういう理由なのであろうか。

ここでは以下の二点を指摘しておこう。まず、「你」は 2 人称単数であり、相手に対する敬意は基本的にない。【用例 18】から見ると、話し手は目上の人「叔叔」と仲が良くて親し

い関係であり、「你」の呼称を用いても失礼にならない。この場合は、三宅（2011）のマイナス配慮に当たるだろう。逆に、「您」を使った「叔叔，谢谢您了，太谢谢您了」は、「叔叔」との間に心理的な距離感が感じられる。即ち、遠慮すべきでない場合に、遠慮するのと逆の効果につながるだろう。次に、相手の名前或は相手との関係の表明については、相手との関係が良好であるという「親しさ」を表すだろう。実際の感謝の言語行動は、純粹な言語行動ではなく、動作や表情などが不可欠である。言い換えれば、相手の名前或は相手との関係の表明を通じて、相手との距離がより近づくようにしているということだと思われる。これは感謝場面の配慮表現の一つであると言えるだろう。

“谢谢您”

【用例 21】（宋思明さんが携帯を海藻に贈る）

海藻：这样好像不太好吧，这个是新款的，看起来很高级的，我过两天就要买手机了，这个还是留给您爱人用吧。

（それでは申し訳ない、これは新作でとても高級そうですし、近いうちに私も携帯を買うので、これはやはりあなたの奥さんにどうぞ。）

宋思明：没关系，你就拿着吧，我觉得这款手机倒是跟你的青春朝气挺相配的。你就别客气了，这也算是帮助推销商，行了，别客气了。

（大丈夫、お受け取りください。この携帯はあなたの活動的なイメージに合っていると感じます。ご遠慮なく、ここはセールスマンを助けると思って、そういうわけで遠慮しないでください。）

海藻：那就谢谢您了。

（では、ありがとうございます）

（《蜗居》第 5 話）

【用例 22】（徐志森が車を運転して米莱を乗せる）

米莱：我在前面一点下，谢谢您带我一段儿。

（私はその先で降ります。乗せてくれてありがとうございます。）

（《奋斗》第 9 話）

【用例 23】（余味が毛豆豆を助けた後）

毛豆豆：那个，余先生。那个，不好意思啊，那个。谢谢您谢谢您，挺帮忙的。

（あのう、余さん。あのう、すみません。あのう、ありがとうございます。助かりました。）

余味：不客气，不客气

（いいえ、いいえ）

毛豆豆：我真的挺感谢的。

（本当にありがとうございます）

（《媳妇的美好时代》第 1 話）

以上の用例では、「谢谢您」の使用対象が、それぞれあまり親しくない「上司の友達」（市役所の幹部）、友達のお父さん、知り合いになったばかりの友達である。年齢の差はそれぞれ目上、目上、同年代である。その中で【用例 23】のように、同年代の相手であっても、あまり親しくない関係では、相手のことに配慮して、「您」を使用している。いずれも話し手と聞き手との社会距離が遠い場合、特に年配の人に対しては「您」を使用する傾向が見られる。

“谢谢”の繰返し

【用例 24】

李文华：你什么时候要啊？

（いつ欲しいの？）

杜拉拉：没事，不好找就算了，我下午之前就要交给她。那我现在回去了，奋笔疾书去。

（大丈夫だよ、探しにくいならやめよう。午後までに彼に提出しなければならないから、今帰って頑張る。）

李文华：哎，你等等，我看啊（看表），下一个面试还有十五分钟，要不这样，我现在就给你找，你等着。

（あ、ちょっと待って、次の面接までまだ 15 分ある。じゃ、今から探してみよう。）

杜拉拉：谢谢，谢谢。

（ありがとう。）

（《杜拉拉升职记》第 3 話）

【用例 25】

毛豆豆：叔叔，阿姨，这是我爸妈特地给你们买的咖啡机。因为听说你们都喜欢和咖啡。

（おじさん、おばさん、これは父と母が特にお二人のために買ったコーヒーメーカーです。お二人はコーヒーが大好きだと伺ったものですから。）

姚静：真是太破费了，你们。

（また、皆さんには散財させてしまいました。）

余味爸爸：哎呀，太棒了，我这个人啊，就喜欢很咖啡。哎呦，谢谢，谢谢你们啦。

（わあ、すごい。僕はね、とてもコーヒーが好きなんです。おやおや、ありがとうございます。）

（《媳妇的美好时代》第 5 話）

【用例 26】（余味は彼女の毛豆豆を連れて父と姚静に会う）

姚静：哎呦，豆豆，真漂亮。哦，阿姨今天没什么准备的，太匆忙了，所以就带了。

（おやおや、豆豆、本当にきれいだね。いや、私は今日準備を何もしてなくて、ちょっと慌ただしくてね、だからこれを持ってきたのよ。）

毛豆豆：不用，阿姨。

（要りません。おばさま。）

姚静：拿着拿着，拿着吧。

（どうぞ、どうぞ。）

毛豆豆：噢，谢谢。阿姨，丝巾好漂亮啊。

（それでは、ありがとうございます。おばさま、シルクのスカーフがとてもきれいですね。）

姚静：哦。谢谢，谢谢。

（あら、ありがとう。）

（《媳妇的美好时代》第 2 話）

“谢谢”の繰り返しは基本的に“谢谢”と同じ、恩恵をもたらしてきた聞き手に感謝するもっとも一般的な感謝表現であるが、“谢谢”とは使用条件が異なると考えられる。繰り返し“谢谢”を言うことを通じて、感謝の気持ちの程度をいっそう強めている。

“谢了”

【用例 27】（電話中）

中建：我把你的话都告诉婉芬了。

（君の話をすべて婉芬に伝えたよ。）

徐志森：哦，那谢了啊。

（あ、それは、ありがとう。）

《《奋斗》第3話》

【用例 28】

徐志森：时间不早了，那我不打搅了。

（もう遅くなったね、それでは失礼するよ。）

中建：改天一起吃饭吧，二十多年没见面了。

（いつか一緒に食事をしよう、20年ぶりなんだから。）

徐志森：好啊，中建，方便的话，你告诉婉芬一声，就说我想请他娘俩吃顿饭。

（いいとも、中建。できれば、婉芬への伝言をお願いしたい。彼女たち親子二人にご馳走したいと伝えてほしいんだ。）

中建：好好好，我一定转达。

（分かった。必ず伝えるよ。）

徐志森：好，谢了，中建。

（ああ、ありがとう、中建。）

《《奋斗》第3話》

“谢了”は“谢谢了”の省略表現であり、くだけた表現であると言える。一般的に誠心誠意感謝していないようなイメージがあり、目上の人に使用した場合、逆効果になる。“谢了”の使用率から見ると、わずか3%であり、あまり使用されないようである。用例の中で“谢了”の話者である徐志森は、聞き手の「中建」と親しい関係で、逆に、失礼な感じはまったくくない。そのため、ある程度このような表現を通じて、聞き手との親密さを示すことができると言える。聞き手と話し手の関係という制限があり、目上の人に使用するの是不適当である。

“感谢”

【用例 29】（余味は毛豆豆を助けた場面）

毛豆豆：那个，余先生。那个，不好意思啊，那个。谢谢您谢谢您，挺帮忙的。

（あのう、余さん。あのう、すみません。あのう、ありがとうございます。本当に助かりました。）

余味：不客气，不客气。

（いいえ、いいえ）

毛豆豆：我真的挺感谢的。

（私は本当に感謝しています。）

（《媳妇的美好时代》第 1 話）

【用例 30】

客户：杜小姐，想不到你这么快就过来了。

（杜さん、こんなに早く来るなんて思いませんでした。）

杜拉拉：挺感谢你今天能过来的。但是，竞标的事情还没确定呢。

（今日は来ていただいて感謝します。しかし、競争入札の事はまだ確定していませんが。）

（《杜拉拉升职记》第 5 話）

【用例 31】

海藻：宋秘书，我非常感谢您在我困难的时候给予我的帮助，这里是两万块钱我已经存够了，还有这部手机，您当时说是试用产品，两个月以后要还的。正好我男朋友也送我一部，所以这个也用不上了，里面的信息反馈书我已经填好了，手机真的非常不错，～～。

（宋秘書、私が大変な時に助けていただき、本当にありがとうございます。これはお返しする 2 万元です、また、この携帯、その時、試用品で 2 ヶ月後に返さなければならぬとおっしゃいましたね。ちょうど彼氏が携帯を贈ってくれたので、これはもう使わなくなって、それで中のフィードバック調査の書類も既に記入しました。この携帯は本当にとっても良く～～）

（《蜗居》第 7 話）

話し言葉である“谢谢”に対して、“感谢”は書き言葉であり、フォーマルな表現として使用されている。上述した用例のように、相手を尊重し、感謝の内容も付け加えて使用するのが一般的である。一般的には単独で使用しない。

A：这是送你的生日礼物

(これはお誕生日のプレゼントです。)

○ B：谢谢！

(ありがとう。)

A：这是送你的生日礼物

(これはお誕生日のプレゼントです。)

? B：感谢！

(感謝します。)

以上の二場面では、“感谢”を使えば、聞き手に硬い印象を与える。また、単独の使用は非常に不自然である。

3.2.2 謝罪型表現

「すみません」

【用例 32】(倒れた女性を助け起こす場面)

杉田：(手を伸ばして) どうぞ。

梶川：すみません。

(『秘密』第2話)

【用例 33】(協力してもらう場面)

刑事：最近の顧客名簿を見せてもらえるとありがたいんですが。

ホテル職員：はい。

刑事：ああ、すみません。

(『白夜行』第1話)

【用例 32】の助け起こしてもらった場面と【用例 33】の捜査に協力してもらった場面では、謝罪型表現「すみません」が使用されている。このように、何らかの利益を受けた際に、相手の負担に配慮して謝罪することによって感謝を表すことができる。この種の謝罪型表現の使用は、Brown&Levinson(1987)の言うネガティブ・フェイスから派生される「相手に負担をかけまいとするポライトネス」の一種にあたる。

日本語の「謝罪型表現」が全体に占める割合 (5.3%) から見ると、「謝罪型表現」の使用は主要な感謝表現とは言えない。全体の大半を占める「感謝型表現」(66.8%) に比べれば、やはり使用率が低い。しかし【用例 32】【用例 33】のように謝罪表現が単独で感謝場面で用いられる例が中国語のデータにはないという点で、謝罪型は日本語の特徴であるということ、中国語における感謝場面では、謝罪表現が単独で使用されないことが分かった。

3.2.3 その他の表現

3.2.3.1 プラス指向表現

日本語の用例：

「ご馳走さま」

【用例 34】(電話で話す場面)

大久保：ああ、大久保です。昨日はごちそうさま。

陽子：何がごちそうさまよ。

(『同窓会』第2話)

【用例 35】(食事の後)

岡田：(お母さんに)ごちそうさま。

(『流れ星』第3話)

【用例 36】(家で食事が終わった後)

亮司：(両親に)ごちそうさま。

(『白夜行』第1話)

「ご馳走さま」は、日本語では、よく使用されている。友達からご馳走になった時に、

使用する感謝の表現である。一方、中国語の対応表現の“承蒙款待”“谢谢款待”は親しい関係では使用されず、特に家族には使用しない。また、次の日に会ったときに、「昨日はご馳走さま」のような感謝のあいさつは一切しない。基本的に食事のような毎日やることには感謝せず、感謝の言葉を言うより、次の食事でご馳走するなど実際の行動、或は、こちらからご馳走する約束をして、相手の恩を忘れないことに言及するのが一般的である。

「お世話になる」

【用例 37】

兄：あ、もしもし。あっ、ええー、誠君ですよ。あ、どうもどうも、私理沙の兄をやっているものでして。ええ。ああ。いやいや。こちらこそ大変妹がお世話になっております。

(『流れ星』第1話)

【用例 38】

杉田：あ、あの時はお世話になって…

(『秘密』第6話)

【用例 39】

江川：毎朝新聞政治部の江川です。このたびの勇氣あるご決断、支持します。会見準備は極秘に進めておりますので、ご心配なく。

福島：お世話になります。

(『同窓会』第8話)

「お世話になる」のような表現は、実際に何かしてもらったり助けてもらったりしたときに用いられている。

また、実際に相手の世話などを受けていない場合でも用いられる。例えば、手紙を書く際に、冒頭でまず「いつもお世話になっております」と述べ、今まで気づかないところですでに何かをしてくれたのではないかと配慮し、前もって言うことで、その後の依頼等がスムーズにできるような意味もある。

「おかげ」

【用例 40】

橋本：その後、藻奈美さん、お加減いかがですか。

杉田：ええ、おかげさまで、もう少し様子を見て、調子がよければ退院ということになり
そうです。

橋本：そうですか。良かった。

(『秘密』 第 1 話)

【用例 41】

杉田：足のほうはもういいんですか。

梶川：おかげで、軽い捻挫ですみました。

杉田：そうですか。

(『秘密』 第 2 話)

以上の 2 つの用例では、相手から何の利益や恩恵も受けていないにもかかわらず（調子が良くなったことと軽い捻挫ですんだことは、実際に、相手と関係は存在していない）、相手の「おかげ」という形で、相手の気遣いと好意に対して感謝している。ここで、自分にとっての良いことと関係のない相手を、自分の良いことが相手によってもたらされてきたように言うことで、相手との距離をいっそう縮めるようとしている。この点について、手紙冒頭の「いつもお世話になっております」と同様で、しばしば相手から利益や恩恵を受けていなくても、用いられている。

「助かる」

【用例 42】

亮司：仕事は終わったの？

典子：うん、何やってんの？

亮司：小説のネタで、薬のこと、調べてるんだけど、結構ややこしいね。

典子：教えてあげるよ。薬のことなら

亮司：本当に？助かるよ。

(『白夜行』 第 9 話)

【用例 43】(佐伯ひかりが食べ物を持ってきて)

園田：ああー、助かった！朝から何も食べてなかったんだ。

(『大切なことはすべて君が教えてくれた』第4話)

【用例 44】(病院で)

大久保：そろそろ、俺は限界ですか？

医者：できれば入院をお勧めします。

大久保：入院すれば完治するわけじゃないんでしょ。

医者：そういう病気ですから。

大久保：下手すりゃそのまま……ってこともあり？

医者：その可能性が十分にあります。

大久保：助かります。いつもスパッとさせてくれて。

(『同窓会』第7話)

「助かった」「助かります」のような表現は、相手によってもたらされてきた利益や恩恵などを受けて、自分にとって良い結果を得たということを表明するものである。

「気持ち類」

【用例 45】

先輩：マリアちゃん、あれね俺も折ったのよ。

マリア：本当に？すごい効き目ありましたよ。

先輩：でしょう？これ、お土産。

岡田：これはね。千鶴からのお土産。美術の本。

マリア：これ、すっごく嬉しい。

(『流れ星』第8話)

この用例では、マリアは友達からプレゼントをもらった際に、自分の喜んでいる気持ちを率直に表している。自分の心中の気持ちを相手に表明することで、相手が自分に対して良いことをしてくれたと評価している。気持ちを表す表現は、「ありがとう」と言うより、

感謝の意を強く表明できる。相手がわざわざお金や手間をかけて、いいプレゼントを用意してくれた目的は自分を喜ばせることであるので、自分のうれしい気持ちを表明することが感謝表現として機能する。相手が送ってくれたプレゼントには自分が必ず気に入るとは限らないが、儀礼として何らかの感謝のことばを表明する必要がある。

中国語：

“多亏”

【用例 46】

王伟：我和我妈妈住在你们家的隔壁，那天多亏你帮她。

(私と母はお宅の隣に住んでいますが、先日あなたのおかげで母が大変助かりました。)

杜拉拉：那个人是你妈妈啊，不用谢不用谢。

(あの方はあなたのお母さんですか。どういたしまして。)

(《杜拉拉升职记》第3話)

“評価”

【用例 47】

余味妈妈：拿着。

(どうぞ。)

毛豆豆：这是什么呀？真好玩！给我的？

(これは何ですか。面白そう。くださるのですか。)

余味妈妈：这是妈妈的心意。

(これは私の気持ちだよ。)

毛豆豆：真好看！

(きれいですね。)

余味妈妈：玉镯，老货。

(玉の腕輪、骨董品なんだ。)

(《媳妇的美好时代》第5話)

【用例 48】（プレゼントを贈る場面）

向南：送给你。

（どうぞ、プレゼントします。）

杨晓芸：真漂亮。

（きれいですね。）

（《奋斗》第 5 話）

「真好看」、「真漂亮」のような表現は、自分が受け取った利益や物品などを高く評価することで、プレゼントを贈ってくれた相手に間接的に感謝の意を表す。典型的な感謝表現である「谢谢」などより、このような表現が話し手の内心の率直な考えを表すことができる。「谢谢」は相手のした行為に対する感謝であるのに対して、「評価」の表現は相手のした行為だけではなく、相手の行為によってもたらされた良い効果（プレゼントの受け手が嬉しくなること）をも表すことができる。プレゼントを贈る人にとっては、自分のした行為も、プレゼントも認められることを期待しているはずである。もちろん、プレゼントを受け取る際には、心から好意的に評価する場合もあるが、本心とは相反した好意的評価を下さざるを得ない場合もある。

3.2.3.2 マイナス指向表現

日本語：

「ご苦労様」「お疲れ様」

【用例 49】（病院で杉山を看病している奥さん、ノックの音がして）

奥さん：はい、（来る人に）ご苦労様です。

杉山の同僚：いやいやこのたびは……

（『同窓会』第 7 話）

【用例 50】

杉田：ああ、ごめんごめん 今日会議あるの知らなくて。

部下一：課長、引継きはもうできてますんで、大丈夫です。

部下二：課長が残してくれた資料で十分分かりますので。

部下一：本当に、長い間お疲れ様でした。あとは、僕が頑張りますんで。

【用例 51】

岡田の母：お疲れさま。

梨沙：なにが？

岡田の母：検査、一通り、終わったから。

梨沙：そういう、契約だからね。

(『流れ星』第3話)

「ご苦労様」「お疲れ様」は相手をねぎらう表現だと考えられる。「ご苦労様」は、相手の「苦労」、相手による労力を認定する表現である。したがって、目上の人に言うのは不適切である。「お疲れ様」は「労力」ではなく、相手の「疲れ」に焦点を当てて、自分のために相手が「疲れ」の状態になったように表現することで、相手に感謝を表明する。

「迷惑をかける」

【用例 52】

橋本：あ、担当の橋本です。

杉田：ああ、どうも

橋本：先日は、ご迷惑をおかけしまして、本当に申し訳ありませんでした。

(『秘密』第7話)

中国語：

“麻烦”

【用例 53】

同事：走吧，我送你回去。

(じゃ、行きましょう。お見送りします。)

黛西：麻烦你了。

(お手数をおかけします。)

(《杜拉拉升职记》第4話)

この種類の表現は、話し手が迷惑を相手にかけたという事実を表明し、相手にもたらした不利益を認識していることを相手に伝え、残念な気持ちを表すものである。このような表現は、日本語の「ご迷惑をおかけしました」と同様、相手にかけた負担に言及し、謝罪の気持ちも含んでいる。

“辛苦”

【用例 54】

行政部主管玫瑰：麦琪那里有供应商的目录，你可以去找她要，

(麦琪のところには供給商のディレクターがあって、あなたは彼女からも
らえる)

杜拉拉：那我先把这个改完发给你，然后就去找

(では、まずこれを修正して送ります。それから探しに行きます。)

行政部主管玫瑰：嗯，辛苦你了。

(うん、お疲れさま。)

“問責”

【用例 55】

何文远：刘师傅，我，我没来晚吧。

(刘师傅、私、遅れていないよね。)

刘洪昌：没有没有。

(遅れていないよ。)

何文远：你来就来吧，还花钱干什么啊？

(来てくれるだけで良かったのに、なんでお金を使っちゃったの。)

(《家常菜》第6話)

“干什么啊”（「何をするのか」）のニュアンスは、基本的に「一体何をしたいのか」という意味であり、相手に対して問責をしているように捉えられやすい。しかし、上述の場面では相手の行為の目的を聞いているのではなく、自分のせいで相手に負担をかけた（お金をつかわせた）ことに恐縮の気持ちを表し、「お金をつかってくれなくてよかったのに」という意味に捉えるのが適切である。

また、この種類の表現は、目上の人が目下の人に対して用いるケースが多く、相手がお金をつかってくれたことに配慮する言葉である。

“破費”

【用例 56】

毛豆豆：叔叔，阿姨，这是我爸妈特地给你们买的咖啡机。

（おじさん、おばさん、これは父と母が特にお二人のために買ったコーヒーメーカーです。お二人はコーヒーが大好きだと伺ったものですから。）

姚静：真是太破费了，你们。

（また、みなさんに散財させてしまいました。）

（《媳妇的美好时代》第 5 話）

この種の表現が、主に金銭を中心にして、相手がお金をつかってくれたという事実を述べ、話し手の恐縮の気持ちを表明する。

3.2.4 混在型表現

3.2.4.1 「謝罪型+感謝型」

日本語の用例：

【用例 57】（観光客が藻奈美に写真を撮ってくれるよう頼んだ場面）

藻奈美：撮りますよ。

観光客：あつ、すみません。ありがとうございます。

藻奈美：はい、チーズ！

（『秘密』第 6 話）

【用例 58】（柏木先生がものを落として、学生がそれを拾ってくれた場面）

柏木先生：あ、ごめん、ごめん、ありがとう。

（『大切なことはすべてあなたが教えてくれた』第 7 話）

中国語の用例：

【用例 59】（清掃員が杜拉拉(人名)に道を空けてもらう場面）

清掃員：小姐，麻烦你，请让一下好吗？

（お姉さん、悪いんですが、ちょっと通してくれませんか？）

杜拉拉：好的好的。

（はい。）

清掃員：不好意思啊。好了，谢谢啊。

（すみません。どうも、ありがとうございます。）

（《杜拉拉升职记》 第 7 話）

【用例 60】（ラーメン店で余味(人名)が毛豆豆(人名)に席を取ってもらう場面）

余味：那您替我看位子～～，真是不好意思，谢谢啊！

（席を取ってくれて～～、本当にすみません。ありがとうございます。）

（《媳妇的美好时代》 第 1 話）

【用例 57】と【用例 59】はどちらも相手になにか依頼した際の会話であり、【用例 58】と【用例 60】は、他人に何かをしてもらった際の発話である。【用例 57】と【用例 59】のように、自分の目的を達成するために相手に依頼すれば、自分が利益を受けると同時に相手に不利益を与えることになる。また、【用例 58】と【用例 60】のように、依頼ではないが、他人の実際の行動によって自分が利益を受けている。これらの例では、利益の不均衡が生じている。利益の不均衡が生じた際に、この不均衡を補うために、適切な言葉を述べる必要とされ、【用例】58～60 は、いずれも「謝罪型表現」と「感謝型表現」の組み合わせの形式がとられている。

また、中国語の“不好意思”について言及しておかなければならない。【用例 59】と【用例 60】の中で、“不好意思”という表現が用いられているが、“不好意思”はもともと「恥ずかしい」や、「厚かましく～することはできない」という意味で捉えられてきたが、現在、日常のコミュニケーションで、謝罪表現として“不好意思”の使用が頻繁に行われてきており、謝罪表現の一つとなっている。また、森山(2003)は、“不好意思”という言葉は軽く感謝の気持ちを表すような場合にも使われ、居心地の悪さを言う点は日本語の「すみません」と似ていると指摘している。さらに筆者の内省の限りではあるが、“不好意思”

は現在中国で多く使用されているという印象がある。これについては、今後実際の使用実態を調査する必要があるが、ここでは“不好意思”が慣用的に謝罪表現として使用されている現状と森山(2003)の指摘を踏まえ、「謝罪型表現」と位置づけ考察を進めることとする。

3.2.4.2 「感謝型」+「その他」

日本語の用例

【用例 61】

梨沙の兄：(電話に出る)どうしたの？

看護婦：聞きたいことがあるんだけど。

梨沙の兄：何？

看護婦：ファクス、送った？

梨沙の兄：ああ、送ったよ。

看護婦：どうして？

梨沙の兄：梨沙のお兄ちゃんだから。

看護婦：え？

梨沙の兄：いろいろ教えてくれてありがとうね。今までお世話になりました。

(『流れ星』第7話)

【用例 62】

杉田さんは梶川さんを家まで送ってあげた。

梶川：本当にありがとうございました。助かりました。

杉田：いいえ。

梶川：中でお茶でも。

杉田：いいえ、ここで結構です。

梶川：ここまで来ていただいたのに、そんなわけには、今お茶を入れますから

杉田：本当に、失礼します。

梶川：どうぞ、一口だけでも。

(『秘密』第2話)

【用例 63】

真奈美：私がドナーになる。

岡田：え？

真奈美：(梨沙に)ありがとう。あなたのおかげで決心できた。

梨沙：良かったじゃん。

(『流れ星』第7話)

中国語の用例

【用例 64】

毛豆豆：那个，余先生。那个，不好意思啊。那个，谢谢您谢谢您，挺帮忙的。

(あのう、余さん。あのう、すみません。あのう、どうもありがとうございます。

助かりました。)

余味：不客气，不客气

(いいえ、いいえ)

(《媳妇的美好时代》第1話)

【用例 65】

余味：反正今天谢谢你，还陪我一块拍照片，我家里呢，就这么一情况，我妹妹现在精神上，

又并不是特别好，总之也谢谢你，你能陪我一块来医院，这就挺难得的了！

(とにかく今日はありがとう。一緒にいてくれて写真を撮って、私の家族は、こういう状況で、妹は精神的にあまり調子が良くなって、とにかくありがとう。病院まで付き添ってくれて、これはありがたかったよ。)

(《媳妇的美好时代》第2話)

3.2.4.3 「謝罪型+その他」

日本語の用例：

【用例 66】(贈り物の場面)

吉本：藻奈美ちゃん、これおばちゃんが作ったんだけど、食べて。お母さんいないで、大変でしょう、ご飯の支度。

藻奈美：どうもすみません。ご馳走様です。

中国語の用例：

【用例 67】(電話を使う際、友達に頼む場面)

建斌：文惠，电话在那儿呢。来。

(文惠、電話はそこにあるよ。どうぞ。)

何文惠：不好意思啊，建斌。给你添麻烦了。没事吧。

(悪いね、建斌。面倒かけちゃって。大丈夫?)

建斌：没事。

(大丈夫だよ。)

(《家常菜》第1話)

3.2.4.4 「感謝型+謝罪型+その他」

中国語の用例：

【用例 68】(取引先との相談)

杜拉拉：真的啊，太谢谢你了。真的不好意思啊，给你们添麻烦了。

(本当ですか。どうもありがとうございます。本当にすみません。ご迷惑をおかけしました。)

(《杜拉拉升职记》第5話)

【用例】66~68のように、「謝罪型」+「その他」/「感謝型」+「謝罪型」+「その他」の感謝表現は、「混在型」を形成している。話し手は利益を受けたと同時に、相手に負担をかけたことを考慮し、「その他」の表現を通して感謝の気持ちを補強することができる。基本的には「その他」の表現を使って事実を述べることで、感謝内容に具体性を与えていると考えられる。

感謝の気持ちであろうと、謝罪の気持ちであろうと、「その他」の表現を加えることで、自分の心情を補強することができる。先行研究と結びつけて考えると、やはり感謝場面における謝罪表現の使用は、日本語の典型的な配慮言語行動の一つであると言える。さらに、日中両言語における感謝場面の「混在型表現」の配慮言語行動は、日本語母語話者にも中国語母語話者にも、人間関係をよりよく保つための方策として使用されていることがわかる。

採取したデータから、中国語の「感謝型」と「謝罪型」を含む表現の用例から、中国語にお

いても、感謝の場合に「謝罪型表現」を使用して、相手のネガティブ・フェイスにも配慮することが明らかとなった。この点は日本語の混在型表現と同様である。感謝型表現であれ、謝罪型表現であれ、いずれも他人との関係を調整する機能を果たしている。感謝や謝罪のみでは感謝の意が不足していると感じる場合に「恩恵」をもらう側が「混在型表現」で謝意をいっそう強調するのである。

しかしながら、謝意を強調する戦略として、「混在型表現」を使用している、日中では着眼点が異なっている。日本語では、【用例 57】と【用例 58】のように、「謝罪型表現」と「感謝型表現」が同時に用いられる場合で、謝罪がまず重要となり、その次に感謝の表出が為されている。それに対して、中国語でも、【用例 59】と【用例 68】のように、「謝罪型表現」と「感謝型表現」が同時に用いられているが、どちらかを優先させなければならぬという意識はあまりない。中国語と比べ、日本語のほうがよりネガティブ・ポライトネスを重要視していると言えるだろう。また、日本語のほうは他人から恩恵を受けの際に、自然と他人のネガティブ・フェイスに配慮し、「感謝型表現」より「謝罪型表現」の選択をするようになる。それに対して、中国語では他人のネガティブ・フェイスに配慮する気持ちもあるが、日本ほどは強くない。

3.2.5 データの統計

採取したすべての表現を「感謝型表現」、「謝罪型表現」、「その他の表現」、「混在型表現」に分けて、それらの出現回数を調べ、それが全体の中でどれくらいの割合を占めるか、表 3 に示す。

表 3 各表現の出現回数と割合

	日本語			中国語		
	表現	回数	割合	表現	回数	割合
感謝 型表 現	ありがとう類	106	55.8%	谢谢	76	41.8%
	感謝します	7	3.7%	谢谢你	39	21.4%
	サンキュー	7	3.7%	谢谢您	6	3.3%
	どうも	5	2.6%	“谢谢”の繰返し	24	13.2%
	おおきに	2	1.0%	谢了	3	1.6%
				感谢	5	2.7%
	小計	127	66.8%	小計	153	84.1%

謝罪 型表 現	すみません	6	3.1%		
	悪い	3	1.5%		
	ごめん	1	0.5%		
	小計	10	5.3%	小計	0 0.0%
その 他の 表現	プ ご馳走様	9	5.8%	プ 多亏	3 1.6%
	ラ お世話になる	8	4.2%	ラ 評価・気持ち	3 1.6%
	ス お陰で	7	3.7%	ス	
	指 助かる	7	3.7%	指	
	向 気持ち類	5	2.6%	向	
	類			類	
	マ ご苦労様・お疲れ	5	2.6%	マ 麻烦	6 3.3%
	イ 様			イ 辛苦	2 1.1%
	ナ 迷惑をかける	1	0.5%	ナ 問責	2 1.1%
	ス			ス 破費	1 0.5%
指 向 類			指 向 類		
小計	42	22.1%	小計	17 9.3%	
混在 型表 現	感謝型+その他	8	4.2%	感謝型+その他	6 3.3%
	謝罪型+感謝型	2	1.0%	謝罪型+感謝型	3 1.6%
	謝罪型+その他	1	0.5%	感謝型+謝罪型+その 他	2 1.1%
				謝罪型+その他	1 0.5%
小計	11	5.8%	小計	12 6.6%	
合計	190		合計	182	

表 3 から分かるように、日中両言語のデータの中では、いずれも「感謝型表現」が最も多く、日本語は 66.8%、中国語は 84.1%を占めている。「謝罪型表現」に関しては、日本語は 5.3%であるのに対して、中国語の「謝罪型表現」は皆無である。「その他の表現」はそれぞれ

れ日本語が 22.1%と中国語が 9.3%である。「混在型表現」はそれぞれ 5.8%と 6.6%であり、日本語にも中国語にも存在している。

上の集計データから、以下の 3 点が見てとれる。

- ①「感謝型表現」について、日本語よりも中国語のほうが使用率は高い。
- ②「謝罪型表現」は中国語にはない。
- ③「その他の表現」については、日本語のほうが使用率は高いが、定型表現の使用も目立つ。

従って、日中における「感謝場面での謝罪表現」について、以下の点が指摘できる。

- I 日本語と異なり、中国語では、感謝場面において謝罪型表現が単独で使用されない。
- II 中国語でも日本語と同じく謝罪型表現を含む混在型の表現が同程度見られる。

上述した日中における感謝の言語行動の特徴、特に感謝場面で単独の謝罪表現の使用について、次章で感謝の言語行動に関する枠組みを提案して考察する。その前に、感謝表現に見られる「感謝の程度」、「丁寧度」、「応答」について触れておきたい。

3.2.6 感謝の言語行動の側面

本研究では、テレビドラマのセリフからデータを収集する際に、感謝表現そのもののみではなく、感謝表現に付随している修飾の言葉と感謝への応答表現も収集した。これらの側面から、ある程度感謝の言語行動全体の特徴を明らかにすることができる。これらの付随表現及び感謝への応答表現から、感謝の程度及び丁寧度の表示、感謝への応答などを観察する。

3.2.6.1 感謝の程度の表示

本節は、収集した感謝表現から感謝の程度の表示について考察する。日中両言語において、感謝の気持ちを表すために、どのようにその程度を増強するか、日本語と中国語の例をあげて分析する。

日本語：

【用例 69】（杉田が梶川を家まで送る場面）

梶川：本当にありがとうございました。助かりました。

杉田：いいえ。

（『秘密』第2話）

【用例 70】（梶川の家で、梶川と杉田が話している。梶川の娘が帰ってくる場面）

梶川の娘：こんにちは

杉田：やあ。

梶川：杉田さん、あなたにケーキを買ってきてくださったわよ。

梶川の娘：どうもありがとうございます。

（『秘密』第5話）

【用例 71】（水族館でアナウンサーの放送）

アナウンサー：本日は新江ノ島水族館へのご来場、誠にありがとうございました。当館は
まもなく閉館となります。

（『流れ星』第1話）

以上の用例の中で、「本当に」、「どうも」、「誠に」といった言葉で、話し手が誠心誠意の感謝を強調し、聞き手により強く感謝の気持ちを伝えている。

中国語：

中国語の用例でも、「太(とても)」「真是(本当に)」などの程度を表す副詞がしばしば見られる。

【用例 72】（余味と彼女のお父さんとの相談の場面）

余味：那个，叔叔我也跟您表个态，您跟阿姨就放心。我跟豆豆我们俩结婚之后，我一定好好照顾豆豆。

（あのう、私もお父さんに立場を示します。お父さん、お母さん、ご安心ください。

豆豆と結婚したあと、ちゃんと彼女の世話をします。）

(中略)

余味：那个，太谢谢叔叔阿姨了。太谢谢了。

(あの、お父さん、お母さん、どうもありがとうございます。本当にありがとうございます
いました。)

(《媳妇的美好时代》第5話)

【用例 73】(隣のおばさんが困っており、杜拉拉が手伝っている場面)

杜拉拉：我先帮你把火关了。

(とりあえず、ガスの火を消してしまいますね。)

(中略)

阿姨：真是谢谢你哦。

(本当にありがとうね)

杜拉拉：没事没事，谁碰到这个事都会帮忙的。

(いいえ、当然のことをしたまでです。)

(《杜拉拉升职记》第2話)

これらの用例から、“太”“真是”などの副詞が感謝の程度を補強すると見られる。話し手の誠心誠意を強調して感謝の気持ちを表明することになる。

また、中国語では、“谢谢”の繰り返しに感謝の気持ちを強くする役割があり、“谢谢”を繰り返すことによって、話し手の切なる感謝の気持ちを表すことができると考えられる。

3.2.6.2 丁寧度の表示

丁寧度の表現方法について、「ありがとう」には、「ありがとうございます」という形と、それを完了形にした「ありがとうございました」の形が、より丁寧な感謝表現として存在している。これについて、金田一(1987)は、通常、自分の感謝の気持ちが完了していると考えれば「ました」を使い、これからも続くと考えれば、「ます」を使うとし、「ます」と比べると、「ました」の方が丁寧な印象を受けることが多いと述べている。そして、「ます」が、丁寧であることを、「た」が、相手の好意が自分を益した、ということを実際として認めていると考えられ、「ます」は、その原行為がなされることについて、また感謝の気持ちがあることについて、断定、認定の度合いが低いことと関係があるように思われると分析

している。

日本語の「ます」「ました」で丁寧さを表すのに対して、中国語では“谢谢您”が“谢谢”や“谢谢你”よりさらに強く相手への敬意を表すことができる。共通語では“您”は“你”の敬称であり、“谢谢您”のように用いることで、相手に敬意を表すことができる。

また、終助詞の使用について、終助詞“啊”がついている“谢谢啊”と“谢谢你啊”の出現回数はそれぞれ 34 回と 12 回に達しているが、日本語の「ありがとうね」の出現回数はずか 10 回である。終助詞の使用について、中国語のほうは使用頻度が高い。終助詞を通じて、話し手の話しぶりが柔らかくなり、聞き手に受け入れてもらいやすい。日本語のほうは終助詞の使用はそれほど多くない。改まった表現で表すことが多いと見られる。

3.2.6.3 感謝への応答

どの社会においても、感謝場面で利益や恩恵の受け手は相手に感謝する。感謝すべき場面で、感謝の言語行動が欠けては良い人間関係は保てない。それに対して、感謝への応答をする義務感はそれほど大きくない。

森山(1999)は、感謝は聞き手からの利益の提供に伴う不均衡の修復であり、お礼への応答は関係修復の受け入れを表し、これにより不均衡が表面的には解消されると述べている。例として、否定的な「どういたしまして」「いいえ」、相互的な「こちらこそ」、問題がないと示す「いいですよ」「大丈夫です」などを挙げている。

また、お礼への応答をする必要がない場合にも言及し、店での買い物に対する「ありがとうございました」、祝福への感謝などに対して「いえいえ」といった応答はしないのが普通である。その理由は、顧客に対する感謝や祝福への感謝は、厳密には利害の不均衡とはいにくいものだからである。祝福へのお礼の返事などは、本来的な不均衡の発生ではなく、一種の謙讓的用法としてのお礼である。実際、こうした感謝は、別の形式や表現で代用できる場合がある。そのために、これを否定する必要もないので、否定的応答はなされない。これに対しては、応答が省略されたり「毎度ありがとうございます→どうも」といった曖昧な挨拶がなされたりするのが普通であると分析している。

金田一(1987)は、「どういたしまして」とか、「いいえ、こちらこそ」といった、受け答えのあいさつに言及している。この受け答えのあいさつは、補償の力が強すぎた場合に、不均衡が逆転してしまった時の補償を行う。相手のあいさつが丁寧すぎる(力が強すぎる)と思われた時、また情状酌量の余地が十分あると思われた時など、こうした受け答えのあい

さつによって原行為の重さが修正されたり、均衡が回復したことが認められたりする。また、デパートで「ありがとうございました」と言われて、「どういたしまして」と答えるのは外国人であって、役割行為の中でのあいさつは受け答えされないのが普通であると述べている。

三宅（2011）は感謝への応答を四種類にまとめている。

a 「ありがたい気持ち」に「借り」が含まれない場合

A の言葉に対し、B は感謝表現を使って感謝する。A はそれに応答する必要がない。

A : ご結婚、おめでとうございます。

B : あ、ありがとうございます。

A : (応答なし)

b 「ありがたい気持ち」に「借り」が含まれる場合

A の言葉に対し、B は感謝表現とともに謝罪表現を使って「借り」の気持ちがあることを認める表現をしたり、表現をしないまでも心の中で認識したりする。この場合、A は B に応答する必要がある。

A : これ、ちょっと田舎のお土産なんですけど…

B : あ、どうもいつもすみません。ありがとうございます。

A : いいえ、お口に合うかわかりませんが

c 「残念な気持ち」に「借り」が含まれる場合

A の言葉に対し、B は謝罪表現とともに「借り」の気持ちがあることを認める表現をしたり、表現をしないまでも心の中で認識したりする。この場合、A は B に応答する必要がある。

A : これ、家の郵便受けに入っていましたんで… (と手渡す)

B : あ、どうもすみませんでした。ご迷惑をおかけしました。

A : いいえ、気にしないでください。

d 「残念な気持ち」に「借り」が含まれない場合

「同情」に近い A の言葉に対し、B は感謝表現を使って感謝する。A はそれに応答する必要がない。

A : このたびはご愁傷様でございます。

B：ありがとうございます。

A：(応答なし)

三宅（2011）の分析から、感謝への応答が成立するための条件が存在することが指摘できる。つまり、「借り」の感覚を含む場合は、「感謝」であっても「謝罪」であっても、応答する必要があるのである。本研究では「借り」という要素で収集したデータを分析するのが困難なため、以下では応答表現に対応する感謝表現、話し手と聞き手との社会距離から「感謝への応答」の特徴を考察する。

まず、本研究のデータで使用されている応答表現を、以下の表のように、それぞれの使用数をまとめる。次に、応答表現の原表現は何か、即ち、どのような感謝表現に対して、応答表現が使用されているのを考察していく。

	感謝への応答表現	使用回数	原表現
日本語 8例	いいえ	5	「ありがとう」類：7例 (感謝型表現) 「ごちそうさまでした」：1例 (その他の表現)
	いや(いや)	2	
	何がちそうさまよ	1	
中国語 27例	不(用)客气	11	“谢谢”類：26例 (感謝型表現) “这老让你拿东西多不好意思 啊”：1例 (その他の表現)
	别客气	3	
	你还跟我客气什么啊	1	
	谢(我)什么呀?	2	
	不(用)谢	6	
	没事(没事)	2	
	没什么	1	
我得谢谢你送我毛巾呢!	1		

感謝表現のデータの中で、日本語の場面数は166であり、中国語の場面数は161である。それぞれ対応する「感謝への応答」の割合は、日本語の「感謝への応答」率は4.8%であり、中国語の応答率は16.8%に達している。この二つの数値から見ると、日本語においても中

国語においても、感謝場面での感謝表現に対して、何らかの応答をする言語現象が存在しているものの、感謝表現全体を占めている割合はそれほど高くない。特に、日本語の応答率はさらに低く、両言語の「感謝への応答率」には大きな差が存在している。つまり、中国語では感謝に対する何らかの応答が、ある程度重要視されているのに対し、日本語の場合はそれほど重要視されていないのである。

「感謝への応答」は、すべての感謝場面で行われるわけではない。以上のデータから、典型的な感謝表現、即ち、本研究で定義している感謝型表現、「ありがとう」類（日本語）と「谢谢」類（中国語）などの感謝表現に対して応答する傾向が強い。

次に、話し手と聞き手との社会距離から、感謝への応答表現が「遠」と「近」の関係で、どれくらい使用されているのかを考察することで、感謝への応答表現の特徴をより明確に記述したい。

日本語と中国語の用例に対し、話し手と聞き手との社会関係を「遠」と「近」に分け、以下の表にまとめる。

	感謝への応答表現	使用回数	話し手と聞き手との社会距離
日本語 8例	いいえ	5	遠
	いや (いや)	2	遠
	何がごちそうさまよ	1	近
中国語 27例	不(用)客气	11	遠
	别客气	3	遠
	你还跟我客气什么啊	1	近
	谢(我)什么呀?	2	近
	不(用)谢	6	遠
	没事(没事)	2	遠
	没什么	1	遠
	我得谢谢你送我毛巾呢!	1	遠

上の表から、もう一つの「感謝への応答」の特徴が見られる。応答表現が使用される場で、話し手と聞き手との関係は「遠」の用例が圧倒的に多い。この点から、感謝への応

答表現が話し手と聞き手との社会距離が遠い場面で使用される傾向があると言えよう。

まとめると、以下の二点が指摘できる。

- ①感謝への応答表現は基本的に「感謝型表現」に対して使用されること。
- ②感謝への応答表現は基本的に話し手と聞き手との社会距離が遠いほどに使用されやすいこと。

第四章 「感謝の言語行動」に関する枠組みの提案

第三章の研究データから、日本語では謝罪型表現、即ち、単独の謝罪表現「すみません」が使用されているのに対して、中国語ではそのような使用例はないものの、混在型表現として他表現と共用されていることが明らかとなった。この相違点と類似点がなぜ観察されるのか、また、そもそも、話者はどのような認識をもって感謝の言語行動に至るのかを明らかにするためには、感謝場面や謝罪場面がどのような特性を持つかを再考察する必要がある。本章では、感謝場面と謝罪場面の成立条件などを捉えるための枠組みについて一つの提案を行う。

4.1 感謝場面が成立するための条件

感謝場面はどのような状況で成立するのだろうか。どのような条件が整った場合に感謝場面となり、どのような条件が整った場合に謝罪場面となるのだろうか。

どのような言語においても、恩恵や利益を受けた際に、恩恵や利益の提供者である相手に感謝し、逆に相手に損失や不利益をもたらした際に、相手に謝罪するのが通例であろう。日本語記述文法研究会(2009)では、感謝と謝罪は調整系の対人行動と位置づけられている。即ち、話し手は聞き手によって利益をもたらされたり、逆に聞き手に対して負担を与えたりした場合、そこに生じた心理的な齟齬や対人関係上の不均衡を調整するために、感謝や謝罪といった調整系の対人行動を行うと述べられている。また、西原(1994)は、①話し手にとって良いことか、②聞き手にとって悪いことか、③状況は聞き手に起因するか、④状況は話し手に起因するかという四つの条件を挙げ、①③と②④それぞれの組合せが成立すれば、話し手の感謝表現と陳謝表現が誘発されることになる」と主張している。従って、感謝や謝罪の場面における言語行動を考察するには、少なくとも、以下の要素を設定する必要がある。

- (A) 参加者：話し手および聞き手
- (B) 起因となった行為の実行者：話し手が聞き手か（ないし、いずれかの関係者）
- (C) 当該の行為によってもたらされたのは、利益か不利益か

ここで言う「利益」とは利益上の取得など非抽象的、抽象的なものも含む良いことを指

す。また、「不利益」とは、利益上の損失、心理上の損失など非抽象的、抽象的なものも含む良くないことを指す。これらの要素を組み合わせることで、感謝や謝罪の基本的な場面を特徴付けすることができる。

本論文では、これらの要素によって場面を容易に把握できるように以下のような記号を導入して図式化する。

(a) 話し手=S、聞き手=H

(b) 実行者：話し手（ないしその関係者）= \boxed{S} 、聞き手（ないしその関係者）= \boxed{H}

(c) 利益=+、不利益=-

たとえば、話し手が利益を得た行為で聞き手に不利益をもたらした場面は、以下のように表示される。

(1) \boxed{S} (+), H (-)

この図式は、話し手自身ではなく、話し手の関係者、例えば、話し手の家族の行為によって聞き手に不利益を与えた際に、話し手のほうから聞き手にたいして言語行動を起こす場面も含む。聞き手についても、同様である。

これまでの研究、特に利益の提供の不均衡の理論では、感謝は聞き手からの利益の提供に伴う不均衡の修復であり、謝罪とは聞き手へ損害を与えたことによる不均衡の修復であり、両者は対人関係の修復としての観点に焦点が当てられることが多い。しかし、実際の会話では、聞き手の悪い状況のみではなく、聞き手の良い状況も考慮する必要がある。また、相手の不利益（・負担）と自分の利益は必ずしも一致するわけではない、すなわち、話し手と聞き手の利益・不利益は常に相反するわけではない。話し手が行った行為が結果的に聞き手だけでなく自身にも不利益をもたらす場合もあり、参与者における+と-の分布は、いつも逆になっているわけではなく、双方とも+、または、-になることもある。従って、(a)~(c)の要素を組み合わせると以下のような8つの場面が想定できる。

① S (+), \boxed{H} (+)

② S (+), \boxed{H} (-)

- ③ S (－), H (+)
- ④ S (－), H (－)
- ⑤ S (+), H (+)
- ⑥ S (+), H (－)
- ⑦ S (－), H (－)
- ⑧ S (－), H (+)

①～④が、聞き手の行為によって生じた場面で、⑤～⑧が話し手の行為によって生じた状況を表している。

①は、聞き手の行為によって、聞き手および話し手双方に利益がもたらされた場面である。この場合、聞き手が自身のためにある行為を行い、それに付随してたまたま話者にも利益がもたらされたとしたら、話者は、何の言語行動も起こさないかもしれないが、聞き手の行為によって自分に利益が生じたことを意識すれば、感謝の言語行動を起こすこともある。

②では、聞き手の行為によって、聞き手自身には不利益が生じているが、その結果、話し手が利益を得ている。聞き手が当該の行為を話者のために行ったのであれば、典型的な感謝の言語行動の場面になる。

③は、聞き手の利益行為によって、話者に不利益が生じた場合である。話し手は、聞き手が自身の利益を侵害したことに何らかの不満の気持ちがあり、不満やもっと強い不満を表す非難の言語表現、2.3.2で述べた「マイナスの感情表現」を行うだろう。④も、聞き手も損をしたとはいえ、話し手に不利益がもたらされたわけであるから、非難や不満などの言語行動が観察されるかもしれない。

⑤は、話し手自身の行為によって自身と聞き手に利益が生じた状況を示している。その行為がどのような意図で行われたか、例えば、聞き手とは関係なく、話し手自身を利するために行ったのか、聞き手のために行った行為がたまたま話し手の利益になったのかによって、言語行動が異なる可能性がある（これは、実は、他の状況でも同様である）。この状況では、例えば、話し手は、聞き手の利益が自分のおかげであることに触れ、その恩を忘れないように伝えることもあるだろう。あるいは、自分の能力や功績などを自慢するかもしれない。日本語であれば、「～してあげる」を使うような場面である。⑧の場面では、話し手の行為によって不利益になったため、いわば自業自得の状況にあり、自分の能力や

感謝の言語行動を引き起こす状況に目を向けると、以下の点が共通していることが見て取れる。

(3) <感謝状況の共通点> S (+), \boxed{H}

同様に、謝罪の言語行動を引き起こす2つの状況で共通しているのは、以下の要素である。

(4) <謝罪状況の共通点> \boxed{S} , H (-)

これらの共通点は、言い換えれば、所与の言語行動が起こる前提となるために最低限必要な要素、つまり、当該の場面成立の決定要素・条件になっていると言ってもよい。

では、これらの図式化された状況を背景にして、言語化に至る言語行動をどのように捉えることができるだろうか。

4.2 言語行動における全体的・固定的側面と個別的・流動的側面

感謝であれ、謝罪であれ、利益と不利益または恩恵と損失などの出来事を意識して、それを何らかの言葉で表現するという大前提がある。この点について、佐久間（1993）は、「AがBに感謝する」に対して、話し手であるAが「AがBから利益を受けた」と認識し、その認識にもとづいて、AがBに対して何らかの働きかけをしようとする気持ちを持つことが前提条件となると言っている。つまり、話し手が状況が先の(2) A、ないし、(3)に相当すると認識し、それを言語化して言語行動を実行するのである。

しかし、状況全体を一度に言語化することは通常はない。例えば、次のような状況を考えてみよう。

(5) S (+), \boxed{H} (-)

複数の異なる要素を備えた状況全体を「一言で」（単文で）言い表すのは容易ではない。つまり、話し手が利益を得たことと聞き手に負担を与えたという感情を同時に明確に表現するのは通常できないと思われる。例えば、話し手が誕生日に聞き手からプレゼン

トをもらい、言語行動として「ありがとう」と発言した場面を考えてみよう。この時、話し手は、上記の状況にあると認識しているが、「ありがとう」という言語行動は、「S (+)」という要素に関する自分の気持ちを言語化していると考えられる。この時、話し手は「H (-)」を認識していても、「ありがとう」という表現はそれを（含んで）伝達しているわけではない。なぜなら、もし、状況が「H (-)」でなく、「H (+)」であっても、やはり「ありがとう」と発言することが可能だからである。

話し手が自分の行為で利益を得たものの、それによって聞き手に負担を与えた場面で、聞き手が謝罪の言語行動を起こしたとしよう。話し手が聞き手に負担が生じたと認識するのは、先のプレゼントの場面と同じだが、起因となった行為の主が異なる。謝罪の場面において、それは話し手自身であるが、感謝の場面では、聞き手である。本論文の図式でも、以下のように両者を区別している。

(6) \boxed{S} (+) , H (-) [謝罪の場面]

この図式の場面では、話し手に利益、つまり「+」が生じても「ありがとう」という発言はなされない。なぜなら、問題の行為が聞き手側ではなく、話し手側に起因するからである。では、先ほどの「ありがとう」という表現には、聞き手の(±)は含まれていないが、 \boxed{H} 、つまり、聞き手による行為であるという情報が含まれていると考えるべきであろうか。確かに状況にその要素がなければ、感謝の言語行動は起こらないが、「ありがとう」という表現自体が、「話し手にプラスになった」とことと「聞き手が行為を行った」ことを同時に意味的に含んでいるわけではない。あくまで「ありがとう」が伝えるのは、前者の情報のみである。それ故、聞き手が行為を行ったという要素は、感謝の言語行動が起こるための前提条件であり、「ありがとう」という発言自体は、やはり、「S (+)」の要素のみを言語化したと考えるべきであろう。

このように、話し手はすべての要素に同時に注目し、それを一括して言語表現化するのではなく、状況の中にある一部の要素に注目して言語行動を行うことが通常だと考えられる。従って、言語行動の考察においては、前提となる状況把握のための全体的な視点だけでなく、言語化に際しての個別的な視点が不可欠であると言える。この個別的な側面を図式化するために、新しい記号を導入する。話し手が言語化する際に考慮しない（注目しない、言及しない）要素を { } で示すことにする。たとえば、「ありがとう」という発言

は、言語化に際し、話者が「 \boxed{H} (-)」の要素を考慮せず、「S (+)」に注目してそれを表現化したものであることを、以下の図式を用いて表す。

(7) S (+), $\{\boxed{H} (-)\}$

さらに、次のような言語行動を分析するためには、別の視点も必要となる。

(8)

【観光客が藻奈美に写真を撮ってもらうよう頼んだ場面】

藻奈美：撮りますよ。

観光客：あつ、すみません。ありがとうございます。

藻奈美：はい、チーズ！

(『秘密』第6話)

上記の場面では、「すみません」と「ありがとうございました」という2つの発言があるが、これは、謝罪場面と感謝場面という異なる2つの場面が連続して生起しているわけではない。観光客が藻奈美に写真を撮ってもらうという一つの行為に対し、感謝の言語行動を行っているのである。本論文の主張にそって言い換えれば、この場面における言語行動は、全体としては、同じ状況にあるが、個々の言語表現はその中の異なる要素に注目した結果であると解釈できる。岡本(2013)は、感謝する場合には、その際、自分の利益に注目するか、相手の負担に注目するか、このどちらに注目するかが、感謝と謝罪の分かれ道であると述べている。本来、謝罪場面で用いられる「すみません」は、聞き手の不利益に注目した表現であり、本論文の図式で示せば、

(9) $\{\boxed{S} (+)\}$, H (-) ※または、 $\{\boxed{S} (-)\}$, H (-)

となる。従って、上記の感謝の言語行動は、以下のように図式化することができる。

- (10) <状況全体> S (+), H (-)
「すみません」 {S (+)}, H (-)
「ありがとう」 S (+), {H (-)}

行為者がどちらであるか、すなわち、SかHかは、前提であり、正確には、言語表現の情報に含まれていないので、感謝場面での「すみません」も謝罪場面での「すみません」も同じ「H (-)」という(部分)要素に注目して言語化したものである。本論文では、「すみません」が感謝の場面で用いられるのは、日本語では「ありがとう」の意味も有するためだと考えるのではなく、感謝と謝罪の場面には共通する要素、具体的には、「H (-)」が含まれており、それを言語化したからだと簡潔に説明することができる。また、第三章で観察したように、中国語において謝罪表現が感謝の言語行動で使用される事実も同様に説明することができる(詳細は、4.4節で考察する)。

ここで重要なのは、同一の感謝場面で、2つの異なる表現が用いられているという事実である。それは、話者が「すみません」と述べた時と「ありがとう」と述べた時で、注目している要素が異なっていることを意味する。熊取谷(1990)は、感謝場面での「すみません」の使用は「感謝の表現交替現象」であり、「ありがとう」との「状況転換」が丁寧行動の方策として機能していると分析している。また、岡本(2013)が指摘している「感謝と謝罪の分かれ道」は、あくまでも感謝表現と謝罪表現の分かれ道を指しているだろう。言い換えれば、感謝表現と謝罪表現と、どちらを選択しても、「話し手が利益を受けることと、聞き手による行為」という感謝場面の本質は変わらない。

本論文では、ある言語行動の背景にある状況の全体的特性には変化はないが、その状況を構成する個々の要素のどれに注目するかは、同一の状況下でも変化し得るという提案をおこなう。すなわち、言語行動において、状況全体は固定的であるが、その中での言語化は、個別的であり、かつ、流動的であると捉える必要があるということである。先の写真を撮ってもらった場面では、「S (+), H (-)」という状況において、話し手は、まず、「H (-)」に注目し、それを「すみません」で表現した後、その注目の先を「S (+)」に移し、それを言語化して「ありがとう」と発言しているのである。

このように、言語行動には、全体的側面と個別的側面とともに、固定的側面と流動的側面があり、それらを考慮することによって、感謝の場面において謝罪表現が用いられることや、感謝表現と謝罪表現が混在することを適切に説明することができるようになる。

4.3 感謝の言語行動に関わる要素と言語表現

日本語でも中国語でも感謝の言語行動としてなぜ謝罪表現が使われることがあるのかについて、その背景に言語行動の個別的・流動的側面があると主張したが、第三章で明らかになったように、当該表現の使用に関して、両言語には顕著な相違点が見られた。それは、日本語では「すみません」のみで完結する感謝の言語行動が存在するのに対して、中国語では、そのような言語行動が見当たらないという点である。この相違点をもたらす原因については、次節で詳しく考察するが、その前に、第三章で収集した個々の言語表現が、感謝の状況を構成する要素のどれに注目しているかを確認しておこう。

まず、感謝の言語行動を引き起こす状況は、以下のような要素から成り立っていることは、既に述べたとおりである。

(11) S (+), \boxed{H} (+) または S (+), \boxed{H} (-)

また、この図式は、様々な現実を単純化したものであり、上記の状況が常に感謝の言語行動を引き起こすわけではないことも留意しておく必要がある。例えば、聞き手が自分自身のためにある行為を行ったものの、上手く行かず、自身に不利益が生じたが、同時にその行為によって話し手がたまたま利益を得た場合は、「S (+), \boxed{H} (-)」という図式で示すことができる。しかし、通常、この場合に話し手は聞き手に対して感謝の言語行動を起こすことはないだろう。感謝の言語行動が起こるためには、聞き手の行為が話し手のために行われたものである（と話し手が認識する）必要がある。（ただし、上の「棚から牡丹餅」のような状況で、話し手は皮肉を込めて「ありがとう」と“感謝の言語行動”を行うかもしれない。単純化されているがために、このような皮肉の感謝が起こることも予想できるという点では、有益な図式であるとも言えるだろう。）

個別的側面としては、基本的に、聞き手側の要素に注目するか、話し手側の要素に注目するかの2つに分けられる。

(12) a. S (+), $\{\boxed{H}\}$ (+) }
b. S (+), $\{\boxed{H}\}$ (-) }

- (13) a. {S (+)}, \boxed{H} (+)
 b. {S (+)}, \boxed{H} (-)

では、第三章でまとめた表現が、それぞれどの図式に相当するかを見ていこう。

4.3.1 S (+), \boxed{H} (+)

これは、聞き手の行為によって、話し手も聞き手も利益を得た場面で、話し手が自身の状態に注目し、それを言語化して表現するものである。例えば、第三章の【用例 1】や【用例 2】がこれに相当する。この用例では、客が店員に向かって、感謝型表現、つまり、「ありがとう（ございました）」を使っている。この状況では、中国語でも、同じように、客は感謝型表現が使う。

ちなみに、当該の用例では、店員も客に対して感謝型表現を使っているが、中国語では、応答表現である「不谢」が使われるだろう。

4.3.2 S (+), \boxed{H} (-)

これは、聞き手の行為によって、話し手が利益を得たが、聞き手には負担や不利益が生じた場面で、話し手が自身の状態に注目し、それを言語化して表現するものである。例えば、第三章の【用例 3】（日本語）や【用例 24】（中国語）など、多くの感謝の言語行動がこれに相当する。典型的には、日中とも感謝型表現が使われる。その他に、【用例 34】の「ごちそうさま」、【用例 38】の「お世話になって」、【用例 41】の「おかげで」、【用例 42】の「助かる（よ）」、【用例 45】の「嬉しい」（“気持ち”類）も含まれる。中国語では、【用例 46】の「多亏」（おかげで）や【用例 48】の「真漂亮」（きれいですね。）“評価”もこれを言語化したものである。

4.3.3 {S (+)}, \boxed{H} (+)

これは、聞き手の行為によって、話し手も聞き手も利益を得た場面で、話し手が聞き手の状態に注目し、それを言語化して表現するものであるが、収集したデータには、これに相当する用例は見当たらなかった。恐らく、感謝の言語行動において、このような要素に注目して言語化することが一般的でないためと思われる。

4.3.4 {S (+)}, [H] (-)

これは、聞き手の行為によって、話し手が利益を得たが、聞き手には負担や不利益が生じた場面で、話し手が聞き手のマイナスの状態に注目し、それを言語化して表現するものである。典型的な感謝の言語行動の一つであり、【用例 39】のような「すみません」をはじめとした、聞き手の負担に配慮した様々な表現がこれに相当する。中国語の【用例 53】の「麻烦 (你了)」(ご迷惑/お手数をおかけします)や日本語の【用例 49】の「ご苦労様です」も含まれる。また、中国語の【用例 56】の「真是太破费了」(浪費させてしまいました) (「破费」)もこれに相当する。さらに、【用例 55】の「还花钱干什么啊」(どうしてお金を使っちゃうの?)は、非難表現と同等の言い回しであるが、このような“問責”は中国語の感謝の言語行動としてよく用いられる。これも、聞き手が自身で不利益を招いたということで、「[H] (-)」に注視した表現だと考えられる。

第三章でまとめたデータを本論提案の図式と結びつけ表すと、次のようになる。

	日本語		中国語	
感謝型	ありがとう類 感謝します サンキュー どうも おおきに	S (+), { [H] (+) } S (+), { [H] (-) }	谢谢 谢谢你 谢谢您 “谢谢”の繰返し 谢了 感谢	S (+), { [H] (+) } S (+), { [H] (-) }
謝罪型	すみません 悪い ごめん	{ S (+) }, [H] (-)		
その他	ご馳走様 お世話になる お陰で 助かる 気持ち類 ご苦労様/お疲れ様	S (+), { [H] (+) } S (+), { [H] (-) } { S (+) }, [H] (-)	多亏 評価/気持ち 麻烦	S (+), { [H] (+) } S (+), { [H] (-) } { S (+) }, [H] (-)

	迷惑類		辛苦 問責 破費	
--	-----	--	----------------	--

4.4 謝罪型表現に関する日中の類似点および相違点

第三章では、日本語と中国語における類似点と相違点として以下が明らかとなった。

- I 日本語と異なり、中国語では、感謝場面において謝罪型表現が単独で使用されることがない。
- II 中国語でも日本語と同じく謝罪型表現を含む混在型の表現が同程度見られる。

日本語の「すみません」という謝罪表現が感謝の場面で用いられることについて、従来の研究でもくり返し指摘され、また、研究の焦点ともなってきた。Iにあるように、中国語でも、感謝場面で謝罪表現が単独で使われないという事実から、日本語が「すみません」だけで感謝の言語行動を完結させることがあるのは、従来の見解どおり“特別”と言えよう。しかし、そのことが強調されるあまり、IIで指摘したように、単独ではないものの、中国語でも感謝の言語行動の中で謝罪表現が用いられるという事実を矮小化してはならず、また、感謝の言語行動について提案された分析はそれを解明できなければならない。

まず、両言語の類似点であるIIについては、4.2でも触れたが、言語行動の個別側面を考慮する必要があるという本論文の主張によって容易に説明することができる。まず、言うまでもないが、謝辞表現は謝罪の言語行動で典型的に用いられる。謝罪の場面は、以下のように図式化できる。

(14) $\boxed{S} (+)$, H (-) ないし $\boxed{S} (-)$, H (-)

そして、日本語の「すみません」や中国語の「不好意思」は、話し手の利益・不利益ではなく、聞き手の不利益に言及した表現であるため、図式化すれば、以下のようなになる。

(15) $\{\boxed{S} (+)\}$, H (-) ないし $\{\boxed{S} (-)\}$, H (-)

{ } の部分は、言語化に際し、注目しない要素を表しているので、結局、「すみません」や「不好意思」に含まれる言語情報は、単純化して言えば、「H (-)」に関するものである。では、次に、当該の表現が使われている感謝の場面を見てみよう。

【用例 57】(観光客が藻奈美に写真を撮ってもらうよう頼んだ場面)

藻奈美：撮りますよ。

観光客：あっ、すみません。ありがとうございます。

藻奈美：はい、チーズ！

(『秘密』第6話)

【用例 59】(清掃員が杜拉拉(人名)に道を空けてもらう場面)

清掃員：小姐，麻烦你，请让一下好吗？(お姉さん、悪いんですが、ちょっと通してくれませんか?)

杜拉拉：好的好的。

(はい、はい。)

清掃員：不好意思啊。好了，谢谢啊。

(すみません。どうも、ありがとうございます。)

(《杜拉拉升职记》第7話)

【用例 57】と【用例 59】の状況は、いずれも「S (+), H (-)」と図式化できる。そして、4.1でも述べたように、言語行動には、個別的・流動的側面があるため、まず、「H (-)」の要素のみに注目して言語化したものが、「すみません／不好意思」であり、その後、注視する要素を「S (+)」に移し、言語化したものが「ありがとう／谢谢」であると考えることができる。

(16) S (+), H (-) <状況全体>

{ S (+) }, H (-) → 「すみません／不好意思」

S (+), { H (-) } → 「ありがとう／谢谢」

つまり、感謝の場面で日本語でも中国語でも、「すみません／不好意思」という謝罪表現を用いることができるのは、本論文が主張するように、感謝の状況には「H（－）」が含まれており、言語行動は、個別的・流動的に一部の要素を注視し、言語化するからである。

（行為者が話し手と聞き手のどちらであるかという情報は、通常、言語表現には含まれず、単なる前提であることは、すでに指摘した通りである。従って、記号上、□の表記は残しているが、「すみません／不好意思」には、Hであるか、Hであるかという情報は含まれていない。）

そのため、話し手が「S（＋），H（－）」ではなく、「S（＋），H（＋）」であると認識する状況では、謝罪表現は使われない。例えば、以下の場面を考えてみよう。

【用例2】（イカ焼きを買う場面）

従業員：はい、お待たせ、300円ね。

笹垣：はい、ありがとう。

従業員：はい、ありがとうございました。

（『白夜行』第1話）

この場面では、笹垣による感謝の言語行動は以下のような状況設定によるものである。

(17) S（＋），H（＋）

H：販売

S（＋）：イカ焼きの入手

H（＋）：代金の入手

従業員も感謝の言語行動を行っているが、お客の購買行為によって代金を得たという状況設定である。いずれの言語行動でも、「H（－）」という要素がないため、「すみません」という表現は使われない。

本論文が主張するように、言語行動に個別的側面があることによって、日本語でも中国語でも、感謝の場面で謝罪表現が使われることを容易に説明することができる。

一方で、両言語には、大きな相違点がある。すなわち、「I 日本語と異なり、中国語では、感謝場面において謝罪型表現が単独で使用されることがない」という点である。この違いはどこからくるのであろうか。それを解明するためには、【用例36】のように、混在型

であれば、中国語でも感謝場面で謝罪表現の使用が許されるのはなぜかということと合わせて考える必要がある。【用例 36】の状況は、以下のように図式化されるが、これは、話し手が捉えた（認識した）状況設定である。

(18) S (+) , \boxed{H} (-)

話し手が「 \boxed{H} (-)」の要素に注目して「不好意思」と発言し、続いて「S (+)」に注目して「谢谢」と発言した結果、聞き手は、この 2 つの発話を統合して、話し手が当該の状況を「S (+) , \boxed{H} (-)」、すなわち、感謝の場面と捉えていると理解する。

(19) < { S (+) } , \boxed{H} (-) > + < S (+) , { \boxed{H} (-) } >
↓
S (+) , \boxed{H} (-)

もし、話し手の言語行動が「谢谢」のみで終わった場合、聞き手には、話し手が「S (+)」に注視していることは伝わるが、当該の状況にあるかもしれない別の要素について、話し手がどのような状況設定を想定しているかは、分からない。同様に、話し手が「不好意思」のみで言語行動を終了させた場合、話し手が「H (-)」に注視して発言したことは聞き手に伝わるが、それ以外にどのような要素を話し手が認識しているかは、聞き手には特定できない。4.1 で指摘したように、感謝状況にとっては、「S (+)」が、そして、謝罪状況においては、「H (-)」が、その状況を成立させるための必須要素となっている。従って、「谢谢」だけの発言であっても、「S (+)」(とそれが前提とする \boxed{H})という感謝の状況を成立させる必須かつ最小限の条件が満たされており、適切な感謝の言語行動として認定される。しかし、「不好意思」だけで終了した場合、話し手が「H (-)」の存在を認識しているのは分かるが、「S (+)」という要素を想定しているどうかは不明である。従って、感謝の場면을成立させるために必須の要素を欠くために、「不好意思」だけでは、感謝の言語行動としては成立しないことになる。むしろ、それは、謝罪の言語行動であると認定されてしまい、現実の状況と矛盾し、奇異な発言となる。これが、中国語の感謝の言語行動において、単独の謝罪型表現が現れない理由であると考えられる。

その一方で、日本語では単独の謝罪型表現が感謝の言語行動として許される。言語行動

の背景にある状況設定や個々の言語表現がそのベースとする要素は、中国語と同じはずである。そうすると、「H (-)」のみに注目した日本語の「すみません」も、「S (+)」については言及しないため、そのみでは感謝の言語行動として成立しないはずである。ところが、中国語と同じ場面でも、日本語では、「すみません」だけで感謝の言語行動を完結させることが可能である。この相違点が何によってもたらされるかについて、本論文は具体的な提案ができるまでに至っていない（具体的な提案がむずかしい理由の一つを次節で述べる）。従来の研究でよく指摘されるように、聞き手に対する「配慮」（cf. 三宅 2011）や「聞き手至上主義」（cf. 西原 1994）など、聞き手を重視する社会・文化であることが背景にあるとすれば、例えば、中国語と異なり、日本語では、謝罪状況とは異なる感謝状況を言語表現によって明確にし、感謝の言語行動を適切に成立させることよりも、聞き手の不利益を話し手が重視し、配慮していることを伝えることを優先させているために、謝罪表現の単独使用が許されると理由づけられるだろう。本論文では、この真偽をこれ以上議論しないが、最後に、感謝の場面において、日本語の「すみません」は、単独使用が許されるのに対し、中国語の「不好意思」は許されないという事実をもって、それが、日本語と中国語、ないし、日本社会・文化と中国社会・文化の違いを反映しているというような主張が不適切であることを指摘しておきたい。

4.5 日本語と中国語における「その他」の表現について

第三章では、感謝の言語行動に使われる表現を大きく3種類、すなわち、感謝型、謝罪型、「その他」に分けた。感謝型と謝罪型は、それぞれの場面で典型的に使われる定型表現で、「その他」は、文字通り、それ以外の表現である。個々の表現がどの要素に注目したものであるかは、4.2で詳述した。

注目要素	日本語	中国語
S (+) {H (-)}	ご馳走様 お世話になる お陰で 助かる “気持ち”	多亏（お陰で） “評価/気持ち”

{S (+)}	ご苦労様/お疲れ様	麻烦 (迷惑をかける)
	迷惑をかける	辛苦 (ご苦労様)
[H] (-)		“問責”
		破费 (散財)

ここで「{S (+)}」, 「[H] (-)」に焦点を当てて考察してみよう。日本語の場合は、感謝の場面で「すみません」が(何らかの理由で)単独で使えるので、同じ要素に注目する「ご苦労様、お疲れ様」や「迷惑かけました」が単独で用いられても何ら不思議なことではない。同様に、中国語では、感謝の場面で「不好意思」が単独で使えないことから、「麻烦」、「辛苦」、「問責」、「破费」も単独では使えないと推論されるかもしれない。ところが、これらの表現は、「不好意思」と異なり、単独で感謝の言語行動を完結させることができる。その点は、日本語の「すみません」等と同じ振る舞いを見せる。

ただし、中国語の「{S (+)}」, 「[H] (-)」に注目した「その他」の表現のうち、「辛苦」、「問責」、「破费」は、純粹な謝罪の場面で用いられることはなく(その点では、日本語の「ご苦労様/お疲れ様」も同じ)、「すみません」や「不好意思」と同列に扱うべきではないだろう。問題は、中国語の「麻烦」である。次は、話し手の行為によって聞き手に不利益をもたらした場面、すなわち、謝罪の場面であり、「麻烦」が単独で用いられている。

【玫瑰は取引先の人を見送る場面】

玫瑰：情况大概就是这样了。

(状況はだいたいこのようです。)

客户：这次太麻烦你了。那我先走了。

(今回ご迷惑をおかけしました。先に失礼します。)

(《杜拉拉升职记》第7話)

一方、以下のように、感謝の場面でも、「麻烦」は単独で用いることができる。

【用例 53】

同事：走吧，我送你回去。

(じゃ、行きましょう。お見送りします。)

黛西：麻烦你了。

(お手数をおかけします。)

(《杜拉拉升职记》第4話)

このように、中国語の「麻烦」は、「不好意思」と同じように謝罪の場面で用いられるが、それとは異なり、感謝の場面で単独で使用することもできる。つまり、中国語の「麻烦」は、日本語の「すみません」や「迷惑をかけた」と同じ分布を示す。この事実はきわめて重要である。なぜなら、謝罪表現の「不好意思」が単独で感謝の言語行動を完結できない理由は、謝罪表現と考えられる「麻烦」には通用しないからである。

中国語の「不好意思」は、単独では感謝の言語行動を完結させることはできないが、「谢谢」とともに混在型で使えば、問題なかった。

【用例 59】(清掃員が杜拉拉(人名)に道を空けてもらう場面)

清掃員：小姐，麻烦你，请让一下好吗？(お姉さん、悪いんですが、ちょっと通して
くれませんか?)

杜拉拉：好的好的。

(はい、はい。)

清掃員：不好意思啊。好了，谢谢啊。

(すみません。どうも、ありがとうございます。)

(《杜拉拉升职记》第7話)

しかし、次の例で「不好意思」とともに混在型を形成しているのは、「麻烦」である。

【用例 67】(電話を使う際、友達に頼む場面)

建斌：文惠，电话在那儿呢。来。

(文惠、電話はそこにあるよ。どうぞ。)

何文恵：不好意思啊，建斌。给你添麻烦了。没事吧。

(悪いね、建斌。面倒かけちゃって。大丈夫?)

建斌：没事。

(大丈夫だよ。)

《家常菜》第1話)

これは、「麻烦」に「谢谢」と同じ“効果”があることを示している。

従って、日本語の「すみません」は単独で感謝の言語行動を成立させることができるが、中国語の「不好意思」はそれができないという違いを、日本語と中国語の違いに格上げして議論することは適切ではない。中国語にも、日本語の「すみません」や「迷惑をかけた」のような振る舞いする「麻烦」が存在するからである。同様に、日本語の謝罪表現が単独で感謝の場面に登場することが日本語のなんらの特殊性を反映していると主張するのであれば、中国語の「麻烦」の存在をもって中国語にも同様の特殊性があると主張することを完全に否定するのはむずかしいだろう。さらに言えば、日本語でも中国語でも謝罪表現が(単独で)感謝の状況で使われることがあることから、感謝の言語行動において謝罪表現が現れるのは元来特殊なことではないと仮定すると、今度は、制限のある中国語の「不好意思」が特殊だということにもなってしまう。

以上のことから、日本語の「すみません」の振る舞いを考察する際に、それを日本語自体の特殊性として捉えてしまわないように注意する必要がある。また、少なくとも、感謝の言語行動の日中対照研究を行う際には、日本語の謝罪表現の振る舞いのみが独特で、特殊であると考えべきではない。日本語全体、また、謝罪表現全体を一括して考えるのではなく、個々の表現自体を詳細に観察しながら、日本語と中国語における言語行動の類似点や相違点を考察していくことが不可欠である。このような立場で、本論文で提案した言語行動の枠組み・図式を精緻化し、日中の感謝の言語行動をさらに詳しく考察できるように改良するのが今後の課題である。

第五章 日本語と中国語における「再度の感謝」

日常の生活場面で、感謝の言葉は頻繁に用いられている。その中で、外国人泣かせの「再度の感謝」がよく話題とされている。日本人の友達と再会した時に「先日はどうも」「先日はありがとう」などと言われ、私は先日この人に何をしてあげたのか、何かしてあげたとしても、改めて感謝してもらう必要があるのかと考える外国人は多いだろう。

どの言語の話者にとっても、他人との間の消極的なことを提起するのを回避する「対人の配慮」があることに対して、積極的なことを提起しやすい。日本語では「再度の感謝」はこのような表現にあたっている。第二章で感謝の概念を定義したように、感謝は話し手（或は話し手側の人）が聞き手から何らかの利益や恩恵を受けた場合に、それを認識して何らかの働きかけをしようとする際に、話し手の気持ち（ありがたさ、恐縮さ、混在の気持ちなど）を述べることと、しばらく時間をおいて、再びそれに言及して恩を忘れないのを強調する話し手の気持ちを述べることである。「再度の感謝」は「事後」の感謝として感謝の研究では欠かせない。

第三章で考察した感謝は利益や恩恵を受けた直後、或は、しばらくおいて最初に行った感謝の言語行動である。それが従来の研究で扱われている感謝である。本章で扱う「再度の感謝」は最初の（通常は「その場」の）感謝表意からしばらく時間をおいて、再び感謝の意を伝える言語行動を指す。

「その場の感謝」も「再度の感謝」も本研究の枠組みの図式「S (+), \boxed{H} (+)」或は「S (+), \boxed{H} (-)」が適用できる。SはHによってもたらされたS (+) に注目し、Hに何らかの言語行動を行う。しかし、「その場の感謝」と「再度の感謝」とは異なり、時間の流れにつれて話し手の心境とその場のそれと異なる可能性があるのである。したがって、「再度の感謝」をするか否か、する場合にどのような条件に注目するかは、大きな影響を受ける。例えば、その場に残念な気持ちや謝罪の気持ちがあったが、時間をおいて、またそれを提起する際に、消極的な気持ちより積極的な気持ちが多く残る傾向がある。

本章は、日本語では「再度の感謝」がどのような場合でなされるのか、また、中国語では「再度の感謝」は存在しないのかを明らかにするために、先行研究の問題点を踏まえて、「再度の感謝」についてのアンケート調査を行った。本章はその分析結果を考察する。

5.1 問題点と研究目的

先行研究で指摘されているように、日本語における「再度の感謝」は、ある意味で出会いの挨拶になっている。しかし、「おはようございます」や「こんにちは」等の日常挨拶と異なって、「再度の感謝」は「その場の感謝」という前提条件がなければ、成り立たない。一方、誰に対しても、どんなことに対しても、「再度の感謝」をするのか、また、感謝の事柄によって異なるのであれば、どのような要素の影響を受けて行われるのかに関しては、先行研究の中では触れられていない。

従来の感謝・謝罪に関する研究では、「利益」や「負担」などが関与する要素として取り上げられているが、「再度の感謝」については、関与する要素が何であるかを詳しく分析して提示した研究はない。

従って、「再度の感謝」について、明らかにしなければならない問題点として以下が挙げられる。

①「再度の感謝」と「その場の感謝」はその頻度において相関性があるのか。

②「再度の感謝」をするかどうかを左右する要素は何か。

彭(2005)は、日本の「感謝行動」においては、中国の言語行動と異なる点があると述べている。「日本人の「再度感謝」という言語行動は中国人留学生にとって、最初は理解しにくいものである。中国人は通常、その場でお礼を言う。その後また、葉書きや電話で「お礼を述べる」ことが少ない。さらに次回会ったときに、「先日は本当にどうもありがとうございました」という「ご恩は忘れていない」ことを口にする行為は中国では通用しない。「再度感謝」行為はよそよそしい扱いと誤解される場合もある。」

また、施(2007)は、「ご馳走になった友人に、2-3日後また出会ったとします。「先日はどうもありがとうございました」などのように、もう一度お礼を言うことがありますか」及び「もし、あなたが言われたとすると、どんな感じがしますか」の二つの調査項目について、意識調査を行った。同時に、再感謝行為について中国人のみを対象として面接調査をも実施し、再感謝行為に関する評価は中国では肯定的というよりも、むしろ否定的に受け止められると指摘した。中国語では恩恵をもらった時点で一度だけ心を込めて深く感謝すればそれで十分であり、次に会った時一切そのことに言及しないのが一般的であると主張

した。

しかし、本当に中国では「再度の感謝」またはそれに類似した言語行動は存在しないのだろうか。施(2007)が調査した「馳走の場面」以外でも、やはり同じように中国人は対応するのだろうか。つまり、

③中国において、「再度の感謝」の言語行動は存在しないのか。

これについても詳細な調査が必要である。

以上の3つの問題点を踏まえ、本論文は日中における「再度の感謝」について、アンケート調査をもとに考察を行う。

5.2 調査の概要

調査方法としては、アンケート調査法を用いて行う。場面と対人の設定について、先行研究を参照し、成立できそうな組み合わせを想定した。

5.2.1 調査対象

質問紙のアンケート調査を行った。調査対象は20代の大学2年生と3年生である。

調査対象：日本語母語話者 26名（男12名、女14名）

中国語母語話者 26名（男10名、女16名）

5.2.2 場面設定

表1 ①贈り物、②荷物、③借用、④借金、⑤賛辞、⑥祝福

①贈り物	(他人から物品をもらった場面) あなたにとって特別な日(誕生日など)に、相手からお祝いのプレゼントをもらった時
②荷物	(他人が体力を使って手伝ってくれた場面) 重そうな荷物を運んで行く途中で、相手が手伝ってくれた時
③借用	(他人に依頼して遂行した場面) 相手から本を借りてそれを受け取った時
④借金	(自分が困った状態に陥ったときに、他人が助けてくれた場面) 食堂で注文した料理の代金を払おうとした時に、財布或いはカードを忘れたことに気

	がついた。ちょうど食事に来た相手がそれを見て、代わりにお金を払ってくれた時
⑤ 賛辞	(他人に好意的に褒められた場面) あなたは新しい服を着ている。それを見たクラスメートに「きれいだ」と褒められた時
⑥ 祝福	(他人に好意的に祝福された場面) 全国作文コンテストで一等賞になった。クラスメートが祝ってくれた時

5.2.3 対人設定

普通の大学生の生活で接触しそうな相手を想定し、お互いの社会的距離によって、「家族」・「友人、クラスメート」・「先生」及び「図書館職員」を設定した。ただし、通常存在しない、場面と対人との組み合わせは調査から外した。詳しくは次の通りである。

◆個人的付き合いのある相手： A「家族」、B「友人、クラスメート」、C「先生」

◆個人的付き合いのない相手： D「図書館職員」

場面ごとの対人設定：

- ①贈り物 A「母」、B「友人」、C「先生・上司」
- ②荷物 A「父」、B「クラスメート」、C「先生」
- ③借用 B「クラスメート」、C「先生」、D「図書館職員」
- ④借金 B「クラスメート」、C「先生」
- ⑤賛辞 B「クラスメート」
- ⑥祝福 B「クラスメート」

5.2.4 質問設定

場面と対人設定の組み合わせによって、13のアンケート項目を作成した。各項目では、1) 設定された場面で被験者が感謝の言葉を伝えるかどうか、2) 次回会ったとき(後日)に、改めて感謝の意を伝えるかどうか、また、伝える場合はどのような感謝表現を使うかを選択、または、自由回答で記述してもらおう。

例(日本語)：あなたにとって特別な日(誕生日等)に、友人からお祝いのプレゼントをもらったときに、

◆ 感謝の言葉を言いますか。

- A 言わない B 言う

◆ 次回会ったときに、改めて感謝をしますか。

A 感謝しない B 感謝する→① ② ③ ④その他(自由回答)_____

①先日(この間)は、(どうも)ありがとう(ございました)。

②先日(この間)は、(どうも)すみませんでした。

③先日(この間)は、お世話になりました。

④その他_____(自由解答)_____

例(中国語)：在你的特别的日子(生日等)，当你从友人那里收到礼物时，

◆你会表示感谢吗？ A 不会 B 会

◆下次见面时，你会再次表示感谢或谈及吗？

A 不会 B 会。会说：_____

(和訳)

あなたにとって特別な日(誕生日等)に、友人からお祝いのプレゼントをもらったときに、

◆感謝を表しますか A しない B する

◆次回会ったときに、改めて感謝を表したり、言及したりしますか

A しない B する。何を言う：_____

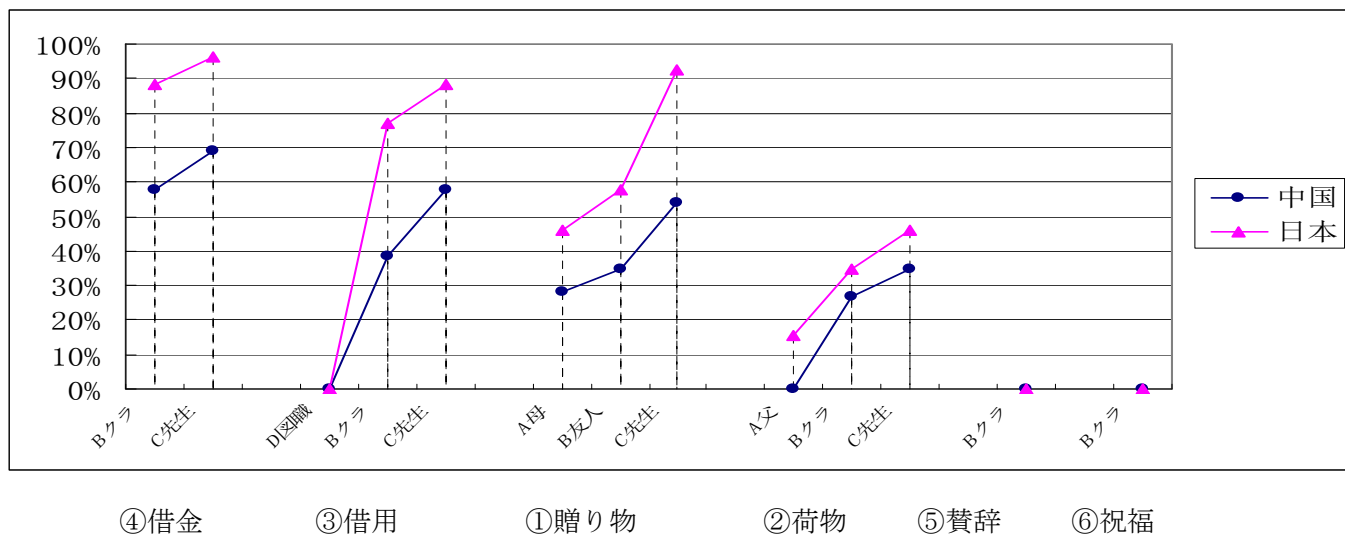
5.3 調査の結果

表2 場面ごとの「再度の感謝」をすると答えた人数、()の中は「その場の感謝」をすると答えた人数である。

	①贈り物			②荷物			③借用			④借金		⑤賛辞	⑥祝福
	A	B	C	A	B	C	B	C	D	B	C	B	B
	母	友人	先生	父	クラ	先生	クラ	先生	図職	クラ	先生	クラ	クラ
日本	12 (26)	15 (26)	24 (26)	4 (26)	9 (26)	12 (26)	20 (26)	23 (26)	0 (16)	23 (26)	25 (26)	0 (23)	0 (25)
中国	7 (25)	9 (26)	14 (26)	0 (12)	7 (26)	9 (26)	10 (26)	15 (26)	0 (18)	15 (26)	18 (26)	0 (21)	0 (24)

(注：「クラ」は「クラスメート」を指す)

グラフ1 「再度の感謝」のパーセンテージ



以上の「再度の感謝」のパーセンテージは、それぞれの場面と相手の組み合わせにおいて、「その場の感謝」をすると答えた人数を分母として「再度の感謝」をすると答えた人数の割合を示す。

5.4 考察と分析

5.4.1 「再度の感謝」と「その場の感謝」との相関

前節のアンケート結果をもとに、「その場の感謝」と「再度の感謝」との相関性を考察する。

まず、日本のデータを観察してみよう。借用の場面にある③B と③D を見てみると、「その場の感謝」をすると答えた人数はそれぞれ 26 と 16 であり、「再度の感謝」をすると答えた人数は 20 と 0 である。両者を比較すると「その場の感謝」をすると答えた人数が減ると、対応する「再度の感謝」も連動して減っている、すなわち、頻度において両者は相関しているように見える。しかし、①B と②B と③B を比べると、「その場の感謝」をすると答えた人数はいずれも 26 と同数であるが、対応する「再度の感謝」は 15、9、20 となっている。すなわち、ここでは、「その場の感謝」と「再度の感謝」の間に頻度について相関性は認められない。中国のデータに関しては、日本に比べ数値が若干小さいものの、相関性の有無について、事情は全く同じである。従って、日本と中国における感謝の言語行動において、「その場の感謝」と「再度の感謝」の間に、少なくとも頻度という点では相関性は存在しないと結論づけられる。この事実は、「再度の感謝」がどのような頻度でなされるかに影響を与える条件が、「その場の感謝」とは独立している、または、より強く関与していることを示唆

する。では、具体的にその条件とはいかなるものかを次節で考察する。

5.4.2 「再度の感謝」に関与する要素

5.4.2.1 分析1

アンケート調査の六つの場面における「再度の感謝」をすると答えた人数がどのように異なっているかを見る。比較しやすくするために対人要素をクラスメートまたは友人に限定し、「再度の感謝」のパーセンテージの高い順で並べる。

表3

	④B	③B	①B	②B	⑤B	⑥B
日本	88%	77%	58%	35%	0%	0%
中国	58%	38%	35%	27%	0%	0%

ここに見られる「再度の感謝」のパーセンテージの背景には、何があるのだろうか。

再度、グラフ1を見てほしい。大まかに述べると、3つのグループに分けることができそうである：「再度の感謝」のパーセンテージの高いもの④③①、低いもの②、ゼロのもの⑤⑥。特に日本のデータにおいて対象が「先生」の場合に（前2者の区分けについて）はっきりと現れている。

「感謝」と「詫び」に関する先行研究の中で、「利益」、「負担」、「借り」などがよく取り上げられている。どのような条件が「再度の感謝」と関連するかを解明するために、以下の場面を分析してみる。上と同じように、対人要素をクラスメートまたは友人に限定する。

- ④借金 （お金を貸してもらわなければ、食事ができなくて損をする）
- ③借用 （本を貸してもらわなければ、論文などが書けない状態になって損をする）
- ①贈り物 （プレゼントをもらわなくても、自分にとって損はない。もらえばが得がある）
- ②荷物 （そもそも自分で運ぶつもりなので、手伝ってもらわなくても、損はない。手伝ってもらっても得はそんなに多くない）
- ⑤賛辞 （言ってもらわなければ、損はない。言ってもらったら、得は言葉レベルの好意を得たにすぎない）
- ⑥祝福 （言ってもらわなければ、損はない。言ってもらったら、得は言葉レベルの好意を得たにすぎない）

を得たにすぎない)

以上の分析を見ると、利益が各場面を左右している。各場面の特徴を利益で表すと、④③①は目に見える具体的な利益のある場面であり、②は目に見えない具体的な利益のある場面であり、⑤⑥は具体的な利益のない場面である。表3の「再度の感謝」のパーセンテージと結び付けて、次のような特徴を見出せる。行為をしてもらった人の利益の大きさの違いにより、「再度の感謝」のパーセンテージも連動している。利益が大きければ大きいほど、「再度の感謝」のパーセンテージが高くなる傾向がある。すなわち、利益が大きければ大きいほど「再度の感謝」をする傾向が強くなると言えよう。

5.4.2.2 分析2

グラフ1を見ると、同じ場面でも、相手によって、「再度の感謝」のパーセンテージは異なることがわかる。場面①「贈り物」を例として、

日本：①A 46%、①B 58%、①C 92%

中国：①A 28%、①B 35%、①C 54%

同じ状況と利益の場合に、なぜこのような大きな差が生じるのか。相手が誰であるかが重要な要素になると思われる。①A～Cの相手はそれぞれ、「母」と「友人」と「先生」であり、三者との関係が大切なポイントになっている。現実の生活では、上下関係、親疎関係などが複雑に作用し合っていることで、社会的距離が基本的に決まっている。すなわち、上述した同じ状況と利益の場合に、大きな差が生じるのは、三者との「社会的距離」が異なるからではないかと思われる。

A「家族」、B「友人・クラスメート」、C「先生」、D「図職」の対人設定では、彼らとの「社会的距離」は基本的に、A「家族」<B「友人・クラスメート」<C「先生」<D「図職」である。

再度、グラフ1を見る。各場面(⑤と⑥を除く)は基本的に「社会的距離」が大きければ大きいほど、「再度の感謝」のパーセンテージが高くなる。ただし、③Dの「図職」が外れている。これを解明するために、③Dの「図職」の特徴を分析してみよう。

③Dの「図職」については、個人的付き合いがなく、ただ本を借りるサービスを受けただけであり、相手は職責範囲内のことをして、社会役割を果たすだけである。このような場合、「その場の感謝」をしても、「再度の感謝」は生じにくい。この点は日中双方のデータから見られる。道を教えてくれる通行人のような、個人的付き合いの範囲を超える相手の場合も

「再度の感謝」が生じにくい。

以上の分析を通して、日中双方の「再度の感謝」において、「社会的距離」は共通する要素であると見られる。「社会的距離」が大きければ大きいほど、「再度の感謝」をする傾向が強くなる。このような特徴は、②【荷物】③【本を借りる】④【借金】の場面でもはっきり現われている。

以上の分析をまとめると、個人的付き合いのある相手の場合は、相手との「社会的距離」が大きければ大きいほど、「再度の感謝」をする傾向が強くなる。個人的付き合いのない相手の場合は「再度の感謝」は生じにくい。

5.4.3 中国における「再度の感謝」の言語行動

グラフ1で示したように、「再度の感謝」は日本と中国において多く用いられることが明らかになった。全体として、日中の「再度の感謝」のパーセンテージから見れば(③D、⑤B、⑥Bを除く)、いずれも日本が中国を上回っているものの、中国での「再度の感謝」も決して少なくない。

しかし、先行研究の中で述べたように、彭(2005)は、中国人は通常、その場でお礼を言い、その後また、葉書きや電話で「お礼を述べる」ことが少ないと述べている。さらに次回に会ったときに、「先日は本当にどうもありがとうございました」という「ご恩は忘れていない」ことを口にする行為は中国では通用しない。「再度感謝」行為はよそよそしい扱いと誤解される場合もあると指摘した。

また、施(2007)は、中国語では恩恵をもらった時点で一度だけ心を込めて深く感謝すればそれで十分であり、次に会った時一切そのことに言及しないのが一般的であると主張した。

これらの先行研究は 5.4.2.2 で得た結論と矛盾しているように見えるが、実際はそうではない。中国において、日本流の「再度の感謝」はほとんどない。ただし、社会的距離のある人(先生)に対しては、類似の形式的表現が使われる。しかし、広い意味での「再度の感謝」に含まれると思われるような言語行動は存在する。以下の表4と表5で、日中における「再度の感謝」の表現を整理し分類した。

【回答表現の整理】

表4 日本：178文

	文の例(一部)
感謝類 94%	<u>先日(この間)は、(どうも)ありがとう(ございました)。(71%)</u> 先日(この間)は、(どうも)すみませんでした。 先日(この間)は、お世話になりました。
その他の類 6%	おもしろかったよ。 すごく嬉しかった。

表5 中国：104文

	文の例(一部)
感謝類 63%	<u>那天谢谢老师了。(9%)</u> (先生、先日ありがとうございました。) 谢谢你的礼物。(あなたのプレゼント、ありがとう。) 上次真不好意思，谢谢老师。(前回、すみませんでした。先生、ありがとう ございました。) 上次送包裹真是太麻烦您了。(前回、荷物を手伝ってくださってご迷惑を おかけしました。)
その他の類 37%	【気持ちの表出】 上次送我的礼物，我很喜欢。(前回、贈ってくれたプレゼント、大好き。) 前几天送我的礼物，我很喜欢，嘿嘿。(先日送ってくれたプレゼント、私は大好 き。へっへっ。) 【相手への言及】 谢谢你那天帮我，要不我都不知道该怎么办了。 (あの日手伝ってくれてありがとう、そうじゃないとどうすれば良いか分からなく なっちゃった。) 那天幸好遇上你了，不然估计会尴尬死了。 (あの日幸いにあなたと出会って、そうじゃないと気まずくてたまらなかった。) 【恩返しの約束】

	这次我请你。	(今回、私のほうがご馳走する。)
	上次你请我,今天我请你吃饭吧。	(前回おごってくれたが、今日私はおごる。)

アンケート調査により得られたデータに基づいて、日中における「再度の感謝」の言語表現をそれぞれ大きく感謝類とその他の類に分類した。日本の 178 文の中で、感謝類がもっとも多く、94%に達している、その他の類が 6%である。中国の 104 文の中では感謝類が 63%、その他の類が 37%である。いずれも「感謝類」が一番多く、日本における「感謝類」では定型表現「先日はどうも」などがあるが、中国における「感謝類」にはいろいろなバリエーションがある。「先日はありがとう」にぴったり合っている中国語の文はたった 9 文で 10%にも達していない。日本流の「先日はありがとう」のような定型表現が中国では通用しないという指摘は、これが要因ではないかと思われる。一方、「その他の類」文は中国 37%、日本 6%であり、パーセンテージも文の量も中国は日本を大きく上回っている。

興味深いことに、中国人被験者の回答によると、【借金】の 15 文のうち、12 文が感謝の言葉の代わりに、「私のほうからご馳走する」のような言葉を用いている。この点は、施(2007)のご馳走に関する研究と一致している。中国では日常でご馳走したり、ご馳走になっても一々お礼を言うことがあまりない。行動で応えるのが一般的であると考えられている。

以上の分析を通して、従来の研究とは異なり、中国においても「再度の感謝」の言語行動は存在していることが明らかとなった。日本流の「再度の感謝」はほとんどないが、表現にさまざまなバリエーションがある。

まとめ

「先日はありがとう」のような「再度の感謝」は日本独特の言語現象であると思われてきたが、本章では先行研究の問題点を踏まえ、日中における「再度の感謝」について、アンケート調査をもとに考察を行った。その結果、以下のような点が明らかになった。

- ① 「その場の感謝」と「再度の感謝」の間に、頻度の相関性は存在しない。
- ② 一般的には、行為をしてもらった人の利益が、大きければ大きいほど、「再度の感謝」をする傾向が強くなる。

- ③ 個人的付き合いのある相手の場合は、相手との「社会的距離」が大きければ大きいほど、「再度の感謝」をする傾向が強くなる。個人的付き合いのない相手の場合は「再度の感謝」は生じにくい。
- ④ 中国語において、「再度の感謝」は存在している。使用頻度は日本語より低い。
- ⑤ 「再度の感謝」の表現について、日本語においては「先日ありがとう」のような定型表現がよく用いられる。中国語においてはそのような定型表現が定着しておらず、「再度の感謝」表現のバリエーションが豊かである。

5. 5 「事前の感謝」

慣用表現を多用する日本語の「再度の感謝」は「事後の感謝」の一種であると言える。この「事後」の逆バージョンである「事前」の感謝が日本語にはないが、中国語にはある。

日本語の感謝表現「ありがとう」は、感謝の意味と捉えられるが、対応する中国語の感謝表現「谢谢」は、感謝の表出以外に、ほかの意味もある。例えば、谷口(2007)は、「タクシーの運転手に対して“台北车站，谢谢”(台北駅まで、ありがとう)のような「行き先を告げ、車が発車する前に「ありがとう」を言う」という感謝表現の使用を不思議に思った経験があると言及している。筆者の住んでいる中国大陸でも、類似する場面で“谢谢”を言うのが普通である。このような場面は、依頼の場面であると言っても良い。発車する前、行き先を告げて“谢谢”を言って、発車から着くまでお願いするという意味でタクシーの運転手に依頼する。日本人にとって違和感のある感謝表現の使用であるが、中国語社会では全く問題はないようである。次の2例を通じて、さらにこの種類の“谢谢”の用法を観察しよう。

【用例1】

夏琳：(拦住记者不让他们拍一个意外的小插曲) 哎，记者朋友，帮帮忙，帮帮忙，不要拍，不要拍。来来，谢谢，谢谢。有什么事和我说好吗？

(記者の皆様、お願い、お願い、撮らないで、撮らないで、お願いします。何かありましたら、私にご相談ください。)

(《杜拉拉升职记》第7話)

【用例 2】

老同事：写感谢信应该很容易，你帮我个忙好吗？帮我把这个传真发了，谢谢。

(感謝状を書くのは簡単なはずなので、手伝ってもらえないか。このファックスを出してくれる？ありがとう。)

新入职杜拉拉：不客气。

(どういたしまして。)

(《杜拉拉升职记》第 3 話)

お礼が関係認定的な意味を持つことであり、関係認定は以前に感謝を感じるような出来事があったということが前提になっていると、森山 (2013) が指摘したように、日本語の感謝場面は、感謝する対象 (すでに行った行為や出来事) が存在しているという条件が必要である。これに対して、中国語の用例 2 では、相手の協力や同意をまだ得ていない場合に、前もって出来事の成立を想定した上で、感謝表現を使用する。いわば先取りの感謝表現と言えよう。用例 1 は、みんなの協力を得るために、事前に感謝の意を表明する。本当の意図は感謝ではなく、自分の言ったことに従うように依頼することである。仮に依頼しようとすることに成功したら、ありがたいという話し手の気持ちを先に宣言するのである。この点から、話し手は急いで相手に懇願しているともとれる。しかし、このような先取りの感謝は話し手の意志を一方的に相手に押し付け、相手のフェイスを損ねるリスクが高い。

このような用法は、すべての場面で使えるわけではなさそうである。例えば、用例 2 は会社の職員が新入社員に頼む場面であるが、仕事上のことが双方にとって当たり前であるとの認識が前提としてあってはじめて先取りの感謝の使用が許される。しかし、通常の状態では、他人に依頼するとき、先取りの感謝表現を言うと、相手に自分のことばかり考えているイメージを与えてしまうだろう。

例えば、A は B からお金を借りる際に、「可以借给我 100 元吗？」(100 元を貸していただけますか) の後に「谢谢」を付け加えると、一方的に、他人のご都合をまったく考慮しない人だと思われてしまうだろう。

○ 「可以借给我 100 元吗？」(100 元を貸していただけますか。)

× 「可以借给我 100 元吗？谢谢！」(100 元を貸していただけますか。ありがとうございます。)

以上の用例を見ると、依頼の当然性が高い場面（「タクシー場面」「緊急に記者に頼む場面」「会社場面」）では、先取りの感謝表現が用いられるが、依頼の当然性が低い場面（「借金場面」）では、先取りの感謝表現が用いられにくい。「借金場面」のように、依頼の当然性の低い場面では、一方的に自分の意志を相手に押し付けるイメージがあり、言い換えれば、相手が依頼しようとすることをする義務があるというニュアンスが生じる。つまり、このような「先取りの（事前の）感謝」は非常に相手のことを配慮する度合いが低い。しかし、表面上は、「感謝」の表現を使うが、実際には「先取りの感謝」は、まだ発生していない利益や恩恵が発生すると確信し、相手に返答されていない段階で、行う依頼の表現である。以下の二つの条件が同時に満たされているときに、「先取りの感謝」が依頼の場面で用いられる。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 一般的に、「先取りの感謝」の相手は、目下の人や、サービス業の従業員である。② 依頼しようとするものの当然性が高い時に、「先取りの感謝」が使用される。 |
|---|

この種の表現は、配慮度が低く、聞き手にとって、話し手の依頼にしたがって、何らかのことをする義務がある場面で使用される傾向がある。この用法は、日本語の「お願いします」のような意味と捉えられるが、「先取りの感謝」は聞き手に断られにくい状況では、話し手は自分の“客气”（マナー）を示した上で、聞き手に頼む。配慮度が低いことと矛盾しているようであるが、中国語において特定の場面では不思議ではない。また、一方的な押し付けがましいイメージを緩和するために、用例2のように、“你帮我个忙好吗？”（手伝ってもらえないか）などを加えて使用し、ある程度聞き手への配慮を示すこともできる。

すでに聞き手から利益や恩恵を受けたことに感謝するわけではなく、将来の予想できる利益や恩恵に対して、感謝することであり、聞き手の承諾を得ていない時点での一方的な感謝と言えるかもしれない。一方で、意味的には他人に依頼する際の表現でもある。したがって、この「事前の感謝」は、感謝の言語行動であるか、それとも、依頼の言語行動であるか、今後の分析を待たねばならない。

本章は日中における「再度の感謝」の言語行動についてアンケート調査を行った。その結

果、中国語の「再度の感謝」の概念も見直す必要があると主張し、日中における「再度の感謝」の基本的な特徴を明らかにした。しかし、分析の結果では、個人的付き合いのない相手の場合は、「社会的距離」だけで量れないかもしれない。これが今後の研究課題になる。

今回の調査で、メールや電話などでの「再度の感謝」が含まれなかったが、今後の調査でそれを扱うつもりである。そして、より多くの日中被験者へのインタビューを行い、自然な対話資料を収集し、より一層「再度の感謝」の研究を深めていきたいと考えている。

第六章 まとめと今後の課題

まとめ

従来の感謝の研究では、例外なく謝罪表現「すみません」の使用が扱われている。「ありがとう」に比べて、「すみません」のほうは補償力が強く、このような補償のあいさつを使うことで、お互いの関係を確認し、秩序を立てられるという指摘（金田一（1987））、感謝場面での「すみません」の使用が「感謝の表現交替現象」であり、「ありがとう」との「状況転換」が丁寧行動の方策として機能しているとする研究（熊取谷（1990））、お礼は聞き手からの利益の提供に伴う不均衡の修復であり、お詫びは聞き手へ損害を与えたことによる不均衡の修復であるという対人関係上の分析（森山（1999））などがある。上述した研究は、ことばの機能の範囲で、感謝場面での「すみません」を考察した。また、対照研究のうち、特に日中両言語の対照研究では、感謝場面の差が一定程度明らかになったが、感謝場面で謝罪表現がどのように使用されているか、どのような形で存在しているか、そして、なぜ単独の謝罪表現が日本語にはあるが、中国語にはないのかという課題が依然として未解決の状態になっている。

本研究は以上の課題を踏まえ、日中両言語における感謝の言語行動の使用表現を収集する際に、テレビドラマのセリフを研究データとして、感謝場面の表現のバリエーションを考察した。また、感謝場面における謝罪表現の使用を解明するために、「感謝型表現」、「謝罪型表現」、「混在型表現」、「その他の表現」に分類して集計した。その結果、従来の研究で「中国語の感謝場面で単独の謝罪表現の使用はない」という指摘がある程度正しいと判断できたが、同時に謝罪表現を含む「混在型表現」の使用が中国語にもあるという事実も明らかとなった。

データを分析し、日中両言語の感謝表現の特徴を考察したあと、「感謝の言語行動に関する枠組み」を提案した。まず、「話し手S、聞き手H」を設定して、両者の「プラス（＝利益）」と「マイナス（＝不利益・負担）」を（+）（-）の記号で示す。また、「話し手の行為によってもたらされた状況」と「聞き手の行為によってもたらされた状況」を、それぞれ[S]と[H]で示す。以上の状況で、SはHに対して、（+）と（-）を意識して、何らかの言語行動を行う」という前提条件を設定し、八つの可能な組合せを設定した。

①	S (+) , \boxed{H} (+)	⑤	\boxed{S} (+) , H (+)
②	S (+) , \boxed{H} (-)	⑥	\boxed{S} (+) , H (-)
③	S (-) , \boxed{H} (-)	⑦	\boxed{S} (-) , H (-)
④	S (-) , \boxed{H} (+)	⑧	\boxed{S} (-) , H (+)

典型的な感謝の言語行動の適用図式は①と②であり、謝罪の言語行動の適用図式は⑥と⑦である。従って、感謝の言語行動は、少なくとも「S (+) と \boxed{H} 」という要素、そして、謝罪の言語行動は、すくなくとも、「 \boxed{S} とH (-)」という要素が必要であることを指摘した。さらに、言語行動においては、状況把握のための全体的・固定的な側面と、個々の発言の背景にある個別的・流動的な側面があることを主張した。すなわち、言語化においては、それぞれの組み合わせ内の一部の要素のみに注目するという視点が必要であると提案した。

上記の抽象化した枠組み・図式と個別的・流動的側面を示す記号を導入することで、従来気づかれなかった現象も浮き彫りになった。まず、日本語でも中国語でも感謝の場面では、「{S (+)} , \boxed{H} (-)」という注視が可能であり、それが謝罪表現として言語化することによって、両言語の感謝場面で謝罪表現が用いられる事実を説明することが可能となった。さらに、感謝場面にとって必須の「S (+)」という要素を義務的に言語化するか否かに関する制約によって、日本語の「すみません」と中国語の「不好意思」の単独使用における差が説明できる可能性について指摘した。

さらに、日本語の「すみません」（「謝罪型表現」）と「ご迷惑」類と「お疲れ、ご苦労」類と、中国語の“劳烦”“问责”“破费”類の表現が、同一の図式（{S (+)} , \boxed{H} (-））で解釈できるという事実や、「ご迷惑をおかけしました」と“给你添麻烦了”が「すみません」に類似する機能を持ち、単独で使用されても問題ないという事実も指摘し、日本語対中国語という全体的なレベルではなく、個々の表現に則した細かな比較が必要であることを強調した。

また、「その場の感謝」の延長線に位置する「再度の感謝」は、「感謝型表現」と同一の図式で解釈できるが、「再度の感謝」の注目条件が時間の流れとマイナスの回避などの影響を受け、「その場の感謝」と異なる特徴があると予想し、アンケート調査でデータを収集し考察した。その結果、①「その場の感謝」と「再度の感謝」の間に、頻度の相関性は

存在しないこと、② 一般的には、行為をしてもらった人の利益が、大きければ大きいほど、「再度の感謝」をする傾向が強くなること、③個人的付き合いのある相手の場合は、相手との「社会的距離」が大きければ大きいほど、「再度の感謝」をする傾向が強くなり、個人的付き合いのない相手の場合は「再度の感謝」は生じにくいこと、④中国において、「再度の感謝」は存在していること、⑤「再度の感謝」の表現について、日本語においては「先日ありがとうございました」のような定型表現がよく用いられるが、中国語においては定型表現が定着しておらず、「再度の感謝」表現のバリエーションが豊かであることをあきらかにした。

このように、従来、日本語の「すみません」や再度の感謝が独特であるとの指摘をもとに、日本語のユニークさが強調されがちであるが、中国語の謝罪表現の「麻烦」が日本語の「すみません」と同じような振る舞いを見せ、中国語にも「再度の感謝」の存在が認められることから、日本語が中国語と比べ、言語レベルでユニークであるというのは、不適切であることを示した。さらに、見方を変えて、謝罪表現が感謝場面で使用されることが必ずしも特殊でないということになれば、むしろ、中国語の「すみません」が（単独で）感謝場面に使えないことが特別になってしまう可能性もあり、今後は、個々の言語表現に注意を向けながら、感謝の言語行動について精緻な分析が必要であることをあきらかにした。

最後に、まだ具体的な提案ができる段階にないが、中国語の依頼場面で使用される“谢谢”の存在を取り上げた。これが、感謝の言語行動の一種であるかどうか自体、考察が必要であるが、もし、これが感謝の言語行動であれば、「事前の感謝」と呼べるようなものである。この種の言語行動は、日本語にはないように思われる。そうすると、この「事前の感謝」は、日本語の「再度の感謝」のように、中国語の特殊性を表すものになるかもしれない。同時に、第五章で明らかにしたように、「再度の感謝」がないと言われてきた中国語にも、それに相当するような言語行動があった。同じように、詳細に分析すると、日本語にも「事前の感謝」と呼べるような言語行動があるかもしれない。今後の課題である。

本論文で提案した枠組みは、感謝の言語行動のみではなく、関連する言語行動にも応用できる可能性がある。感謝と共通点が多い、謝罪表現はもちろんこと、（中国語の）感謝場面で非難表現が使用されることから考えると、非難の場面も感謝や謝罪とつながりがあるだろう。本論文の提案は、これらの場面における言語行動についても分析の基盤を提供できるものとする。

6.1 今後の課題

本研究は主にテレビドラマのセリフから抽出したものを研究データとして考察し、日中両言語における感謝場面の特徴を明らかにした。しかし、テレビドラマの台詞に基づく研究には限界が存在する。従来の研究と同じように、全ての場면을把握することができないほか、テレビドラマのセリフから日本語と中国語で完全に同じ場面を入手するのは容易ではない。したがって、本研究は場面別の対照について、同一場面の親疎、上下などの研究を行うことができなかった。今後の研究では、同一場面の設定、利益や負担などの要素を考察し、さらに日中両言語における感謝の言語行動の特徴を明らかにしたい。

また、本研究が感謝の全貌を把握できていないのも事実である。客観的には同程度と思われる利益が人によってその大きさが異なると捉えられることもある。利益の大小をどのように区別するのが適切なのか、依然として困難な課題になっている。また、人間関係や、謝罪内容の負担度の違いなどの「謝罪型表現」の選択における重要な要素も、十分に扱えなかった。

研究データでは、それぞれの分類の割合が選択されたテレビドラマによって変わっている。その結果、本研究の研究データが実際の感謝表現の分類と割合とにずれがある可能性もある。テレビドラマでは、それぞれの人物の登場とストーリーの流れはシナリオの作者によって設定され、場面も制限されている。出現した場面も研究者のコントロールできる範囲を超えている。今後の調査ではテレビドラマの量を増やして、多様な生活場면을表現するテレビドラマを対象に含め、この誤差を減少させる。

もっと多くの非慣用句の感謝表現を収集することも急務である。慣用表現として定着している表現に比べて、非慣用の感謝表現はもっと話し手の心境と考えを示すことができ、話し手の繊細な心理を把握できる。また、完全に自然な会話などからデータを入手するのも重要な一環としてある。それに加えてフォローインタビューを実施し、話し手が使用した表現だけではなく、その表現を使用した際の本当の心理が何だったかを解明することも必要だろう。

本論文では、感謝の表現を分析できる枠組み・図式を提案して、それによって感謝の表現が解釈できるようになった面もあるが、今後は、この枠組みをさらに工夫して修正していく必要がある。たとえば、中国語の問責表現と非難の表現を考察するためには、枠組みを精緻化しなければならない。先にも述べたが、具体的な言語表現についても、個別に検討する必要がある。また、異なる場面で共通して使用される表現が多くあることから、多

様な場面を俯瞰するような視点から、言語行動というものの全体像を捉えることも忘れてはならない。

謝 辞

本論文をまとめるにあたり、大変多くの方々にご指導とご協力をいただきました。

まず、最後まで熱心にご指導いただいた主指導教員の岸田泰浩先生に謹んで深く感謝の意を申し上げます。多大な労力と時間を費やし、いつも温かくご指導いただき、言葉では言い尽くせないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。先生には、研究指導のみならず公私全般に渡ってご支援いただき、温かい励ましの言葉がいつも大きな心の支えでもありました。また副指導教員の鈴木睦先生、今井忍先生にも心より感謝申し上げます。博士課程在学中の論文審査と発表会に貴重なお時間を割いていただき、厳しいご指導と温かい励ましをいただいたおかげで、一步ずつ論文を進めることができたと思います。

そして修士時代から大変お世話になった中国の佳木斯大学の張鳳杰先生、曹美蘭先生、張守祥先生に深くお礼を申し上げます。日本への留学及び研究全般に渡る多大なご支援、ご指導を賜り、研究者としてあるべき姿のみならず、研究以外にも人生の先輩として様々なことを教わりました。

調査にあたっては、質問紙調査の実施を許可し快く協力して下さった中国の佳木斯大学外国語学院の日本語専攻と教育学院教育学専攻、日本の大阪大学外国語学部中国語専攻、質問紙に回答して下さった各大学の学生の皆様に心より感謝いたします。皆様のご協力をいただいたからこそ、本研究は計画通りに進めることができました。

そして、平素お世話になっているチューターの中垣友江さんと、博士論文の日本語を丁寧にチェックして下さった笠井陽介さんに感謝の意を表します。また、論文提出までの学会での発表や論文の投稿にあたり、相談に乗って下さった先輩の皆様にもお礼を申し上げます。日本でのこの三年間で、多くの先生方に巡り合い、研究の道に進み、厚くご指導を賜ったことに心より感謝申し上げます。また、多くの先輩や後輩、友人の皆様にもお世話になりました。深く感謝いたします。

【参考文献】

- 相川充・矢田さゆり・吉野優香（2013）「感謝を数えることが主観的ウェルビーイングに及ぼす効果についての介入実験」東京学芸大学紀要 総合教育科学系は I 第 64 集 pp. 125-138
- 相原 茂(2007) 『「感謝」と「謝罪」—はじめて聞く日中“異文化”の話』 講談社
- 赤堀由起子(1995)「日本語母語話者の感謝表現-ストラテジーの種類とその使い分けを中心に-」『待兼山論業 29』大阪大学文学部 pp. 49-63
- 安 美蘭(2005) 「日本語、中国語、朝鮮語における感謝表現の対照研究」 『日本語教育と異文化理解』第 4 号 愛知教育大学国際教育学会 pp. 1-9
- 生越まり子(1993) 「謝罪の対照研究—日朝対照研究」『日本語学』12 卷 12 号 明治書院 pp. 29-38
- 生越まり子(1994) 「感謝の対照研究—日朝対照研究」『日本語学』13 卷 7 号 明治書院 pp. 19-26
- 生越直樹（2006）『対照言語学』東京大学出版会
- 池田理恵子（1993）「謝罪の対照研究-日米対照研究-face という視点からの一考察」『日本語学』 pp. 13-21
- 石綿敏雄・高田 誠（1990）『対照言語学』 おうふう
- 井出祥子（2006）『わきまへの語用論』大修館書店
- 井上 優（2013）『相席で黙ってられるか—日中言語行動比較論』岩波書店
- 浮田三郎(1995) 「感謝表現に見る発想法の特徴—日本語と他の言語の表現を対照比較して」 広島大学留学生センター紀要 NO. 5 pp. 1-13
- 宇佐美まゆみ（2008）「ポライトネス理論研究のフロンティア—ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論—」『社会言語科学』第 11 卷第 1 号 社会言語科学会 pp. 4-22
- 江端義夫（2001）「日本のあいさつ表現とあいさつ行動の地理言語学的研究」『社会言語科学』第 3 卷第 2 号 社会言語科学会 pp. 27-38
- 江端義夫・張磊（2006）「あいさつ表現の中・日比較文化的研究—「労働」でのあいさつを中心に」 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部第 55 号 pp. 133-142
- 王 安（2010）「感情表現における日中対照研究—感情の語り方と人称制限の普遍性に着目

- して」『言語研究の諸相—研究の最前線』北海道大学大学院文学研究科言語情報学講座
編 pp. 35-45
- 王 志英(2005) 『命令・依頼の表現—日本語・中国語の対照研究』 勉誠出版
- 大谷麻美(2003) 「日・英語における謝罪と感謝—背景心理からの分析」『日本英語コミュニ
ケーション学会紀要』12 巻 1 号 pp. 140-152
- 大野敬代(2005) 「「ほめ」の意図と目上への応答について—シナリオ談話における待遇コ
ミュニケーションとしての調査から」『社会言語科学』第7巻第2号 社会言語科学会
pp. 88-96
- 大橋 純(2011) 「感謝の下位概念としてのお礼の談話：互酬性、ポライトネスからの一考
察」『日本語・日本学研究』第1号 pp. 109-122
- 岡本真一郎(1991) 「感謝表現の使い分けに関与する要因」『愛知学院大学人間文化研究所
紀要』第6号 pp. 192-182
- 岡本真一郎(1992) 「感謝表現の使い分けに関与する要因(2) — 「ありがとう」と「すみま
せんタイプ」はどのように使い分けられるか」『愛知学院大学人間文化研究所紀要22』
pp. 35-44
- 岡本真一郎(2013) 『言語の社会心理学』中央公論新社
- 小川治子(1993) 「「すみません」の社会言語学的考察」『言語文化と日本語教育』第6号 お
茶の水女子大学日本言語文化学会研究会 pp. 36-46
- 小川治子(1995) 「感謝とわびの定式表現—母語話者の使用実態の調査からの分析」『日本語
教育』85号 日本語教育学会 pp. 38-52
- 沖 裕子(1994) 「方言談話にみる感謝表現の成立—発話受話行為の分析」『日本語学』13
巻7号 明治書院 pp. 28-37
- 尾崎喜光(2005) 「依頼行動と感謝行動の<関係>に関する日韓対照」『社会言語科学』第
8巻第1号 社会言語科学会 pp. 106-119
- 尾崎喜光(2008) 「依頼行動と感謝行動の日韓比較」『対人行動の日韓対照研究—言語行動の
基底にあるもの』ひつじ書房 pp. 141-196
- 甲斐睦朗(1994) 「企業小説にみる感謝表現」『日本語学』13巻7号 明治書院 pp. 73-79
- 加藤正信(2001) 「日本語の行動表現の構造」日本語教育学シリーズ<第2巻>飛田良文編
『日本語行動論』 pp. 129-150
- 蒲谷 宏(2013) 『待遇コミュニケーション論』大修館書店

- カブリエル・キャスパー (2004) 「語用論研究におけるデータ収集」ヘレン・スペンサー編
著『異文化理解の語用論』研究社 pp. 134-169
- 川村よし子(1991) 「日本人の言語行動の特性」『日本語学』10巻5号 明治書院 pp. 51-63
- 北山 環 (2013) 『ビジネス場面におけるポライトネスの考察—アメリカ・イギリス・日本
映画に表れる依頼・対立・謝罪表現の分析』大阪教育図書
- 曲 志強 (2006) 「日中日常あいさつ表現考察：テレビドラマの対照比較から」『比較社会
文化研究』 pp. 29-36
- 曲 志強 (2009) 「日本語と中国語のあいさつ表現について—大人と子どものあいだの談話
分析」『山口国文』 pp. 108-96
- 曲 志強 (2009) 「日本語と中国語のあいさつ表現について—日本人と中国人の日常あいさ
つに関する意識調査と実態調査」『比較文化研究』 pp. 175-187
- 金 英美 (1994) 「日本人若年層の「感謝」と「詫び」のあいさつの表現のアンケート調査
とその考察—高年層と比較して」『国語学研究』33号 pp. 52-42
- 金 英美 (1995) 「韓国人留学生の「感謝」と「詫び」のあいさつ表現に関する—考察—日
本人若年層と比較して」『国語学研究』34号 pp. 54-43
- 金 庚芬 (2012) 『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究』 ひつじ書房
- 金田一秀穂(1987) 「お礼とお詫びのことば」『月刊言語』16巻4号大修館書店 pp. 75-83
- 国広哲彌(1977) 「日本人の言語行動と非言語行動」『日本語』2「言語生活」 pp. 1-23
- 熊谷智子・石井恵理子 (2005) 「会話における話題の選択—若年層を中心とする日本人と韓
国人への調査から」『社会言語科学』第8巻第1号 社会言語科学会 pp. 93-105
- 熊取谷哲夫(1990) 「日本語の「感謝」における表現交替現象とその社会言語学的モデル」
『表現研究』52号 表現学会 pp. 36-44
- 熊取谷哲夫(1994) 「発話行為としての感謝—適切性条件、表現ストラテジー、談話機能」
『日本語学』13巻7号 明治書院 pp. 63-72
- 熊取谷哲夫(1995) 「発話行為理論から見た依頼表現—発話行為から談話行動へ」『日本語
学』14巻11号 明治書院 pp. 12-21
- 蔵永瞳・樋口匡貴 (2011) 「感謝生起状況における状況評価が感謝の感情体験に及ぼす影響」
『感情心理学研究』 第19巻第1号 pp. 19-27
- 蔵永瞳・樋口匡貴 (2012) 「感情生起状況の種類—感情体験の違いによる分類」『広島大学大
学院教育学研究科紀要』 第3部第61号 pp. 137-142

- 洪 珉杓(2006) 「日韓両国人の言語行動の違い1－感謝と謝罪表現の日韓比較」『日本語学』25巻5月号 明治書院 pp. 84-89
- 崔 信淑(2000) 「感謝を表す表現と心理に関する日中韓対照研究」『大阪大学言語文化学』第9巻 pp. 3-18
- 佐久間勝彦(1983) 「感謝と詫び」 水谷修編『話し言葉の表現』筑摩書房
- 施 暉(2007) 「再感謝表現についての日中比較」『中国学研究論集』第19号 pp. 108-100
- 秦 秀美(2002) 「日・韓における感謝の言語表現ストラテジーの一考察」『日本語教育』114号 pp. 70-79
- 秦 秀美(2008) 「日本語と韓国語における感謝・謝罪表現の研究」 大阪大学大学院言語社会研究科博士論文
- 須賀知美・庄司正実 (2010) 「飲食店アルバイトの感情労働と客からの感謝・賞賛が職務満足感に及ぼす影響」目白大学 心理学研究第65号 pp. 25-31
- 杉戸清樹 (1983) 「「待遇表現」気配りの言語行動」水谷修編『話し言葉の表現』筑摩書房
- 杉戸清樹 (1985) 「待遇表現」『言語行動と日本語教育』昭和58年度日本語教育夏季研修会 現職者研修講義要録 国立国語研究所 監修 pp. 137-158
- 杉戸清樹 (1989) 「言語行動についてのきまりことば」『日本語学』8巻2号 pp. 4-15
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 岩新新書
- 鈴木 睦 (1997) 「聞き手の私的領域と丁寧表現」『日本語学』8巻2号 pp. 45-76
- 住田幾子(1990) 「感謝のあいさつことばー「ありがとう」と「すみません」について」『日本文学研究』26号 梅光女学院文学日本文学会 pp. 1-11
- 住田幾子(1992) 「日本語の詫びのあいさつことば：女子学生の言語生活における談話資料をもとにして」『日本文学研究』28号 pp. 235-243
- 関口剛司(2007) 「日本語による依頼表現の一考察ー日台異文化コミュニケーションの視点から」『龍華科技大学学報』第23期
- 高田 誠 (1992) 「コミュニケーションの対照研究」『日本語学』15巻10号 pp. -
- 滝浦真人(2008) 『ポライトネス入門』 研究社
- 滝浦真人(2008) 「ポライトネスから見た敬語、敬語から見たポライトネスーその語用論的相対性をめぐってー」『社会言語科学』第11巻第1号 社会言語科学会 pp. 23-38
- 田窪行則 (1997) 『視点と言語行動』 くろしお出版
- 田中友愛(2007) 「「感謝」表現の日台比較研究ー「会社の先輩」に対する感謝表現ストラテ

- ジーと心理の日台差』『間谷論集』 創刊号 pp. 73-97
- 田中典子、ヘレン・スペンサー (2004) 「私のせいじゃありません!」: 日本語・英語では、
いわれのない非難にどう対応するか』『異文化理解の語用論』 pp. 57-83
- 谷口龍子(2006) 「日本語と中国語における依頼の丁寧度」『社会科学ジャーナル』 国際基督
教大学学報Ⅱ-B pp. 393-408
- 谷口龍子(2007) 「中国語における陳謝/感謝の表現、対象と機能の関わり」『社会科学ジ
ャーナル』 61COE 特別号 pp. 189-201
- 谷口龍子(2010) 「詫びおよび感謝表現の選択と文・談話構造との関わり—日本語と中国
語のヴォイスに注目して」『東京外国語大学論集』 pp. 179-198
- 陳 瑞紅 (2006) 「日本語と中国語の敬語表現—吉本ばななの作品とその翻訳を題材に」『人
間文化研究科年報』 21 pp. 39-54
- 鄭 加禎 (2006) 「謝罪表明義務感—日本と台湾の対照研究」『社会言語科学』 第 8 巻第 2
号 社会言語科学会 pp. 43-52
- 寺尾留美 (1996) 「ほめ言葉への返答スタイル」『日本語学』 15 巻 5 号 pp. 81-90
- 中島信夫 (2012) 『語用論』 朝倉書店
- 中田智子(1989) 「発話行為としての陳謝と感謝—日英比較」『日本語教育』 68 号 日本語
教育学会 pp. 191-203
- 中西太郎 (2008) 「「あいさつ」における言語運用上の待遇関係把握」『社会言語科学』 第
11 巻第 1 号 社会言語科学会 pp. 76-90
- 中道真木男・土井真美 (1993) 「日本語教育における謝罪の扱い」『日本語学』 12 巻 11 号 明
治書院 pp. 66-74
- 中道真木男・土井真美 (1994) 「日本語教育における感謝の扱い」『日本語学』 13 巻 7 号 明
治書院 pp. 47-54
- 鍋倉健悦(1987) 『人間行動としてのコミュニケーション』 思索社
- 西尾純二 (1998) 「マイナス待遇行動の表現スタイル—規制される言語行動をめぐって—」
『社会言語科学』 第 1 巻第 1 号 社会言語科学会 pp. 19-28
- 西尾純二 (2012) 「日本語の「配慮」の多面性」『「配慮」はどのように示されるか』 三宅和
子・野田尚史・生越直樹 編 ひつじ書房 pp. 71-90
- 西 香織(2006) 「感謝に対する応答の指導について—日本語教育の視点から」『鹿児島県立
短期大学人文学会論集』 30 巻 pp. 25—41

- 西 香織(2006)「「ありがとう」と言われたら一鹿児島市における意識調査及び街頭調査を通して」『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』鹿児島県立短期大学地域研究所 第37号 pp.1-15
- 西原玲子(1994)「感謝に関する一考察」『日本語学』13巻7号 明治書院 pp.4-9
- 日本語記述文法研究会(2009) 『現代日本語文法』7 くろしお出版
- 野元菊雄(2001)「日本人の言語行動の特色」日本語教育学シリーズ〈第2巻〉『日本語行動論』飛田良文 編 おうふう pp. 103-127
- 橋本良明(2001)「コミュニケーション科学への「最初的一步」(深田博巳(編)コミュニケーション心理学—心理学的コミュニケーション論への招待)」『社会言語科学』第3巻第2号 社会言語科学会 pp.84-86
- 濱屋方子(2007) 『日本語における「挨拶」の諸相』 致良出版社
- 林 大(監修)(1982) 『図説日本語—グラフで見たことばの姿』 角川書店
- 福田一雄(2013)『対人関係の言語学—ポライトネスからの眺め』 開拓社
- 藤原浩史(1994)「平安和文の感謝」『日本語学』13巻7号 明治書院 pp.38-46
- 文化庁(1976)『言葉に関する問答集2』「ことば」シリーズ5
- 文化庁(1980)『話し言葉』「ことば」シリーズ12
- 彭 国躍(2005)「現代日本語の謝罪発話行為の類型と機能」『日本語学24巻4号』 pp.78-90
- 彭 飛(2005) 『日本語の「配慮表現」に関する研究—中国語との比較研究における諸問題』研究シリーズ第一巻 和泉書院
- 水谷 修(1990)「感謝する」『現代日本語コース中級Ⅱ』名古屋大学出版会 名古屋大学総合言語センター pp.1-27
- 三牧陽子(2013)『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ』くろしお出版
- 三宅和子(1993) 「「詫び」以外で使われる詫び表現—その多用化の実態とウチ・ソト・ヨソの関係」『日本語教育』82号 日本語教育学会 pp.134-146
- 三宅和子(1994) 「感謝の対照研究—日英対照研究—文化・社会を反映する言語行動」『日本語学』13巻7号 明治書院 pp.10-18
- 三宅和子(2011) 『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』 ひつじ書房
- 三宅和子(2002) 「ことばに現れる日本文化の志向性」(シンポジウム日本文学文化をどう考えるか) 『日本文学文化』2号 pp.8-14

- 三宅和子・野田尚史・生越直樹 (2012) 『「配慮」はどのように示されるか』 ひつじ書房
- 宮永国子 (2001) 「行動表現を考える」 日本語教育学シリーズ<第2巻> 飛田良文編 『日本語行動論』 おうふう pp. 9-51
- 森山卓郎 (1999) 「お礼とお詫び—関係修復のシステムとして」 『国文学—解釈と教材の研究』 第44巻第6号 学灯社 pp. 78-82
- 森山卓郎 (2003). 『コミュニケーション力をみがく—日本語表現の戦略』 日本放送出版協会
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2011) 『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門』 明治書院
- 山口和代 (1997) 「留学生の発話行為と文化的要因にかんする一考察—中国人および台湾人留学生を対象として」 『異文化間教育』 異文化間教育学会 11号 pp. 125-140
- 山本もと子 (2003). 「感謝の謝罪表現「すみません」—「すみません」が感謝と謝罪の両方の意味を持つわけ」 信州大学留学生センター紀要 第4号 pp. 1-13
- 吉岡泰夫 (2004) 「コミュニケーション意識と敬語行動にみるポライトネスの地域差・世代差」 『社会言語科学』 第7巻第1号 社会言語科学会 pp. 92-104
- 吉田 愛 (1995) 「「感謝」表現の相手に応じた使い分け：日英語対照研究」 日本女子大学大学院文学研究科紀要 1 pp. 78-61
- 頼 美麗 (2004) 『依頼における「お詫び・謝罪型」と「感謝型」の表現に関する考察—日本語母語話者と台湾人日本語学習者を中心に』 早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文
- 頼 美麗 (2008) 『依頼場面における「謝罪」と「感謝」—「待遇コミュニケーション」の観点から』 早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文
- 李 華勇 (2013) 「日中における「再度の感謝」に関する一考察」 『間谷論集』 第七号 日本語日本文化教育研究会 pp. 31-46
- 李 華勇 (2014) 「感謝場面における謝罪表現の対照研究—ポライトネスの観点から」 『日本研究論集』 第9号 チュラーロンコーン大学・大阪大学 pp. 14-28
- 李 善姫 (2006) 「日韓の「不満表明」に関する一考察—日本人学生と韓国人学生の比較を通して—」 『社会言語科学』 第8巻第2号 社会言語科学会 pp. 53-64
- 陈建民 (1991) 「汉语的道谢用语」 『语文知识』 1991年第12期 pp. 30-31

- 鄧炎昌・劉潤清 (1989) 『语言和文化—英汉语言文化对比』 外语教学与语言研究出版社
- 梁长岁 (2005) 「试分析日语的「感谢」」『内蒙古民族大学学报』(社会科学版) pp. 120-124
- 刘小珊 陈访泽(2002) 「从言语行为理论看日语的感谢行为」『广东外语外贸大学学报』 2002
年第1期 pp. 25-31
- 聂仁发 (2010) 「「谢谢」和「感谢」辨异」『语言研究』第30卷 第3期 pp. 76-79
- 史彤岚(2013) 「汉日言语行为的文化差异分析—以问候、致谢及道歉为例」『国际文化研究』
第17号 pp. 35-40
- Bargiela-Chiappini, F. & D. Z. Kádár (2011) *Politeness across Cultures*. Palgrave
Macmillan.
- Brown, P. & S. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*.
Cambridge University Press [田中典子監訳 (2011) 『ポライトネス—言語使用におけ
る、ある普遍現象』研究社]
- Coulmas, F. (1981) "Poison to your soul: Thanks and apologies contrastively viewed,"
In F. Coulmas (Ed.), *Conversational Routine: Explorations in Standardized
Communication Situations and Prepatterned Speech*. Mouton.
- Fairbrother, L. C. (2000) "Analysis of Interaction Management With a Party Situation,"
The Japanese Journal of Language in Society, Vol. 2 No. 2, pp. 33-42.
- Kádár, D. Z. & S. Mills (2011) *Politeness in East Asia*. Cambridge University Press.
- Leech, G. N. (1983) *Principles of Pragmatics*. Longman. [池上嘉・河上誓作訳(1987) 『語
用論』紀伊国屋書店]
- Ohashi, J. (2013) *Thanking and Politeness in Japanese—Balancing Acts in Interaction*.
Palgrave Macmillan.
- Pan, Y. (2000) *Politeness in Chinese Face-to-Face Interaction*. Elsevier Science.
- Pan, Y. & D. Kádár (2011) *Politeness in Historical and Contemporary Chinese*. Bloomsbury
Academic.
- Usami, M. (2002) *Discourse Politeness in Japanese Conversation*. Hituzi Syoboh.

資料タイトル一覧：

- 日本語：『白夜行』 (1～11話、558分、2006年放送)
『秘密』 (1～9話、441分、2010年放送)
『流れ星』 (1～10話、475分、2010年放送)
『同窓会～ラブアゲイン症候群』 (1～9話、438分、2010年放送)
『大切なことはすべてあなたが教えてくれた』 (1～10話、475分、2011年放送)
- 中国語：《幸福像花儿一样》 (1話、45分、2005年放送)
《蜗居》 (1～10話、450分、2009年放送)
《媳妇的美好时代》 (1～10話、400分、2010年放送)
《杜拉拉升职记》 (1～10話、426分、2010年放送)
《奋斗》 (1～10話、472分、2011年放送)
《家常菜》 (1～6話、270分、2011年放送)